

信 仰

はじめに

利根郡内の「民俗調査」は、片品村、白沢村と、すでに二回行われているので、水上の信仰も、前者と比較して考えることができる。特に隣り合せている片品と比較してみると、武尊神社は、片品、水上両地区とも篤く信仰されているが、片品にある日光様の信仰は水上にはない。十二様は同じように信仰されているもの、水上には、片品のような素朴な形態は、すでに失われているようである。片品においては、山の神のお使いとして活躍していたオコジの姿は、全く見られない。わずかに、湯ノ小屋で、オコジは、ひとさし指くらの小さい魚で、十二様の好物だという報告を得たのみである。

これと同じように、片品の時、多くの調査員が経験し、話題をにぎわしたセッチンピナ・セッチン神との対面もほとんど見られなかった。ただ俵に紙を巻きつけて、人形を作り便所の中においておいた、どんな意味があるか聞かなかった(谷川)という報告のみである。

このオコジ・セッチン神のみを指標として考えるのは、冒険であらうが、利根郡の片品川流域と、利根川流域とは、同じ山村ではあるが、異なる習俗を保っているようである。

講は、白沢村同様かつては盛んであったが、今度の戦争を境として、急速に衰えた。(上野 勇)

一、神社・神

赤城神社

平出の鎮守は赤城神社で林氏の先祖が建てたものというが、現社殿は宝暦三年建立のもので、間口七五、奥行六四、屋根軒平一五〇、奥行一九七、総高二一〇(いずれもセンチメートル)の神明造で、昭和三十年ごろ台座を作り、現在は覆屋がかけてある。境内には釜影様や愛宕様の石宮、若宮八幡、稲荷社、招魂社、日露戦役の戦死者の墓など多くの石



赤城神社(平出)(井田安雄撮影)



(左) 釜影神社の石宮(赤城神社境内)(平出)
(関口正己撮影)



赤城神社の燈籠（平出）

（関口正己撮影）

造物が建っている。一社に必ず三休祭つたものという。（平出）

赤城神社の祭り 昔は赤城神社のお祭りに地口行燈を作って、俳句や絵などを書いて家々や街道筋に飾った。また、道路から神社への道に林にろうそくをさした百八灯をあげた。

子供が神社の掃除をして待っていて、家々からオシトギと赤飯をホウノ木の葉にのせて供えにくると、上げるのをすぐ下げてその赤飯を分けてもらった。これをお別当（ベットウ）といった。近在からお客を呼んで大祭りだった。（平出）

赤城神社の杉 神社には夫婦杉があり、三本あって森の字の形をしていた。一本は昭和二十二、三年ごろ伐ったが、樹合約三百年だった。（平出）

赤城様のお使い 赤城神社の氏子は、カニが赤城様のお使いだから食ってはならないという。そこで、ウルシにかぶれた時にカニの汁がつけられなくてこまる。（平出）

秋葉神社

明治二十九年に、山口に火事があり、十二戸のうち九戸がやけた。次の火が出ないうちにとて、秋葉さまを勧請して来たという。山口の山にまつてある。祭日は、火事になった日を記念して旧の二月二十八日であったが現在では新の四月十日にきめた。

以前は山口と関ヶ原で合同でおまつりをしていたが、戸数がふえたので、現在では山口だけでまつっている。宿をきめて、以前はドブヲをのんだが、現在は酒をのんでいる。（山口）

大岩に秋葉様が祭つてあるが、そこが火事になった。火事の前日、荒木理一氏のおじいさんが湯アビをしていたら、虚空蔵様に火がみえた。おかしなと思つて虚空蔵様へ行つてみたが何ともなかったが、翌日火事になった。

秋葉様の杉を売つたのがたつたと言われている。（鹿野沢）

秋葉山・叢影山・金比羅様 虚空蔵様や十二様の祭祀されている水上駅背後の丘の真道を右に二百米位登り、その道から左に折れる細い山道を登ると大岩があり、その下に三つの石宮がある。向つて左から秋葉山・叢影山・金比羅宮である。

秋葉山の台右には、「明和三丙戌年九月吉日願主村中」とある。秋葉山は火伏せの神である。ある時、秋葉山の回りの杉を売つたところ、その年に火事があった。その次に杉を売るときにはその家では賛成しなかった。そこで杉五本は残しておくことにした。

叢影山の右側には「文化十三年」とある。石宮の中には「奉叢影山大神」というお札がある。金比羅様の右側には「明治二十九年三月二十三日建之」とある。中には「金比羅神宮」のお札がある。（鹿野沢）

朝日神社

もと諏訪神社であったが合併して朝日神社という。明治の頃八百円あれば神社の独立を保ち得たが、不足していたものは合併せざるを得なかった。結局朝日神社が拝殿、奥の院が本殿という形になっている。

奥の院がオスワ様で、旧七月二十七日夏祭りが行なわれる。村社となつて、規期で年三回祭りをやらねばならなくなった。四月、七月、十一月の三回である。二十五日が宵祭り、二十八日があとかたづけである。祭りに三層台を出して村を廻る。然し日清、日露、大東亜戦争と戦争のたびにこうした祭りは次第にうすくなつていった。



朝日神社（湯松曾）（池田秀夫撮影）



アタゴ様（谷川）（青木田子撮影）

青祭にはシメ縄を張り、二十七日に神主が通るまでそのままにしておき、祭日中村の人はシメ縄の中や奥の院には入れない。昔は奥の院に青年がおコモリをした。

なお諏訪神社は本県に多いが、利根川流域ではマキマツシ（川の流れが渦巻く所）にばかりあるという。

なおこの神社の境内に大きな柳の木がある。その上に俗に「ナマエの家」という家があった。今では谷川に引越して空地となっているが、柳の枝、葉で明治初期頃まで、傷薬を作っていた。これは家伝薬でカツバのキズ薬という一別項参照（湯松曾）

もと諏訪神社であったものに十二様を合祀して朝日神社とした。当時（明四二）八〇〇円あれば神社として独立できた。（湯松曾）

祭り

三幸神社（旧九月十九日）、愛宕神社（旧一月二十四日）、石尊様（旧七月一日）の祭りのときには、ミチガリをしながらドロコを背負いあ

げ、一戸一人参加して飲んだ。近親者に死者のあるものは、途中までしか行けなかった。

これらの祭りも、日清戦争後は、ムラで二升の清酒を買って飲むようになった。（粟沢）

大洗磯前神社

祭日は旧十二月五日、青木沢全体でまつる。世話は組長がした。この日は甘酒まつりで甘酒をつくって、おまつりに来た人に振舞った。（青木沢）

甘酒まつり 旧十二月五日、いそぎき神社のおまつりのとき、宿はまわり番で甘酒をつくる。青木沢の女衆と子どものおまつりである。米は各自が出し、そのほかのものはいゆる宿味噌木損の形をとっている。料理は山菜料理など、甘酒を出すので、塩気の料理をだす。こうじの金だけ全体で負担した。今までは夜のまつりであったが、昨年から昼間のまつりになった。あつまる人数は四十人から五十人ぐらゐ。

この神社はもと青木沢の三軒のうちでまつっていた。むかし、ここにはやりやまいがあったときに、よそから勧請したものである。明治の末ごろから青木沢全体でおまつりをするようになった。この神体は小石で、やまいの神さまという。（青木沢）

くもみ神社

伊豆の方から勧請した神さま。石宮があって、そこへ行く途中から、糸（白いもめん糸）をはって行って、お主にまきつけてくる。命づなをあげますといつて糸をあげて、何才まで、命をのぼしてくれとお願いをする。この神にお祈りすれば、体の弱い人は丈夫になるといわれている。（山口）

神明まつり

粟沢では、旧九月二十九日に、組ごとに神明まつりをしている。真庭組は十二軒、阿部組は十軒、小向組が十四軒で、小向組には桑原、阿部、木村、真庭、相模、奈良などの姓のものが加わっている。宿番（番長）

は、まわり番、朝げ神明様の掃除に行く。ノホリを立てる。もとは赤飯をたいた。戦時中は、夕食を持ち寄った。酒代は金で払う。餅は宿でついた(栗沢)
伊勢参り よほどの金持ちでないとお参りが出来なかった。明治四十



大峯神社本殿裏のお犬様(小仁田)
(中村和三部撮影)



大峯神社の神札と木版、社印(小仁田)
(中村和三部写真)



甘酒を竹筒に入れ杉の葉を栓にして、初午に大國神社に供える(小仁田大峯神社境内)
(中村和三部撮影)



大峯神社境内の大國神社のエビス造り(小仁田)
(中村和三部撮影)

だいた家々にお札と飯を配った。(湯原)
五、六人で組になって行く。



神明宮わきの石仏群(大滝沢)
(関口正己撮影)



猿田彦大神(湯原)(阿部 幸撮影)



神明宮(原)(関口正己撮影)

年頃、須藤勝重郎氏夫婦が行ったことは有名だった。経費は百円ぐらいだった。出発前には立ち振舞いというお祝いがあり人々は金や米などを持って出掛ける人の家に行く。見送りは小仁田の大峯様まで送ることになっていた。船に乗る日頃に船日持ちという祝いをした。その家に集りごちそうを食べるぐらいだった。安全を祈ることが目的だった。帰って来るとお金や米をいた

出掛ける前に、近所の人を寄んで、タチブルマイをし、留守宅では、陰膳をすえていた。行って来るのに約一カ月かかった。(鹿野沢)
 諏訪神社



諏訪神社 (湯原) (阿部 孝撮影)



諏訪神社 (湯原) (池田秀夫撮影)



羽里神社境内右からイブツタシマ様、十二様、八幡様 (幸知) (池田秀夫撮影)

今のお墓のあるあたりに上に諏訪神社があつたが、神仏混淆の問題の時、税金がかなわないといふのでとりつぶした。それ以外に心中事件もからんでいた。小日向の人とツナゴウの人が諏訪神社で心中した。ツナゴウの親の所に行き、「大穴の諏訪神社から下の方に金の御幣が飛んだ。」といつてから神社にきて男が包丁で女を刺し殺した。男は自分も刺したが死にきれず、六尺(禊)で首をつつた。これもとりこわした原因の一つであるといふ。こわした折、外宮は湯原の諏訪様にくれ、内宮は小仁田の大峰神社にくれた。昭和十四、五年頃まで、そこでお祭りの時には、御幣(お札)を大穴にだけだしてくれた。今は金をとる。諏訪神社の跡には道祖神など笹にうもれていたが、二、三年前に前の道路に出した。(大穴)

ご神体は蛇で、蛭をする時に鼠除けに借りてくる。月夜野町師の諏訪様に行つて、竹の筒の中へ水を入れ、おはらいを入れてしよつてきた。蛭が終るとなしに行く。

古い家には蛇がいるもので、三メートルもあるアオダイショウが、西の六軒の家を回り歩いてたことがある。昭和三十年代までいた。人に害を与えることはない。(西)

諏訪様は水に縁のある神様である。(大穴)

湯原の鎮守様は諏訪神社である。屋敷内にへびが出るや竹筒にオサゴ(米)を入れて神社に持って行き、「おすがたを見せないようにして下さい」と願を掛けると出なくなる。この辺一帯はへびが集つており床下に傷ついたりへびがいた。ここは湯が出るので湯治に来たともいわれた。へびの群、へびの夢を見ると運かよといふ。又年生れもよいとされている。仕事をしている上からたれさがられ、ねむく生れたことある話が多い。このことを「へびにおかされる」といふ。母谷にはヤマカガシの大きいへびがおり、すすき原の上に首を出し人を驚かせた話もある。(湯原)

へびは諏訪神社のお使いといひ、ねずみ除けに「オスワサマを借りて



湖水神社の舞殿
奥が一段高い。この内で獅子舞などもする(久保)
(関口正己撮影)



弁財天建立之由来 湖水神社境内にある(久保)
(関口正己撮影)

来る」といって、モロの諏訪さまから借りて来る。蚕の神で、竹の筒にゴ(イ)をさしたものを借りて来て、糞蚕をする二階などの産屋におくと、ねずみは絶対によりつかない。へびはながむしとよび、ねずみはよものといった。(大沢)

羽黒神社

もと幸知の鎮守であったが、明治四十二年の神社合併の時、沼田のシウカタ寺に売ってしまった。それを昭和三年に再建した。

四月十七日に祭りを行なう。神主にきよめてもらう。昔は余興もあったが、今は家々で赤飯をふかす程度。また十月に秋祭もしてみたが、勤め人が多いので、二三年前から廃止してしまった。(幸知)

谷川神社

谷川神社の奥の院のご神体は、椿の木の根で作ったものだといわれる。中程ではビシヤモンテンを作って越後にあり、先の方では浅草の観音様を彫った。従ってこの地方には椿の木がないといわれる。(湯松曾)

谷川岳は女人禁制だった。昭和の初め頃まで女が登ると山が荒れると



天王宮湖水神社のお札
弘化2年勅建と墨書
(久保) (関口正己撮影)



天王様(寺間)
(中村和二郎撮影)



天王宮湖水神社(藤原西組)
(井田安雄撮影)

いった。夕立などがあると今日は山に女が登ったのではないかなどといった。(大穴)

天王宮湖水神社

元の天王様が水没したので、現在地に建立したものの。平出・大滝沢・西久保・関ヶ原・第二等の地区の鎮守。暴れ神で、もとは旧六月二十四日に祭っていたが新七月二十八日になり、今は八月一日が祭日。(西)

八幡宮

阿部の本家は勘兵衛家だった(今は移転)。その後にある八幡宮は勘兵衛家で祭っていたが、戌亥八幡と呼び、その年生れの人がよくお祭りに来る。今でも綱子からも来る。(粟沢)



八幡宮石宮(寺間)(木村柏好撮影)



富士浅間神社(谷川)
(青木剛子撮影)

富士浅間神社

奥の院は一ノ倉谷の上にあった。今はなし。谷川温泉から徒歩で六時間かかる。そこに八面あった御正体(鏡)は現在二面しかない。須藤英夫さんがさげてきて、区長保管にした。

大正十三年水上村社にするために、神主の鈴木さんの家に行つてさがした。御正体一面がすすけて天井裏にあった。こすると金色である。当時の五両やるから浅間様にあげないかといったが、だめだという。その後沼田の古道具屋にだしたという。柳町の古道具屋だという。鈴木さんの子孫は死に絶えている。

昔は、浅間神社に参拝して、神社の裏の細い道から谷川岳に登った。神社には沓掛け柳があった。そこでワラジを新しくしてのぼり、帰るとそのワラジを柳にかける。万延の時、谷川の登山者があまり多くて、その柳が枯れたという。

境内には合祀された小さな木のお宮や、石宮がある。石宮の一つには、寛保元年の年号がある。

なお浅間神社奥の院に奉納せられたる御正体には「永禄八年」の銘がみられる。(谷川)

武尊神社

武尊山(標高二一五八m)の西北、藤原の部落から約四キロメートルほど入った所に武尊神社の本殿が鎮座する。旧水上村の村社で、拝殿の奥に納められている。元はオコモリ屋もあって、旧六月二十四日のヨイ祭りには神主を始め、氏子も泊つてオコモリした。現在の神主が昭和三十一年まで三年間オコモリして、以後やめたが、盛んなころは各戸から朝げに馬に乗つて来て、道刈りをして酒を飲み、オコモリ屋にころ寝したものである。女は十三才までしか、武尊神社にお参りできなかった。現在は組長が代表

して藤原全区から集まり道刈りをしたり、神主や氏子総代を中心に祭典を行なう。新八月一日午後一時より開式し、あと直会となる。直会の酒もりは神酒を茶碗に注ぎ、ミソ・キユウリ・柿の種などをさかんに飲み合う。二十五、六人で二列に向き合つて座りかたりにぎわう。自動車であつて、二、三時間で引き上げる人が多い。武尊神社のお祭には雨が降るといわれ、この日もわか雨があつた。

昭和三年まで神楽があり、里宮のある栗沢の部落の者が奉納していた。栗沢の武尊神社は四月二十五日に奉祭りだけ行なう。

武尊神社の宝物には、建久二年六月源頼朝寄進という鉄宮がある。流れ造り向拝付きで高さ約十七センチ、屋根幅十七・五センチ、同奥行二十二センチほどの小さなものである。

奉納品として、鉄剣三口、銅鏡二枚、神の鉢(木製品)一枚、その他古い神楽面五面などがあり、江戸時代の奉納額もある。

武運長久の神として、新潟県の信者も多いといわれる。(久保)

武尊神社奥の院 本殿の下の武尊川に裏見(うらみ)の滝が落下している脇の所に、小さな奥宮の祠(ほこら)がある。祠の中に小さい銅宮があり、屋根に「奉納御神前 藤原大芦村林大長坊」と刻まれている。本殿の鉄宮と類似した造りである。長さ三尺ほどの木刺が十三本ばかり



武尊神社の奥の宮 真見の滝の奥にまつられる(青木沢)
(関口正己撮影)



武尊神社の祭(青木沢)旧6月24日(昨年から8月1日)に祭る。
(関口正己撮影)



武尊神社の祭 拝殿内でナオライにうつる(青木沢)
(関口正己撮影)

あり「奉納武尊大神御広前 大正十四年六月二十五日 中島万次郎殿願主中島きわ」などと墨書したものがあつた。(久保)

裏見(うらみ)の滝 武尊神社奥宮のある所は武尊川に滝の落下する絶壁の内側の岩壁にあるので、その滝を「裏見の滝」と呼んでいる。一説には、林氏(先祖林七郎左衛門正通(福業佐渡守)という人が材木奉

行をしていて、沢の上流から用材を伐り出そうとしてウシ木を組んで流し出したが、この滝を落ちると用材が割れてしまい何回しても成功しなかつた。そのため恨みを残して千葉の佐倉に移されたので「恨みの滝」だともいわれる。(久保)

一畝田の氏神として武尊神社のりっぱな建物があつたが、昭和二十四、五年ごろ火事で焼けた。りっぱすぎて、その後再建できず、飯宮を作つてお祭りしたことがない。東山の武尊神社のお祭りの時に、こつちにお参りしてから本社へお参りした。

女衆は十三才までしかオセン(滝)をくぐって行つてならないので、男衆だけが一人以上行つた。奥の院をお参りして、オセンをくぐつてから本社へ行つた。まわりを道刈りして、お参りした。道ばたの杉の木所に二・五間×三間ぐらゐのオコモリ堂(神楽をする舞殿)があつて、そこへ毛布をしいてザコネをして、オコモリした。今はオコモリ堂がなくなり、オコモリもしいない。(一畝田)

この地方の霊山は何とも武尊、谷川の両山である。武尊山は昔は上には登らなかつたし、山開きもなかつた。村の人は今でも女人禁制である。藤原の武尊神社に、六月二十四日夜オコモリをして、翌二十五日朝神主が拝んでから、オコモリをした者は馬に乗つて登り、草一段刈つてきた。このときも武尊の頂上までは登らなかつた。

谷川岳は今では七月第一日曜が山開きになつてゐる。中世には登つてゐるが、それ以後は雨乞いに村中して登る程度で、そのほかには登らなかつた。女人禁制である。

月の八日、宝川には入らない。入つて満足に出た者はないといふ。(湯



武尊神社の神楽面 昔、神楽をしていた



武尊神社の鉄の宮
建久2年源頼朝寄
進という。
高さ17cm



武尊神社の上棟正遷宮札
安政5年のもの



武尊神社の奉納品
鉄刺3口



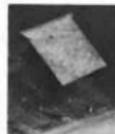
武尊神社の奉納鏡
昭治41年西藤原
佐藤氏奉納



武尊神社の奉納品(刀)
裏面「大正十四年六月二
十五日中島万次郎殿願主
中島きわ」



武尊神社の札
安永3年のもの



武尊神社奥の宮の
奉納品(銅宮)
銘文「奉納御神前藤
原大芦村林大長坊」

〔この一群、何れも青木沢、関口正己撮影〕



藤原武尊神社祭典(あつまっているのは藤原の役員とジッチョウ)

(井田安雄撮影)



武尊神社の祭のぼり 一の鳥居があった所で石宮が祭られる。神社へ2km(青木沢)

関口正己撮影)



武尊神社境内天王様 神楽面(スサノオノミコト)を奉納している(粟沢)

(池田秀夫撮影)



藤原武尊神社祭典(9月1日)(神主よりジッチョウさんへお札を渡しているところ)

(井田安雄撮影)



三島神社のご神体高さ23.5cm(青木沢)

(関口正己撮影)



武尊神社の十一面観音(粟沢)

(都丸九十一撮影)



藤原武尊神社祭典(井田安雄撮影)

松曾

武尊神社の氏子 武尊神社の氏子はゴマを作ってはいけない。また、ニワトリを飼ってはいけないとされている。(山口)

穂高神社 見沢に穂高神社の舞殿があってハッサクには大祭りや獅子舞をした。(平出)

おこもり 日露戦争に主人が出征したとき、おくさんたちは武尊さまにオガシヨをかけ、日をおこもりをお参りに出かけた。夕方にかけて一里余の道をおこもり、その夜はおこもりをして翌朝帰ることをくりかえしたが、そのおかげで二人ともけがもなく、金鶏勲章をもらって帰れた。二〇三高地攻略に手柄のあった一人は、帰国後の陛下の閣兵のとき直接名前をよば



八坂神社とワタゴ神社(鹿野沢) (佐藤 清撮影)



堂の石垣の銘文化十三
子年十月吉祥良農当所
発願主木郎甚平(小日向堂
本) (中村和三部撮影)



石宮 銘「天和次年五月」
坊主が將軍家の世つぎを
祈願した所という(萩ノ入)
(関口正己撮影)



鳥島のあったところ(湯原) (阿部 孝撮影)

れて労をねぎらわれたと
か。(須田員)

八坂神社とワタゴ様
写真の右が八坂様、左
がワタゴ様。

八坂神社の向って右側
に「文政三庚辰天八月吉
日」とある。七月二十三日
が祭日で、かつてはミコシ
が出た。今、ミコシはし
まってある。お参りの時
に八坂様の回りを三回ま
わると山犬にかじられな
いという。祭りの前には
今でも一軒一人は出て道
がりをする。祭神はスサ

ノオ。

ワタゴ様、以前は八坂様の参道の途中にあった。終戦後、営林署に土
地を分割した折に合祀した。ワタゴ様の台右には「明和八年、卯四月吉
日鹿ノ沢、吉木村中」とある。(鹿野沢)

若宮八幡

荒木組で祭る。

昔、ある六部がきて、一晩とめてくれというのでとめてやった。そこ
ろが風邪をひいて病みついた。そこで観音堂において皆で飼いごろしに
した。死んだので堂の前に埋めた。それが祟った。若宮八幡として祭れ
ばよいというので、十二月十三日に荒木組で順ぐりに宿をして祭った。
六部の背負ってきたお経があったが、セキジさんのところでみてもらっ
たら経をしまっておいてはいけないというので建明寺におさめた。(鹿野



土蔵入口のお札(小仁田) (中村和三郎撮影)



神だな(明川、大坪忠之輔氏方) (阪本英一撮影)



各種養生守護のお札(不動様、護国神社古峯神社)
(近藤義雄撮影)



神だなの一部(続)オシラヤマもここにまつる
(同上) (阪本英一撮影)



火防、盗賊除のお札とおはらい(湯原)
(阿部 孝撮影)



神だな(中島多花恵氏方)(大戸) (阪本英一撮影)



お札の木版(阿能川) 阿部 孝撮影



各地のお札をはった神棚(小仁田)
(近藤義雄撮影)



黒髪神社に奉納祈願した木太刀
戦時中の武運長久祈願
(関口正己撮影)



黒髪神社に奉納祈願した木太刀
(大滝沢)
(関口正己撮影)



荒神様に供えた丸い繭 (小仁田)
(近藤義雄撮影)

沢

昔、林家に山伏が訪れてきたが病氣になったので、治らないと思っ
て、荷の中から栗の実を出して植えるように言われて亡くなった。その栗
の木が丹波栗で、大きさが百四、五十センチメートルもあった。そのほ
か、経文・ホラ貝などが残っている。(平出)

石の鳥居を九つくぐると中気にならない。(大穴)

湯原稲荷

昔ある人が春先ボヤ切りをしていたら近くに土穴があり、そこに猫の
足あとぐらゐのものが見られ突然白狐が現われた。その場所に湯原稲荷
として祭った。その後移転したが今でも油揚げを供えると商売の家には
多く客があるとされている。(湯原)

明治の初めに鹿野沢の荒木門三郎、山口市十郎、木村要吉の三人が、
京都の伏見で位をとってきた。正一位、稲荷大明神の旗をたてた。どう
かしてお供えものを忘れていると、菅原根をバリバリとかいたという。
(鹿野沢)

夜泣きのとき稲荷様にオトウフをあげるとよいという。(鹿野沢)

屋敷稲荷 屋敷稲荷を祭ることはない。初午でもダンゴは作るが、屋
敷稲荷は祭らない。(平出)

いなりさんの石 いなりさんは丸い石が好きだという。大坪タメさん
の家は先祖代々オキエモンを襲名したが八代ほどでその後名を変えたと
ころ、それ以後男子に生まれず、いなりさんを拝んだところ男子が生ま
れるようになったという。そのとき丸い石を拝むとよかったというので
当主(十九代になる)もそうして男子に恵まれたという。(明川)

六・三 「九はカシラ、七・五のカタに、六・二ワキ、四ハラ、八マ
タ、一・三の足」という。六・三にあたるよけなければならぬ。オ
ガミヤに拝んでもらったり、稲荷様に「スミ豆腐を年の数だけあげます。」
というとい。(鹿野沢)



家敷稲荷（移転毎に建てた）（湯原、北貝F）
（阿部 孝撮影）



稲 荷 様（阿能川）（阿部 孝撮影）



屋敷稲荷（幸知）（都丸十九一撮影）



（右より）稲荷社、招魂社、日露戦没死者の碑
（平出）（関口正巳撮影） — 142 —



稲荷神社（湯原）（阿部 孝撮影）



屋敷稲荷の表口（湯原）（阿部 孝撮影）



屋敷稲荷のうら口（湯原）（阿部 孝撮影）



屋敷稲荷（湯ノ小屋）（上野 勇撮影）



豊丘折願の狐武尊神社（栗沢）

（都九十九一撮影）

オシラ様

蛋影（コカゲ）さんともいい、女の神で蛋の神様。橋詰では旧二月二十五日がコカゲ祭り、回り番の宿に一戸一人女衆が集まって祭り、飲み食いする。（西）おしらは女衆の神さまで、蛋の神さまである。おしらはいつも神棚にまつてある。おすがたはない。

小正月のときには、まゆだまを十六コつくって、桑の枝にさして、おしらさまに供えた。また、初午のときにも、十六コのだんごをつくって、一升ますに入れて神棚に供えた。（橋詰）

蛋影まつり

むかし、旧の二月二十五日に蛋影まつりをした。宿はまわり番、蛋をかかっていても、いなくとも、橋詰・見沢・平出の女の人が宿にあつまって、蛋影さまの掛軸をかざって酒もりをした。蛋影さまは蛋の神さまである。（橋詰）

妻妻信仰 茶の間の柱に荒神様のお札をはって置き、丸い餅がでけると荒神様にお供えする。（小仁田）

十二様

十二様のおまつりは、もとは二月十二日と十月十二日であった（現在はやっていない）。男衆が中心になってまつった。組長の世話で宿をきめて、食い講をした。あつまつたのは青木沢の人たちだけ。戦前までやつ



十二様（鹿野沢）

（佐藤 清撮影）

ていた。（青木沢）明治の末ころまで、春（四月ころ）と秋（十月ころ）の十二日に、十二まつりをした。五、六人くらいの村だから、何をしてもなく、酒をのんで勝手なことをいい、けんかをするくらいのことだった。赤飯とシトギダンゴをつくった。（湯ノ小屋）

十二様（十二講） 石宮の材料は、鹿野沢川の上流五キロ位のところにあるギヤクドウというところの石でギヤクドウ石といわれるものである。流になっているところだが、何故ギヤクドウというかは不明。境内は、現在年寄組の人達が草を刈ったりむしったり、また、掃や菊を植えたりしてある。

昔は十二講といえは盛んで、村中でやったものである。当番の家に集まって、山の神の掛軸の前で謡いをやった。『四海波静かに云々』を記憶している。今の豆腐屋さんの家を『ミヤモリ』といった。それは木村栄作さんが、十二様の宮守をしていたからである。（鹿野沢）

山の仕事始めは旧二月十一日よい祭り十二日祭り日として十二様を祭る。旧十一月十一日十二日は仕事しまいとして祭った。（湯原）

二月十一日がヨイマチで、宿がきまる。十二日がオヒマチで、一戸一人以上宿に行く。十二様の掛軸に手を合せて拝む。老人が謡いをやった。午前十時頃から酒を飲みはじめた。（鹿野沢）



十二様に納めたスカリカッチキ (寛沢)
(池田秀夫撮影)



阿能川の十二様 (阿能川) (阿部 孝撮影)



十二様 (左) 天神様 (右) (阿能川) (阿部 孝撮影)



あずまや様 (木造り) と十二様 (石造り)
(寺間セキ平) (中村和三郎撮影)

毎月十二日には、必ず灯明をあげた。園部さんの藤原の大ガマの近くには、十二様を石で刻んである。(大穴)

十二様は山に入ったところにもまつてある。二月十二日がおまつり。おまつりは什長のところでした。おとも子どもも集った。十二講は組ごとにした。むかしは、获野人と関・原の二組でよって十二講をしたという。(获野人)

むかしは山働きをよくしたので、皆十二様を祭った。宿は順繰りで、酒の肴を宿で作って出したものである。今はないが十二様の掛軸もあった。越後からきた人は、十二様は女であるという。(大穴)

十二講を新築した家やガランの大きい家でやった。山の神の掛軸もあった。(大穴)

十二講は二月十二日の晩で、区長宅が宿になる。とうふ汁、酒をみんな飲食する。十二日には入山しない。入山した者には木を伐らせない。又、不幸があると一週間は、けがれるので入山しない。(湯原)

十二講を炭焼きのものがした。ばんだい餅などはつくらなかった。(小仁田)

十二日には山に入り木を切ってはいけなさとされておりほとんど山仕事はしなかった。小日向では村中で十二講をした。宿は区長代理者の家が使われた。料理は豆腐が使われた。(小日向)

伐っては悪い木 タネギ 若木の威勢のよい木。

ミネの三股・沢の二股 お天狗様のとまり木という。

窓木

山に入っては悪い日 二月十二日と十月十二日だけ。ただし毎月の十二日は立木をかえしては悪いという。

室川の湯には月の八日には入らないという (湯検曾)

(湯検曾)



十二様のかげじ (湯絵曾)
(都丸十九一撮影)

十二様のオシミギ 三本立ちの松は、十二様のオシミギなので切つてはいけない。阿能川の人が、寺間の浪人屋敷の平に生えていた三本立ちの松を切ったところ、その人の子がその日にやけどしたという(寺間)

バンダイ餅 十二歳の時、山にウル米を持参してこれをたき、木の伐り口でヨキのミネでつぶす。長く丸めて、糸で切つて、小豆・きなこ砂糖などをつけた。家には持ち帰らない。(湯絵曾)

オコジョ 十二さまの好きなものはオコジョで、ひとさし指くらい小さい魚、頭の大きい、けつ小さいなもので、たらを小さくしたような姿だった。富山の薬屋が、年に一度来るときに「十二さまが好きだから」といってもつて来るもので、これを買って十二さまに上げた。(湯ノ小屋)

大妻・吾妻耶山信仰 寺間では、九月の九日、十九日、二十九日と三日二つの神をまつた。ふもとの寺間の小仁田の境に大妻神社がある。

二、仏教関係

観音さん



観音堂 たき置き場となる(師入)
(関口正己撮影)



観音堂 (寺間) (木村柏好撮影)

馬が死ぬと馬頭観世音をたてる。死体はシバステバという無税地に埋めた。

沼田の鍛冶町の正覚寺が馬頭観世音で、三月十八日がお祭りにあたり、お祭りに行くとき古い荷鞍などが納めてあった。(須田貝)

観音堂 藤原の萩野入にある観音様は馬の神さまである。馬が三才になると、三月十八日にここへおがみにきた。馬は持主が手入れをしておまいりに来た。おまいりに来た人は鞍馬をあげた。おまいりに来たのは、藤原の中六組全鞍からであった。おまつりの世話は什長がした。この日赤飯をたいた。戦前におまつりはやめになった。(萩野入)

かつて、鉄道開通以前は、今の江崎牛乳店のあたりにお堂があったが、道路にかかるといのでとりこわされた。観音堂境内にあったものは水上駅裏の山に持ってきて祭つた(写真参照)

写真一番左は、観音像が彫られた石塔。荒木理一さんが子供の頃、手



千手観音堂の棟札(表)「正徳元年」と墨書(青木沢)
(関口正己撮影)



観音様その他(鹿野沢)(佐藤 清撮影)



馬頭観音(鹿野沢)(佐藤 清撮影)



千手観音堂の古棟札、「応永十六年」と墨書
(関口正己撮影)



馬頭観音(湯原)
(阿部 孝撮影)



七曲りの一曲り毎にある
馬頭観音(阿能川)
(阿部 孝撮影)



旧道の馬頭様(高日向)(近藤義雄撮影)



馬頭観音(湯原)(阿部 孝撮影)



石像群(馬頭観世音、庚申塔、馬頭大土)(湯原)
(阿部 孝撮影)



虚空蔵様のお堂(鹿野沢)(佐藤 清撮影)



虚空蔵本尊(鹿野沢)
(佐藤 清撮影)

があるなどといったのを覚えているといふ。向って右側には「観世音菩薩」、「二十一夜待」、左側には、「宝曆七丑天六月吉日」とある。

写真左から二つめの石塔には、正面真中に「奉大乗妙典日本廻国 祥山玄瑞行者」とあり、その右に天下泰平、左に日月清明とある。石塔の右側には、「文化九年四月十二日、備中下道郡水内村新藏」とある。

左から三番目の石塔の字は磨滅して読めず。その隣りはショウツババアサンや僧の墓石であろうがよくわからな

い。(鹿野沢)
千手観音 青木沢に千手観音がまつてある。縁日は旧三月十八日、現在はおまつりなし。(青木沢)

馬頭観音 秋葉山神社への登り口の脇に馬頭観音三体がある。右二つには「享和三年亥七月吉日」とあり、一番右には「木村氏」と銘してある。左には「宝曆十三天」とある。(鹿野沢)

虚空蔵様

本尊は約四十匁、金箔は大部分落ちて黒くなっている。かつて火事の折、六地藏(本尊の厨子の脇にある木像)は三体焼けてしまった。

縁日はかつて三月十三日で、建明寺から坊さんがきて大般若をあげて盛大であった。親戚で泊りにきたりして、村をあげての行事であった。今も坊さんがきてお経をあげる。ドウジウバレエは現在には会館(公民館)でやる。祭日は現在のところ四月二十三日になっているが、その附近の日曜日にする。(鹿野沢)

虚空蔵様は関ヶ原にある。旧三月十三日がおまつり。虚空蔵様と観音様は仲が悪いという。観音様の日に照れば、虚空蔵様の日には降るとま

金比羅様

赤岩山に金比羅さまを祭っている。火伏せの神様で祭り始めてから火



子育地蔵（湯原）（阿部 孝撮影）



地蔵様その他（鹿野沢）（佐藤 清撮影）



寺間の観音堂前の六地蔵石幢
（近藤義雄撮影）



六地蔵（大穴）
（青木剛子撮影）



子育地蔵（粟沢）
（池田秀夫撮影）

事がないといわれている。春四月十日、秋十月十日にお祭りをする。くじを出すのが景品にマッチ、つけ木は出さなかった。（小日向）
金びら様は藤原の金びら山の中にまつてあった。旧十月十日がおまつり。仕長の家でおまつりの宿をした。神主をたのんできておがんだこともあった。お札などは出さなかった。（狹野人）
コンピラダル 四国のコンピラ様へお参りに行けないので、替りに酒ダルを川へ流してやると、拾った人が願々に運んで届けるのを手伝うので、ついに届くという。昔の人は信仰していたので、コンピラダルを拾った人が届けてくれた。（平出）

鹿野沢はモノ日に火事が多い。

明治三十八年三月十日、琴平様の祭の日に火事があった。その翌年から、三月十日を虚空蔵の庭そうじをする日にした。（鹿野沢）

地蔵様（その他）

写真左から二つ石宮があるが、お神明様と妙見様と聞いていたが、どちらがどうなのか荒木理一さんにも分らぬという。左端の石宮には、「文化十天九月吉日荒木氏」とあり、次の石宮には、「壬子三月三日荒木氏」と彫ってある。

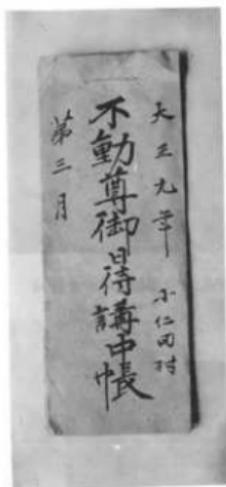
地蔵様には今でも、赤いボウシと赤いアテンコ（ヨダレ掛け）を毎年あげる人がいる。（写真参照）山口せんさんという人だそうである。

明治二十年頃、湯原で一日おき位に火事があったことがある。火事の折、利根川の水をかけて消火した入道がある。火事がひけて、どこにいろかど役場のところの橋附近でみていると、入道は水上駅の裏山あたりでみえなくなった。人々は鹿野沢の地蔵様が消してくれたのだといった。

地蔵様の右隣の石仏は多分観音様であろう。（地元の人にもよくわからぬいが、この土地では、二十一夜持が観音様と結びついている点から類推できる。）台石の正面に、「普門品供養」、左側に、「二十一夜供養」、右側に、「享和三亥九月吉日」とある。

水上駅の裏山にもとから祭られていたのはこの写真にある神仏だけで

ある。あとの虚空蔵様、十二様などは、水上駅が出来た折に他の場所から移されたものである。水上駅（上越線）は山を中腹からけずり取って作ったのである。（鹿野沢）



不動尊御日待講中帳（小仁田）
（中村和二郎撮影）



小仁田の不動様の版木（近藤義雄撮影）

不動様

栗生沢の物見塚にまつてある不動様は、新田義貞の四天王栗生左衛門尉が三・七・二十一日の願をかけた。東に権現・西に狐尾」という場所が願をかけるのによい場所といわれ、東の高日向に権現があり、西に狐尾があるので願をかけたところという。もと高日向の権現様は小仁田にあったともいわれている。（栗生沢）

盆の十三日に祭ったが、今は九月六日に祭る。（原）
薬師さま

平出の薬師さまは日の神さま、ご縁日は七日、十一日、二十一日。（平出）

湯ノ小屋薬師 十二薬師といって十二の薬師さんがあり、昔はさかんだった。大せいの人に来てフブキバクちもしたが、近所の子どもの遊び場にもなって、小さい仏さんに着物を着せたり、持ち出ししたりして、いまは何体もない。昔から時々薬師さんに針をさしてあったことがあるが、何のためか知らない。イノリクギだろ。（湯ノ小屋）

湯前薬師といって、温泉の神で、病気を直す。四月八日、十月十日に建明寺から坊さんがきて経をあげる。村の人が寄って福引きをしたり、夜、和讃をしたりする。（谷川）

湯元になつてゐる薬師の祭りは旧四月八日であった。まわり番で宿をつとめ、米を出しあつて甘酒をつくつた。当日は集まつた者たちが甘酒を飲んだ。福引を出したこともあつて賑わつたが、今は特にしない。（湯前）

目の悪い人が願をかけ、治ると「め」の字を自分の年だけ書いて願果しに納めた。もとは二間半四方の堂があつたが、台風で潰れてしまつて、木像の薬師が数体ある。例祭は九月で、このときはダンゴをあげ子供に分けてやつた。仏像には次のような銘文があり、新治地区との交流を示す資料である。

為ニ親菩提



阿部薬師堂の奉納札(裏) 高さ左 57 cm 右
47、5 cm (一献田)

(関口正己撮影)



阿部薬師 (一献田) (井田安雄撮影)



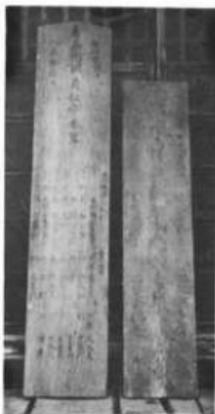
阿部家の先祖様 銘「寛永二
年四月二十七日」(一献田)

(関口正己撮影)



阿部薬師堂の奉納札(表) 左文政2年、
右享和3年 (一献田)

(関口正己撮影)



阿部薬師堂の棟札(裏) 寛
政10年 (一献田)

(関口正己撮影)



阿部薬師堂の棟札(表) 高さ
左 153 m、右 129 cm (一献田)

(関口正己撮影)



阿部家の墓(湯檢曾)(池田秀夫撮影)



柄鏡
銘「天下一藤原家重」
径 18 cm
阿部家の先祖が平泉から
持参したという。(一畝田)

(関口正己撮影)

施主 峰須川村

川合作右衛門

また、体内銘のある小さな薬師もあり、その銘文は次のとおりである。

正徳二年辰六月吉日

洛陽大宮方

大仏師武田 花押

将監

(小仁田)

阿部氏の先祖が奥州から落ちてきた時に薬師様や熊野様を持ってきたらしい。目を患った時に、紙に「め」の字を年の数だけ書いて上げると、目が治るといふ。「目を治してくれば一尺なり一丈なりのキレ(布)を上げるから」とお願いしておき、治ればキレを上げる。キレは赤でも黄でも好みの色でよい。今はあまり信心しなくなった。(一畝田)

薬師堂には四寸角で長さ七寸ほどの木「キレ」がいくつも上げてあった。これを下駄のように歩いて歩く足が丈夫になるといふので、子ど



湯善薬師堂の標札一寛政9年(阿能川)

(阿部 孝撮影)

ものころ、がたがたはいたものである。はな緒もないのがいくつもあつたが、全部燃してしまった。昔の人は足を大事にしたらしい。(一畝田)

阿部薬師の縁日は月の七日、八日、二十一日でにぎやかだった。近くに造り酒屋があり、寄って酒を飲んで遊んだ。(青木沢)

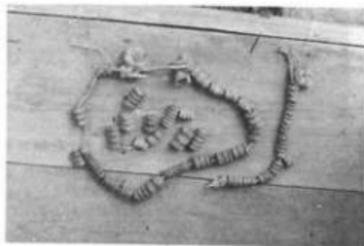
湯善薬師 昔、向平にお湯が出ていたが、宿の女中をむごく酷使したため、女中が湯が出なくなれば自由の身になれると思ひ、馬の骨を湯の中に投げ入れたところ湯が谷川に逃げてしまった。そこには湯善薬師が祭られている。湯原の野火が阿能川まではいって来て人家も危くなったとき、この薬師様が出て火を防いでくれた。その際片手が焼けてなくなり全身黒くなったことである。現在も片手なく真黒く焼けた姿である。(阿能川)

湯善薬師の義貫坊 昔湯善薬師に義貫坊という坊が住んでおったが寂滅後、奈女沢の敷島屋に冬のある晩一人の旅僧が泊りをたのんだが、断られ宿もなく雪の中で死んでしまった。

その後、敷島屋のけやきに義貫坊の化身が住みつき、その家が不幸になるたびの占いにこの旅僧であった義貫坊のたたりだとてた。明治初年に出たというへびが昭和四十年にも出たという話である。 位碑は現存



小仁田の業師堂（近藤義雄撮影）



百万遍の珠敷（小仁田業師堂）（近藤義雄撮影）



建明寺境内（湯原字若栗）（木村柏好撮影）



千代の松根の石仏
（湯ノ小屋）
（阪本英一撮影）



三毛猫供養 昭和二年二
月吉日東水敬筆（小日向）
（中村和三郎撮影）



湯善業師像（火災の時活やくして片手
なく全身焼くと伝えられる）（阿能川）
（阿部 孝撮影）

しており「義賢上座」となっている。（阿能川）
建明寺厨子の棟札（川上）





庚申塔（大穴）（青木則子撮影）



庚申塔（平出）（関口正己撮影）



庚申塔 安政7年（阿能川）
（阿部 孝撮影）



庚申塔（小仁田字日影）
（木村柏好撮影）



供養塔 宝曆2年（阿能川）
（阿部 孝撮影）



庚申塔（小仁田）（阿部 孝撮影）



庚申供養塔、二十三夜供養
宝曆2年（阿能川）
（阿部 孝撮影）



庚申塔（大穴）（青木則子撮影）



庚申塔（湯原）（阿部 孝撮影）

坊さんの石塔を長袖の石塔という。いびると罰があたるといふ。(谷川)
藤原の応永寺は迦葉山の隠居寺であるから格が高いといふ。(大穴)

三、講

えびす講

十二月二十日だが、雪が降るので雪のない間にやった。大工・ソマ・木びきなどの職人会で、二軒の店に集まって話し合い、日当を決めたりした。そのあと、酒を飲んだ。(青木沢)

観音講

馬を持っていく人が講員。旧三月十八日の夜、宿は仲間の中で交代でやった。

これは信心よりも駄賃ぎめが主であった。むかしは、ほとんどの家に馬がいて、農閑期に駄賃づけをした。木炭をはこんだ。水上の小日向が



左庚申塔、(天保14年)右道祖神(女神が右足をふみ出している)(一畝田) (関口正己撮影)



庚申塔など石造物を調べる(平出) (関口正己撮影)

集散地で、藤原からそこまで四里あった。かえりの荷は日用品とか、近所の人などに頼まれたものであった。(萩野入)

庚申講

米がとれてから、庚申まちをした。一年に一回であった。

庚申さまは猿田彦さまである。特に百姓の神とはいっていない。

このときは、めしの食いつこをした。一升めしを食べる人がムラに何人かはいた。(萩野入)

ひと山越えた赤谷部落と庚申講をしていた。この夜はおたか盛りを強いることになっていた。(阿能川)

庚申塔が村にあるから昔はやったのであろうが、今の年寄り衆の記憶にはない。(大穴)

庚申講をやった例は聞かない。ただ「うんと食べて、ブツンという音がしたから腹がさけたと思ったら、モモヒキが切れた」という話を子供の頃聞いたことがあるので、かつてはやったことがあるのであろう。(鹿野沢)

希望者が寄って、小豆飯を食べた。

以前、木村ゴヘイという人が、庚申のとき小豆飯をオオマクライして、モモヒキのひもを切ったという。(鹿野沢)

お庚申待 一年に六回百姓衆がやっていった。十軒位の組で、この間までやった。(谷川)

年六回行方。オヒマチといっても、寄って飲むだけ。(谷川)

カノエサルの日、講はないが、各家庭が居酒屋で酒を買ってきて飲む。

またこの日、小豆がゆを作って食ふ。(湯増曾)

七人講で若え衆七人が食いつこをする。酒一升飲んでから、白っかゆを一升飲食いっこしたり、うどん粉一升を一人分としてぶっついておいて、それをどうでも(どうしても)食うことになっている。

これは、大病した時に「七人講するから治してくれ」と村の鎮守や庚

申さまに祈願するので、病人が治った家の上ってやる。そこで食の強い人は「七人講するからぜひ来てくれ」と頼まれて行ったこともある。(青木沢)

小仁田宇日影の庚申塔

(右) 宝曆三癸酉天

庚申供養塔 講中惣村中

九月吉旦

月天

(中央)

青面金剛像 下に二鶏と三猿

日天

(左) 南無大悲大慈願世音菩薩

講中

水神待

井戸替えた日に、酒を飲むくらい。水神待といった。鈴木宏寿宅の井戸は、水が引けたことがない。(小仁田)

太子講

旧十二月二十三日が太子講で、小豆のお粥にかやの箸をつけて供えた。「デーシツァケのアクトッ隠シ」とい、このころ雪が降るものだという(小仁田)

12月に行なわれ柳(北貝戸)かや(下村)の二尺程の長箸で小豆がゆを食べる。神棚へ二膳あげる。(湯原)

天神講

村中の子供が宿によってオジュメシとトウフ汁を食べた。戦争でやめた。(鹿野沢)

男女合同でした。小豆と米二合持寄り、小豆飯をたいてお供えし、参



二十一夜供養 寛政3年、
講中17人(阿能川)
(阿部 孝撮影)

会者で食べた。いまは子供会になっている(小仁田)。

天神まじ。二月二十四日。

水神まじ。二月二十七日、十一月二十七日。一軒で一人ずつ集まる。こへいを切って水神、鬼子母神にまつる。組の中で輪番。(湯原)

二十一夜待

昔は二十一夜待ちをした。その日、村中の人かヤドに集まって飲食した。

その夜、七生仏のオガンシヨウ果しが行なわれる場合があった。これは大病にかかった人が、かけるお願で、それによって九死に一生を得た場合は、二十一夜の晩七人の人に七升のうどんを食べてもらう。その時女衆が気をきかしてうどん粉をふるいにかけて計ってくれると何とか食べられるが(拵の中につめられないで、そっと入るから)杓子で拵の中にすくいこまれると(粉がつまるので)食べるのに骨を折る。

九死に一生というような大病を病むと、近所の人を合せて七人で七升うどんをたべ、オガンシヨウハタシの約束をする。これを七升ブチのオガンシヨウという。治ると旧の二十一夜の月の上るまでに、うどん粉七升でうどんを作って七人にたのんでたべる。(幸知)

二十二夜講

小仁田、寺間では、二十二日の月のあがるのを拝む行事があった。病



千手観音(左) 二十一夜供養塔(右) (阿能川) (阿部 孝撮影) 明治40年



地藏堂と21夜侍 彦中侍、23夜侍の碑 (幸知) (池田秀夫撮影)

人があると二十二夜様に願をかけ、丈夫になると病人の家を宿にして、七人が組になって、各人一升の粉をもちより、それでうどんをつくって月のあるまでに食べた。このとき、月には一升の粉でダンゴをつくり、一人前の膳にそれを添えて進ぜ、水とロケットをあげた。この月にあげたのも月のある前に食べなければいけないといわれるので大変であった。これを一升ぶち(一升の粉でうどんをつくった意)という。これを女衆がするのだがら大変である(高日向、小仁田、寺間、川上)

二十三夜様

高日向、川上には、二十三夜の月のあるのを拝む女の行事があった。小仁田には「宝曆三年」の二十三夜様がある。この夜は、小豆がゆを煮て神棚にあげた。これは各家々でやる行事であった(川上)。

百姓の神で、田の二十三日に集って、アズキガユ、ドロコトでたべて豊作を折った。これは日清戦争後やめた。(幸知)

三夜様は観音様である。毎月男の人が集まって観音様をあげた。(大穴) 明治四十一年生れの人二十五、六の頃までやった。大穴ではこの講が一番遅くまで残った。男衆がやったというより、家族全員が宿に集まって、当時の歌をうたったりした。「俺は河原のカレスズキ」などよくうたった。宿はもち回りで、年に何回かやった。(大穴)

七人講を作っていて、病氣などの願をかけて治ると、一升うどんを作り、二十三夜の月が出るまでに食べることを、戦前にしていた。(平出) むかしは、三夜さまの晩には、よそでおまつりをしたようだが、最近では、今夜は三夜さまだからまつるべえと、米の粉のだんごをつくって、お月さまにあげ、おみきの一杯もあげて祝う程度。(平出) 小豆粥を食べる。(鹿野沢) 月が出るまで、起きているというが、実際はやったことがない。

貫前神社の講

戦前、希望者が集まって、四月八日に貫前神社へ日廻りで代参を出した。(鹿野沢)

三ツ峯講

小仁田には、毎年一回秩父へ代参をたて、御春風を借りてくる三ツ峯講がある。この講は、毎月中のオタンチにオタキアゲをする。このとき



三峯講中のお札(小仁田)

(近藤義雄撮影)

は女衆は手を出さないで男衆が一切する。

代参のたてかたは、一五〇六世帯が二軒ずつ組んで代表になり、講金として各世帯から五〇〇円宛納める。代表者二人は、行くときは宿泊しても、帰りは途中よりしないで帰らなければいけないという。御利益は火難、盗難除け、糞蛋当てなどといひ、お札は重宝などにはる。鼠を防ぐともいわれている。(小仁田)。

学校うらの三峯様は山犬を祭った。野あらし、火防せを兼ねて祭る。講があり昭和四十四年は五十人あったが昭和四十五年になって倍に増えた。講で参拝してご神体を借りて来て、毎月十日にはオセンマイとオカシラツキを上げている。以前はツトツコを作りオタキアゲを供えていた。(湯原)

代参講

榛名講、迦葉山講、鹿島講、伊勢講があった。

鹿島講は、栗生沢だけ小字全戸(八世帯)加入で、代表者が揃ってくとオヒマチをする。このときは豆いり、にしめてお茶をのむ程度で、講員にお札を配っておわる。(小仁田)。

講

三峯講 昭和四十五年百人になった。

秩父講

古峯原講 沼田が中心で百人以上いた。

榛名講

かしょう山講 小日向にはない。

秋葉講 火防せ

成田山 よその人が多い。

八海山 長い竹ざおの先に禿ろうそくを立て上げた。(湯原)

二十三夜待、秋葉火待、天神待、キノエネ講、庚申待などがある。気の合った人同志の飲み食いするあつまりである。(大穴)

古峯が原講、八海講、三峯講、榛名神社講、宗吾神社講、秋葉講、洪川桶荷講があった(小日向)

三夜講

気のあった者が集まって、小豆がゆを食べながら、遊ぶ。宿は輪番。

庚申講

飯を高盛りにして食べ放たさい。赤谷と庚申講をしていた。(阿能川)

お日待

三峯講、古峯原講のお日待には、お札をくばる。(小仁田)

四、その他の信仰

エノキ様

昔、大きな榎があった。水上の人が江戸に行つて熊ヶ谷あたりまでくと鹿野沢の榎がみえたという。秋、こなしものなどするときは、午後一



エシマ大王 応永寺入口にあり、ショウズカバアサンと並ぶ(山口) (関口正己撮影)



お天とう様(石)(阿能川)(阿部 孝撮影)



三宝大荒神（小仁田）
（中村和三郎撮影）



三宝大荒神 荒神さまが供えてあり、虫神様としても信仰されている（小仁田）
（中村和三郎撮影）



ショウズカバアサン カゼの時：ソを口に塗る 応永寺入口に所在（山口）
（関口正己撮影）

時頃になると、鹿野沢中が日陰になる。枝からおろして売った。根元を切ったら白い血がでた。利根川にころがしこんだが水が流れない。一晩で水がさかのぼった。そこで石宮を荒木組で作り、覆の霊をなくさめた。これをエノキ様という。（鹿野沢）



墓地内にある十王（小仁田）（近藤義雄撮影）

風邪神

風邪をひくと、風邪神を送り出すとよいといっているので、豆をいって三本辻におくと直る。（鹿野沢）

コンジシ様のいる方をいじると悪い。旦那さんが死んだ例もある。方は毎年変わる。（鹿野沢）

ショウツカバアサン

武蔵山応永寺の入口にエンマ大王と並んで石像がある。子どもがカゼの時にお参りして、ミソを口に付けて拜む。カゼが治ると前かけを付けて上げる。（山口）

ダイロクテン様

一畝田に入る曲り角の岩場に石宮があり、ここに落ち着いた先祖が祭つ



ダイロクテン様 曲り角にあり、もと大ワラジを供えた 元治元年建立、16弁菊花紋あり高さ94cm（一畝田）

（関口正己撮影）



道祖神 富士浅間神社境内(谷川)
(青木則子撮影)



道祖神(青木沢)享和元年辛酉五月吉日施主 邑中(井田安雄撮影)



道祖神、十二様、不明の石宮(鳥居の左柱に半分かくれている。)
(鹿野沢) (佐藤 清撮影)



道祖神 (鹿野沢)
(青木則子撮影)



道祖神 宝暦2年(阿能川)
(阿部 孝撮影)



道祖神(鹿野沢)
(佐藤 清撮影)



道祖神(小日向)
(阿部 孝撮影)



道祖神(谷川)
(青木則子撮影)



道祖神—宝暦2年(灌原北見戸)
(阿部 孝撮影)



道祖神、馬頭観音、庚申塔、キノエネ塔 (谷川) (青木則子撮影)



道祖神、庚申塔 (万延元年) (湯原) (阿部 孝撮影)

た。その人が足を患ったが治ったので、大きなわらじを供えた。傍の松の太木に大わらじを片方だけ下げて拜むと、足が丈夫になりけがをしな
いと、たくさん下げてあった。(一献田)

道祖神

向って右側に「宝曆九巳卯年、九月吉日」とある。写真だと一寸分り
にくい、男が笠、女がヒサゴを持っている。

真中の石宮が十二様で、右に道祖神、左は正体不明という石宮である。
行事としては、門松を集めて、一月十四日に燃やす。昔は鉄道官舎の
所で川原に行く途中でやったが、今では川原でやる。厄年の人が金(一
円玉か十円玉)をまく。灰になってから子供が拾う。その金は持ってい
ないでその日に使えといわれている。(鹿野沢)

道祖神様の前に木の俵をたて、それにお椀のオサラ(蓋)に穴をあけ
て糸につるしたものをおかけた。(谷川)

雪の少なかつた年に、雨で庭の土が流れたので、他所から土をもつて

きて敷いた。

そのあと、餅つきするとき、火種を雪の中に入れて消して、それを、翌
朝火をつけにくくなるので、雪から出して軒においた。その晩それが燃
えて火事になった。それを土荒神様のたたりと言っている。(鹿野沢)

八海山

八朔(田)に八海山を祭った。竹竿の先に提灯をつける。八海山から
この提灯がみえるという。昔は講があつて代参の人が山にお籠りをした
が、そういう人は幸せだという。(大穴)

八海山 昔は清水越えて八海山にお参をした人が多かった。往復
に四泊はしなければならなかった。六日町に一泊、行者屋へ一泊、八海
山でおこもり一晩で帰りに途中一夜であった。八海山であればどこに荷
物を置いても盗まれることはなく、草むらや木の枝に荷物をつるしてお
いて身軽になって登った。女性は登れなかった。頂上には月の池、目の
池がありほうふらが一ぱいいた。その水を紙にひたして来て、病気の時
は水の中にその紙をひたし、その水を飲むと治るとされていた。(小日向)

お札立て 神参りでできない人が、代りに神様のお札を道はたに立てて
おき、お参りしてくださいと折っておく。すると、お参りに通りかかっ
た人がつぎつぎに運んで行って、ついに神社まで届くという。八海山の
お札なごを立てたことがある。(平出)

便所の神

俵に紙を巻きつけて人形を作り便所の中においておいた。どんな意味
があるか聞かなかつた。(谷川)

ほうそう神

青木沢にほうそう神(石宮)がまつつてある。ここへは青木沢の人た
ちがおまじりにくる。二才ぐらいのときにほうそうをうる。ほうそう
がつくと、おたなをつくり、赤いしめをはって赤飯をのせて家中のもの
で三本辻(おくりだす)。そのこりの赤飯をここへもつてきてお供えす
る。(青木沢)



春祈禱(高日向 区長高柳喜作方入口)

(木村柏好撮影)



ホウソウ神

種痘すると棚を作ってここへ送り出す。
配りジメヤハナが奉納してある。

(関口正己撮影)



ミソナメジイサン パアサン (鹿野沢)

佐藤 清撮影)

サン俵に、赤い幣束を立てて、三本辻の木にさげておく。
ホウソウが軽くつくようにとやる。(谷川)
サン俵に赤い幣束を三本たて、赤飯をのせて三本辻へ送り出す。(大穴)
豆木で棚を作って、五色の「エイソク」を立て、三本辻につるして送った。
(川上・小仁田)

三島嶺

三島嶺は青木沢のうぶすなさまである。祭日は旧九月二十八日。組長が世話をする。各家では赤飯をたいて、親類のものを招待した。戦前は、部落ごとにオクンチの日をちがえて、親類のものをよびっこしたものである。(青木沢)

ミソナメジイサン、パアサン

普通、ショウズカジイサン、パアサンといわれるものをここでは、ミソナメとよぶ。風邪をひいた時、「直してくればミソをあげます。」とオガシシヨをかける。直ると口のところになすってやった。

隣りに鎮座する石の六地藏とともにかって観音堂(今の江崎さんという牛乳屋のところにあったが、鉄道開通の時、道路にかかるといふのとりにこわした)にあった。今、六地藏の首一つもなし。(ミソナメパアサンの隣りに一つみえる——写真参照)。(鹿野沢)

百番供養塔

川上部落の南端の字東原の畑中に、中世の五輪塔の部分がかためられ、そこに供養塔が一基ある。この地はもと堂のあったところともいわれ堂屋敷といつてこの部分だけ耕作されないで残っている。石塔には次のような銘文がある。

安永四年乙未十月吉日

奉納 百番供養塔

紀州名草郡鳴神村家願

無言参り

産泰様へ願をかけてすつと無言でお参りすることもある。(半出)

(川上)



百番供養塔（大穴）
（青木則子撮影）



皆共成仏道 三千日供養之塔
栗生沢村 正徳二辰年七月朔日
（小仁田幸佐原の墓地）
（中村和三部撮影）



百番供養塔（阿能川）
（阿部 孝撮影）



普門品経、供養塔、寛政
七年（一面）

百万遍供養塔 明治二十一年
（一面）（湯原）

（阿部 孝撮影）



普門品供養 寛政十一年
（阿能川）

（阿部 孝撮影）



念仏百万遍供養（阿能川）

（阿部 孝撮影）



文化七庚午五月吉日
十六夜待供養塔 願主当
所善男女 (高日向)
(中村和二郎撮影)



文化元星舎甲子十月吉日
大日講供養 小仁田講中
(小仁田幸佐原の墓地)
(中村和二郎撮影)



供養塔 (高日向)
(木村柏好撮影)



宝きょう印塔 (綱子)
(池田秀夫撮影)



宝きょう印塔 寛保三年
(湯原北見戸)
(阿部 幸撮影)



供養塔 (大穴)
(青木則子撮影)



念仏供養塔—安永七年
(阿能川)

(阿部 孝撮影)



経墓(銘、寛政十二庚申天
九月吉日改之 願主村中)

(綱子)

(滝田秀夫撮影)



カザマツリ 武尊神社のお札を道ばたに
たてる (平出)

(関口正己撮影)

がす。山を荒せば神様が怒って雨を降らせるとい
た。また山をけがすと神様は雨を降らして流し清め
るともいう。こうして降雨を願った。

日露戦争頃までこうしたことをした。(湯松曾)

谷川岳にお参りに行った。道を間違えて土樽に下
りてしままい帰らないということでも部落中のさわぎと
なったこともある。(小日向)

風まつりのお札

武尊さまのおまつりのときに、風まつりのお札を
じつちようをつうじて各部落でもらってくる。こ
れを部落のおもなところなたてた。供養碑とか石碑
のたっているようなところに、このお札をたてた。

(狹野人)

二百十日に行なう。風が吹かない様に。川原にお
んべろをつけた竹をたて、石を積んでおく。顔を川
につけて清めをする。その後、みんな酒を飲む。病人は人に頼んでし
てもらおう。オガシシヨバタシは九月二十九日。湯原神社で甘酒を出して
飲ませる。(湯原)

風神様

雪山のオネに石祠がある。二百十日に祀る。この日ミチガリをして、
お参りをし、オミキ・オサゴ・ナミノハナを進ぜ、村人はオミキを飲む。

(湯松曾)

カゼシズメ

九月一日。神主に家で拝んでもらい、お札(風の神)をもらい、上下
の村境に竹を立て、これにシメを張りお札を結えて祀る。またこの日村
の道を人足を割当ててミチガリをする。この御苦勞賃に区費で酒二升を、
あとは一戸百円徴収して酒を買足して皆で飲む。

雨が続きとテンキマツリといって酒を飲む。(粟沢)

モノダチ
病気をなおすために願かけする時に茶を飲まないから直してくれと
か、モノダチする。(平出)

天気まつり

雨が降り続いて困るとき、舞台にみんな集まって折願祭を行ない、
オミキで拝んでから向うの山へ上り、生木を切り、ドンドンヤキのよう
に積み上げて大火を燃した。(大声)

雨乞い

水不足で田植えができないときなど、谷川岳に登って騒がせてやる。
ワァワァいながら登って行く。また石をころがしたりもする。(大穴)

昔はやったという話は聞くが、今は全然やらない。(谷川)
村中一戸一人、ミノを着て、ワラジばきで谷川に登る。そして石を転

大風が吹くと鎌を木に結びつけた。(谷川)

御嶽敷の行者

鈴木吉五郎という行者がいた。火渡りもやった。折禱・地まつり、ほとんどこの人に頼んだ。いかだ流しの親方でもあった。(湯原)

オガンシ

病氣などのとき、なおしてくれれば願バタシのほりを上げます、とか、木の大刀を上げますといって紳さまにオガンシをかけることがある。願バタシのほりは、さらし布の小さいものに名を書いて上げる。

(明川)

三りんぼう

三りんぼうの日に風呂をたてて近所の人を入れると、近所の家が倒れて自分の家がよくなるといわれていた。しかし、物をくれたりしても知らないように返しておくとか反対に相手の家が不運になるといわれた。(阿能川)

人の一生

はじめに

二、三の特徴点を挙げてまえがきとしたい。

水上町はあらゆる面で隣接の新潟県との関係が非常に深い。大穴あたりでは新潟と姻戚関係のない家が珍らしい位である。新潟から出稼ぎにきて住みついた人の親類縁者から嫁を買う例が大部分であるという。しかし、水上から新潟に嫁ぐ例が殆んどないというのも婚姻圏における特徴の一つである。県民性の違いもさることながら、「嫁に行くなら小使の距離だけでも下に行け」という採集された話が表示すように、さらに雪深い不慣れた生活には入り難かったのである。

益の窪にチンゲ(トトタイゲ)をのこす七坊主の太田の香龍様と底抜け柄杓の(前橋市下大屋)産泰様への信仰が、それ程強力ではないがこの県境の山と川のある町にも浸透していた。

山の神の十二様(新治村赤谷の十二様など)が、産の神として信仰されているのも、すでに調査済みの山沿いの村々と同様である。

葬制では、イガキ・エガキ(葬送の項参照)が群馬県で始めて採集された。すでに北橋村で調査報告されたモガリ(県内各地でいう犬ッパンキ・カッパンキの別称)と共に古い習俗に脈絡する貴重な民俗であると考えられる。早急に結論づけるのは危険であるので、今は詳説しない。

(佐藤 清)

一、妊娠・出産

腹帯

だれが腹帯を買うとか、どうするとかいうことは苦にせず、イヌの日あたりにするが、育って困るからしめるといわれても何となくしめていく。(明川)

妊娠して五ヶ月めごろ腹帯をする。もとは別にかまわなかった。(平出) 五箇月の戌の日にかく。六尺フンドシのサラシを買って、夫に一回しめてもらってから、帯にするとよい。(大穴)

イヌの日に(五ヶ月頃の)岩田帯を妊婦がしめると、お産が軽い。(高日向)

産室と産の方法

戦争前までは、ネドコという二畳くらいのせまい部屋を使った。ふつう中年の夫婦はネドコの部屋、若夫婦はオキノダイを寝室とするようで、お産のときにはエンバリのの上にしびぶとん、薄いふとんなどを敷き、そこに座ってやるとか、うつぶせになって産んだ。(明川)

なんどが産部屋として使われた。床の上にあく(灰のこと)、わらをならべ、その上にふとんをしいた。ふとんをしかない人もいたのでよく子どもを眼をわらでついたということも聞いた。産気づくとわら二束を積みそれに背をあてて産みその後一日に一わずつわらを取り除き二十一日目に平常通りの姿勢になった。(湯原)

お産はへやでわらのをしいてその上でした。子をうむときには、わらのまくらをした。養子をしびの上からひきとって育てたということもある。(山口)

産室は納戸部屋。下にアク(灰)をまき、その上に薬を敷き、その上に蒲団を敷いた。枕は、薬を十把束ねて、それよりかかって伏せ産をした。産後は、枕の束を一日に一把ずつのぞいて低くしていった。

(高日向、川上、寺間)

お産部屋はなんどある。(湯原)

お産する部屋はサンベヤといった。(高日向)

お産の折には、力綱をお産部屋の天井からつるし床に油紙をしき、その上にあく、薬、ぼろをおく。(湯原)

お産は坐産であった。(綱子)

赤子を自分で生んで自分でとりあげた。坐って生むのだが、子供はシ

ビ(薬をすいたカス)の中に生み落した。(鹿野沢)

産の神(安産祈願)

塩釜様。こちらから行く人や、身内の人に頼んで塩釜様のお札を受け

てもらう。塩釜様は出してくる一方だから臨月になるまで女にはやらない。小さい紙にたんだのをくれるのだが、お産が始まると飲む。そ

うすると安産する。(綱子)

塩釜様で力綱(麻縄をかためたもの)を受けてきてこれにつかまっ

力をつけた。粟沢の阿部国之輔氏の家には百五十年前程前に塩釜様から

らってきたという力綱がある。(綱子)

西の前の婆さんたちが塩釜様を建てたが今は誰もお参りしない。(青木

沢)

赤谷の十二様

新治村の赤谷の十二様をおがむ。お燈明をあげて祈願し、お札をうけてきて安産すると、湯原のアノウ川を越えてオガンショ・ボタン(お札参りとしてお賽銭をあげておがむ)をする。これは江戸時代の参勤交代の

とき、伊達様の奥方が産気づき、このとき十二様にオガンショして安産したことに始まるという。(綱子)

赤谷の十二様にお願をかけ、無事出産すると大願成就と書いた幟をあ

げた。(高向、小仁田、寺間)

赤谷の十二様にお産のとき願をかける。子どもが二才になると四里も

ある山道を超えて願果しにいった。(湯原)

水天宮様。おみこくを産気づいた時に食べるとお産が軽くすむ。(湯原)

産婆様

むかしは前橋市大室の産婆様に底抜けびしゃくをあげた人もたまには

あった。(高日向、小仁田、寺間)

禁忌と呪い

お産があるときは、けがれぬために神だ、仏だんの両方を半紙でか

くすことを、いろいろにうるさい家ではやる。そういう家は、他のしき

たりも一切にいねいにやる。(明川)

難産の時は、神棚にお打明をあげて、「この火が消えないうちに産ませ

てください。」と十二様に拜む。(高日向)

おかみさんばかり苦勞をさせないで、夫もすけるといって、産気づく

と夫が曰をかついであるくと軽くすむといった。(高日向・小仁田・寺

間)

妊婦が火事をみると赤アザ、死人をみると青アザの子ができるという。

火事のときなど「あっ」と顔をおさえたりすると、そこにアザのある子

ができる。仕方がないときは、鏡を身につけていれればよい。(大穴)

妊婦が兎を食うと兎口の子ができる。(大穴)

あざ 火事を見たせいでという。

みつくち うさぎの肉を食べるとなる。

さかさ子 年寄りほころんだせいでという(明川)

妊婦は長湯をしてはいけない。子どもが育ってお産で苦しむから。(明

川)

妊娠中に動く不安産するといひ、ヤミ初めてから、シャガシヤガと湯をわかす用意をして寝てお産をしたものである。(青木沢)

産婦は高い所に手をやってはいけない。チツナ(子とのつながり)が切れるという。

産をしたら重い物をもつな。(鹿野沢)

初産

昔は、初子は実家に行つてお産をすませた。ウブアケのすむまではいるもので、実さいは一ヶ月間はふつうだった。寒い時期だとあかんぼうにかぜをひかせないようにというのでもっと長くなつた。(明川)

長男のお産は実家でやるが、次男からはとつぎ先です。(平出)

初子は実家でお産をする。(綱子)

初子は実家に行つて生む。(鹿野沢)

産婆

上牧に一人いた。普通は近所の器用なばあさんがとりあげてくれた。

(湯原)

とりあげるのは家の年寄りのとりあげばあさんや村の中の器用な人がやる。特に頼むときは沼田の方からで、山越えて泊りこみだった。(明川)

もとは家のばあさんが取り上げてくれたが、その後、原や大穴の産婆さんに診察してもらうようになった。(平出)

村の馴れた老婦が産婆をしてくれた。近所の力のある男が腰を持ちあげてくれることもあった。(綱子)

後産

のちのものは、入口のしきいの下に(たんとまたぐ所)にうめた。(湯

原)

のちのものは敷居の下に埋めた。人のまたぐところがよいとされていたが、衛生上よくないというので明治四十年よりタッチェウ場で焼いたが、その後そのことで火事となつたので墓地に埋めるように変わった。

(湯原)

お産の汚れものは陽に当ててはならないと年寄りから厳しくいわれ、多くは床下に穴を掘つて産湯やエナを捨てた。後産は、墓地向持つて行つて埋めるのと、えんの下へ埋める、入口のカドに埋めるの三つのやり方があるが、明川ではえんの下に埋める。(明川)

むかしは人のよく踏むところがよいというので、台所の入口の内側へ埋めた。いまは墓地に埋める(川上・寺間・小仁田)。

ノチ産のエナは、出入口のしきいの下に埋めると、年中人にまたがれるので、人をはがまないうちに背つとよい。

産部屋(茶の間)の床下に埋める家もある。夜泣きをするので占つたら、ノチ産を粗末にしたからといわれ、半紙で包み水引きをかけて埋めることにした。(平出)

後産は、産湯を捨てたと同じ所、床下を掘つた穴に入れて始末した。

(明川)

ヘソの緒

太いヘソの緒であればその子は健康だといつた。たすきがけに掛けていとけさ五郎、けさなどの名前をつけた。一般にけさ掛け子といつた。

(湯原)

ヘソの緒を首に巻きつけたまま生れてきた子をケサツ子という。(高日向・川上・寺間)

ヘソノオとウブ毛を付けてしまつておく。九死一生の時にせんじ出して飲ませると、一回だけは助かるという。(平出)

ヘソノ緒は命の綱といひ、たんすの小ひき出しの中などにしまつてお

けすつてのむと熟さましになり、それによって一度は生命びろいをするといわれて、九死に一生というようなときにのませるといふ話

も聞いたことがある。(明川)

しまつておいて九死に一生のときをませるとよいといひ、嫁にいくときも持たせてやつた。(高日向・川上・寺間)

妊娠中絶と間引き

妊娠中絶には、ネギタバ、ホーズキの根を用いた。「半月別居すると妊娠しない」とい、これを繰り返せば子どもはできない。荻野式避妊法の理論をすでに実行していた。(粟沢)

生まれたての子を圧殺した話は聞いた。子供が生まれると「オカネエ」(家におかないの意)とい、そのようなことをした人を「ハシッコイ人」とか「オシッカネシ」ともいう。子おろしには、ホウツキの根や鏡の裏の粉、まむし酒を飲ませるなどがあつたという(寺間・小仁田・川上)。

その他

男女の別。妊娠三ヶ月位で男女の別は判る。腹にヤキモチ位の大きさの塊が出来る。これが左に寄っていると男、右に寄っていると女。坐産の場合男児は前向き(仰向き)に、女児は後向き(うつ伏せ)に生れる。

男児の場合、七ヶ月頃から腹が三角形に高くなる。女児の場合全体に広がる。(綱子)

四十八(女の歳)のはじかきつ子、五十(女の歳)のゴサラッ子には、ヨシ、トメなどの名をつけた(高日向)

サカサツ子。足から先に出る子をいう。(高日向、川上・寺間)

藤原の女の人は、子どもは自然に生まれるもので、産婆などにかかるとはどのものではない、というくらいで丈夫な人が多い。二十年ほど前にここへ来てから何度も経験したが、とり上げて帰る、翌日行ってみると産婦が見えない。聞いてみるとお勝手にいたり、いろいろ端で乳をくれていて平気だという。事実一日しかたないに子宮も収縮して健康体に近くなり、オリモノもない。都会の人の一週間以上経過したのと同じくらいになっており、ひどい人はその翌日(三日目)には桶の脱こくをしていたりする。こうしていると、当座はよくても、中年すぎになる頃には子宮下垂の状態になっていて、一種の婦人科疾患がおこる。

同じ藤原の人でも現在の若い人たちは、分べん時間も長く難産で、子

宮の収縮も悪く、時間も長い。これは労働が少くなくなり、栄養はよくなって胎児の発育もよくなり、体重が平均三キロ以上のあかんぼうに育っているためだという。(明川)

二、生児儀礼

胎糞

現在は新生児の糞を胎糞というように産婆さんからいわれたりしているが、ふつうにはまっくらな色から、カナツツ子、カナババ、カニババとかいわれている。出ないときには洗腸して出すのも現在である。(明川)

初めてくれるもの(マクリ)

特別のものをくれることはなかったが、マクリというのは聞いたことがある。初めて母乳をくれる前に、番茶、番茶に少しさとうを入れたもの、あるいはさとう湯などを飲ませた。いまはミルクをくれる。(明川)

産湯

百たらい毎日産湯を浴びせると、その子が速者だといわれる。産湯も床下に乗てたり縁側にあけ場があつてあけたりする。(平出)



宵守に豆を入れたうぶ着(初子が宮参りに着用する)(小日向)

(阿部 孝撮影)

産湯は床下にまける。(湯原)
床下を掘って捨てた。(明川)

緑の下にまける(大穴)

産着

おぼ着は里親が贈る。山んマヌの入ったひもをつける。(その山んマヌの糸だけ染まらぬので白い筋が入る。)(湯原)

産着はサラン木綿で作る。(平出)

あかんぼうの着物。麻の葉の着物、大がいの家で作る。どちらが生まれるかわからないから、黄色とか、紅白のもよりのついたのをつくる。

ヌノコ、綿入れのチャンチャンのことで、昔の子のものや、上の子のものを使う。

産着、安産で丈夫に育った子どもものものを借りたりする。

後は肌着やおむつを新しくするていど。(明川)

産見舞

実家は米とかつお鮎、産着などを送り、近所の人は重箱にシンコを持ってきた。たまには布きれも贈った。仲人はきれを贈った。お返しは赤飯を配るが、そのまたお返しには小豆や大豆を入れて返した(高日向、川上)。

産見舞として持って行くものには、干ぜんまい、かんびよう、かつおぶし、きれこ(布)着物のうら又は表、わたなどが使われた。二十一日目のおぼやけには産見舞をくれた人の家にこわめし(赤飯)するめなどをお返しとして届けた。(湯原)

お産見舞としては、布、綿、かつおぶし、ふ、かんびよう、ぜんまい

(わらびはだめ)。(湯原)

布きれや産着をもらうことが多かった。(平出)

お産があったというとその日のうちから「アカンボミイゴウ」といいうので、何か祝いの品物を持ってお祝いに行く。ウマレテヨカッタネエ

オメドトীগランス」というので産婦の部屋をのぞき、赤ん坊を抱いたりしてくる。祝ひ品は一丈物の布やおしめなどで、いまは行商が、ベビー服や小布などにノシをつけてくれるので間に合わせる。

お見舞いやお祝いをもらった家では、お返しは、こわめしをふかして重箱につめ、スルメ二枚をのせて持ってゆく。最近是最中や粉菓子になつてゐる。(明川)

産の報告

お産をしたとき、新しくこはんをたき、神だなど仏だんにオミキとももに上げて報告をする。(明川)

ミツメのボタモチ

生後三日目に、乳がよく出るようにというので、ゴマのボタモチを作る。(明川)

セツチンメエリ

生れて三日目に赤子の額に犬の字を書いて橋を渡らずに三軒の便所にお参りする。その際、オサゴを持っていく。(大穴)

家から出て橋を渡らないで隣り近所の家の便所参りする。オサゴ(米)を上げる。また、便所を使うともいった。(湯原)

オヒガミ参りといって、三夜目に、トリアゲバーサンが子供をだいて、隣近所三軒の便所へ、橋を渡らないでお参りする。オサゴを紙に包んで、オヒガミ様にあげる(小仁田)

生後三日目に、オジガミ様参りをする。石橋を渡らずに三軒の便所にお参りする。その時オサゴをオヒネリにして持つて



オヒガミ参りに便所に供えた
オサゴの紙包み(小仁田)

(中村和三郎撮影)

生後三日目に、オジガミ様参りをする。石橋を渡らずに三軒の便所にお参りする。その時オサゴをオヒネリにして持つて

行きあがる。(鹿野沢)

三軒回りといつてオバヤケのころ、隣近所の三軒を回って、セツチン神様を拜んでくる。(平出)

命名とお七夜

オヒチャマでにつけた。そのつけかたは、よい名を選んで近所や親類の子にひかせた。子供は欲がないからよいという。

捨吉というのは、これ以上生まれないようにという。

女子にアサジとつけると次に男の子が生まれるという。

山で生まれたのでクマをつけたのや、生れ年を十二支にちなんでつけることも多い。(小仁田、高日向、寺間)

名付けは三種類稲荷にあげ、子供にひかせる。(湯原)

祖父や祖母の名前を買って命名する家がある。また跡取りには長を絶やすなという家もある。例えば、長太郎—長雄—長寿という具合である。

その新宅は長五郎—長吉となっている。最近では止めにし。(鹿野沢)

お七夜はお産婆さんのごくろうぶるまいと合せてやり、あかんぼうに湯をつかい、その後で食事にするので、昼食が多い。赤飯に尻頭付き、オミキで、ていねいな家ではその席に家族中が並ぶ。(明川)

アズキ飯をたいて神様に上げる。(平出)

赤飯を炊いて産婆を呼ぶ。(湯原)

お七夜には赤飯をふかして祝う。産婆さんにかかった人は、呼んで尻頭付きで御馳走し、お礼(お金)をする。(鹿野沢)

お七夜に名前をつける。三つか五つか名前を奇数書いて稲荷様にあげ、無心な子供に頼んで引いてもらう。(大穴)

お七夜祝といつて生れて七日目に赤飯、小豆めしをたきお祝をして、この日に名前をつける。祖父や父の名の一字をとって付けることが多く三つぐらい作って屋敷稲荷に上げておき七才以下の子どもに一つを引かせて決める。(湯原)

生れて一週間たつとお七夜をする。ヘソノオと髪のを紙に包み、一

尺位のヨシをハスに切ったのを三本、これらを麻縄で結えて、便所の高い所に釘をうってかける。赤坊が腹痛で泣くとき、便所からヘソノオを持ってきてなめさせる。またこの日命名する。三枚の紙に名前を書いて稲荷様に供え、それを近所の子供(小学校入学前の子、男女を問わない)一人に拾ってもらい、拾われた名をつける。子供はどれを拾ってもよいのである。今は嫁が名前を選ぶようになった。

Aさんにつけてもらったのは皆達者、Bさんにつけてもらったのは皆死ぬといふことがある。(鯛子)

オバヤケ(産明け)

オバヤケは二十一日目。お産見舞をしてくれた人に、こわめしの重箱とするめを配る。(湯原)

オバヤケといふ、生後二十一日目に赤飯をふかして近所に配った。初めて鎮守の赤城様にお参りに連れていった。(平出)

オボアゲといつて産後二十一日目に赤飯を炊きお宮参りする。(大穴)

産後

生後二十一日目はオバヤケで、家の稲荷様にお参りする。(鹿野沢)

食初め

男百二十日、女百十日目。赤飯を神棚にあげる。膳に赤飯と鯛をあげ、子供に食べさせるまねをする。(湯原)

生後百二十日を男女児ともにタイゾメといひ、初子くらいはお膳をつくってやり、ひと箸かふた箸食わせる。(明川)

女が百日、男が百二十日にやる。茶碗や箸を買ってやり、食べさせる真似をする。(鹿野沢)

産後の食事

三週間はおつおぶし、味そ、梅干し、ふなどを食べた。油物は十日間食べさせなかった。又青い物もさけた。甘いもの、生柿を食べると乳が出なくなるといひ食べさせなかった。三週間はどんな悪い姑でも食事を運んでくれた。(湯原)

オボヤキのあけるまでウメボシはたべてはいけない。柿、カボチャ、油物は百日いけないという。カボチャは万病の毒といった。カツオミツ、シオビキ、豆腐はよい。

柿のワサをまたいでいけないという。(綱子)

二十一日までは姑が運んでくれた。かつぶし、みそ、ふ、うめ、おじや。(湯原)

昔は、甘いものは一切だめ、おかゆに、みそ、やさしくらいで、後は一般家人と変らないものにしたが、用意するのがめんどうくさい点もあつたろう。

現在は何でも食べてよいといい、それだけに食べすぎないよう、刺激の強いものはとらないようにという点を注意する。(明川)

産婦が油物を食うと百日悪いといわれた。油物の時は箸からシヤモジまで別にしろといわれた。あれもいけない、これもいけないといって御飯とカツブシ汁だけであつた。

とろろが悪い、柿がいけない。芋ガラはまたいでも悪いという。

熟柿を食いたい、死んでもよいから食いたいというので食わしたら本当に死んでしまった例もある。(鹿野沢)

産婦はカツブシミツにオカユを食べるくらいであつた。油ものをとってはいけない。実母散以外は飲んではいけないなどいわれた。今から思うと嘘のようである。(谷川)

柿を食うと乳があがる。油ものは百日間食べない。青いものを食うと、子供が青い物をひるなどという。(湯原)

お誕生

一升(生)餅をついて、それを背負わせて大きな箕の中に立たせた。

昔は栄養の関係からか、お誕生前に歩く子は殆どなかった。(大穴)

一升餅をついて箕の中に立たせて背負わせる。このとき子供が立つと、わざとゆすつて転ばせる。このことをブッタオシモチという。強過ぎるからというのである。

誕生の贈り物は、主に腹物類をやる。(高日向、寺間、小仁田、川上)誕生日に歩く子には餅を背負わせて、おりに立ち歩きができないように腰ぬけにさせた。(湯原)

初誕生には誕生餅をついて、背負わせて歩かせた。(谷川)

餅をつく。餅をしょわせておつつぶせという。「イジメ」の中に入れていたため、ほとんどまだ歩けない。むかしは一年三カ月で歩ければいい方であつた。(湯原)

昔の餅は大体エベなかつた。エベル(歩ける)子にはブッタオシ餅(軽

いのでなく、なるべく重くする。)を背負わせる。餅十二切を背負わせてまだつべれないと、「ショウゴイン一本も入れて背負わせろ。」といつてそうした。(鹿野沢)

一年めの誕生日には誕生餅をついて近所や親戚に配る。小さい丸め餅を作り、アンを入れる家もある。一つだけ大きい丸め餅をつくるが、子どもをシノ箕の中に入れておいて、そのお尻へおばあさんに餅をたたきつけてもらう。(平出)

その他

宮参り 夏祭りに行なう。(湯原)

産後二十一日の間は、井戸端に行つてはいけない。井戸が穢れるとい

う。(大穴)

オボ毛は残しておいてはいけないというのでつた。(鹿野沢)

乳が不足すると、ミルクがないのでスリエを作つた。米を水にほとばして生のままする。それをこして、煮立てて砂糖でも入れて飲ませた。

(鹿野沢)

三、育 児

イジメ(育児用具)

産製のもので、生れた赤子は百日位イジメに入れた。乳をくれると、

入れておいて仕事に出たものである。(綱子)

今は使わないが、むかしはイジメに赤んぼを入れて畑に行くときに持っていた。赤んぼがアリゴ(蟻)に食われるようなことがあった。

(平出)

夜泣きと虫封じ

夜泣きには法印様を頼んで拜んでもらった。三週間続けてお宮参りをすると治るといわれていた。(湯原)

虫封じ 虫封じのできる人がムラにいるので、その人の所へ行って封じをもらう。(平出)

虫の強い子は、虫封じのまじないをしてもらった。(湯原)

百軒買い

体が弱くて育たない子は、百軒からつぎきれを買って着物を作って着せた。昔、大穴には十八軒きりなかったから他の部落まで買いに行った。

(大穴)

厄年子

父親が四十二才の時子どもが二才であれば、みの中に入れて三本辻に捨てた。その子を捨ててくれた人を拾い親として毎年正月と三月節句(男女とも)にぜん餅をかならず届けることにしていた。(湯原)

父親が四十二才の時の子は二つ子といって、シノミに入れて三本辻に捨てる。近所の人に拾ってもらう。(鹿野沢)

親が四十二才で、子供が二才のとき、「四十二の二つ子」といって、子供をみに入れて三本辻へ捨てて、拾ってもらう。(大穴)

四十二才の二つ子はみの中に入れて三本辻に捨てる。前のおばさん(身内)に拾ってもらい、それをもらいに行き、拾い親には、正月、節句

にぜん餅二枚にのしをつけてもっていく。(湯原)

親が厄年(男二十五、四十二、女十九、三十三)の子は箕に入れて三本辻に捨てる。近所の悪意な人やおじ、おばに頼んでおき、拾ってもらう。(大穴)

厄年っ子は、辻へ捨てて拾ってもらうものだという。(明川)

お富士参り

満六才になると、六月十五日に薄根の硯田の熊野神社に青竹に甘酒をいれて奉納する。帰ってくるときウチワを買ってきて近所や親戚に配る。

(小日向)

子供が七才になると、オフチメエリといって、オボスナ様にお参りをす。四月十五日であるが、オボスナ様でウチワをくれたのを覚えてい。お参りの際には、新調の着物を着せていく。(鹿野沢)

初節句

女の子には高砂、御殿(内裏ビナ)、男の子には鯉幟や幟を贈る。(大穴)

初節句は大正十二年頃まで男女とも三月にしていた。男子は五月にもやった。たちびな。(湯原)

トツキトウバ

十月目に歯が生えたと三本辻に捨ててくる。近所の長生きをした人に拾ってもらう。拾い親とはその後も永くつきあいをする(寺間・高日向・小仁田・川上)

十月目に歯のはえた子は十月トウバといって三本辻に捨て、近所の人に拾ってもらう。(鹿野沢)

十月に歯がはえたとトウバがはえたといつて三本辻に捨ててくる。近所の人に頼んで拾ってもらう。(谷川)

子育地蔵

体の弱い子ども、耳だれ、目の悪い子はオガシシをかける。治ると果しとして赤い頭巾、前掛けを進せる。(栗沢)

お守り

子どもの着物のトトクビにつけるものといわれ、必ずすひし形の井の字のようなしるしをぬいつけた。背につけたものが、いろりにころがり

こむのを助けてくれるといい、子どもにはぬいとるものときまっていた。

名は知らない。(明川)

子守り

百姓の大きい家は子守りを頼んだ。親せきや知り合いを通じて頼めそうな人に話して、益暮れの仕着せ、小づかい銭でいどで、食べさせるくらの報酬で子守りしてもらった。(明川)

アズキアライ

子供かぐずついたり、いうことをきかないとアズキアライにやっつてしまふといった。アズキアライはチャタテムシのことで、夕方(オオマガトキ)魔がさす時期の意)にゴシゴシと鳴く。(綱子)

四、少年期から老年期まで

七五三

子ども七五三はふつう祝わない。最近祝うようになった。(平出)
この辺では七五三を特別にはしない。(大穴)

七ツ坊主とトトゲ

太田の呑電様へいく人はほとんどない。沼田の正覚寺の呑電上人をおまつりし、そこに礼参りする(高日向)。

身体の弱い子は太田の呑電様に願をかけて、男も女も七才まで坊主頭にしといた。頭の後部のチンゲを少し残しておいたが、これをトトクイゲといった。(平出)

トトゲは七つぐらいまで、頭の後の毛をのばす。開伊裏に入ったとき引っぱりあげる。(大穴)

七つになるまでどのくぼ(ほんのくぼ)にととくい毛をのこしておいた。七つまでととくい毛を残しておけば、いろりの中にころんでも、神さまがその毛をつまんでおこしてくれろといった。七才までの子どもは神さまだといった。子どもは神さまだからとて、いたずらをしても大目にみた。たとえば、せき(水道が入る前は川をせきとめて洗いこ

とをしていた)の中へ小便をしても、子どもは神さまだからかんべんしろといった。(平出)

厄年と厄除け

厄年は、男が十五才、二十五才、四十二才。女が、十九才、三十三才。厄除けには川崎大師にお参りする人もいる。正月十四日のドーロク神のどんど焼きに穴あき銭を投げる。またそのとき焼いたスルメ、餅を食べると風邪をひかない。また、炭を屋根に投げると火事にならないといふ。(小日向)

若者組・青年会

古くは若衆組、その後には壮健、青年会などかわってきた。入会は数え十五才で酒を一升買って仲間入りをし、それからはタモトの着物が着られるようになる。この入会の日は、高日向では二月十二日の十二様の会(夜番)のとき、寺間では正月一日である。

若者組の仕事は、祭のときの芝居や余興の世話をする。その他火の番(夜番)、婚礼の世話などで、若衆頭、同代理は年の順で大体きめた。

退会は小仁田、寺間では四十才、川上、高日向は三十才であった。ソウケンとは青年会のこと。十五才位から入る。部落の娘を守った。(大穴)

昔は若衆頭がいて若衆を取り締っていた。二十才ころ(大正初年)藤原青年会ができて、男も女も入った。

(会長・副会長、理事などの役員がいた。

年2回会合して、祭りや運動会の準備をした。運動の選手は選抜されて水上へ行き、利根郡や県大会にまで出場した。(青木沢)

小仁田青年会

小仁田青年会々則

表紙には、明治四十四年、小仁田青年会々則、第一吉日、小仁田青年会とあり、会則の内容は次に記すとおりのものである。

小仁田青年会々則



小仁田青年会々期 (小仁田)

(中村和郎撮影)

第老条 本会ハ水上村大字

小仁田村ノ満十五才以上

満四十才以下ノ男子ヲ以テ組織シ小仁田青年会ト称ス

(第老条変更満拾二才満

三十才マデ昭和二年四月一日ヨリ実施ス)

第二条 本会ハ戊申詔書ノ御趣旨ト故二宮先生ノ遺教トニ基キ公德ヲ重シ風俗ノ改善ヲ図リ親睦ヲ醇厚シ以テ相互ノ精神ヲ練

リ青年智識ヲ開発スルヲ以テ目的トス。

第三条 本会ニ機関トシテ

任期一年トシ毎年一月之ヲ改選ス又補欠員ノ任期ハ前任者ノ任期ニ依ルモノトス但シ満期后再選スルモ妨ナシ

(第六条変更会長副会長理事ハ名譽職トシ其任期二ヶ年トス幹事ニ限り其ノ任期一ヶ年トシ毎年四月一日之ヲ改選ス又補欠員ノ任期ハ前任者ノ任期ニ依ルモノトス)

第七条 本会ノ正会員ヲ左ノ二種ニ區別ス

一 甲種 満十七才以上ノ者

一 乙種 満十六才以下ノ者

第八条 本会毎月一回(二十日)ヲ以テ定期總會トス

第九条 会長ハ臨時ニ會議ヲ要スル場合ハ其ノ日時場所等幹事ヲシテ速カニ會員ニ通知スルモノトス

第十条 會員ニシテ事故ノ為出席シ能ハサル者ハ開會当日迄ニ會長ニ届出スルモノトス

第十一条 第二条ノ目的ヲ達センカ為左ノ事業ヲ行フ

一、毎月定期會ニ於テ戊申詔書ノ奉読式及

二、報徳方ノ研究ヲ主トシ風俗ヲ改良シ德行ヲ進ムル事

三、毎月各自余業ヨリ成ル基本金積立ヲナスコト但シ基本金余業積立ハ一人毎月五錢ニ該当スル物品トス

四、本会正会員ニシテ満期及婚姻等ニヨリ退会スル者ニ対シテハ有功恩金ヲ与フルコト

五、孤児不具者等ニ対シテハ特ニ之ヲ憐ミ時々慰問シ且ツ教護ノ必要アルモノハ之ヲ救助スルコト

六、公共事業及神仏ノ祭典等總テ応分ノ補助ヲナスコト

七、農事ノ改良殖産ノ発達ヲ計ルコト

第十二条 資産ハ左ノ如シ

一、本会ノ所有スル財産水上村大字川上村字前原畑反別二反六畝二十五歩

- 左ノ役員ヲ置ク
- 一 会長 一名
 - 二 副会長 一名
 - 三 理事 三名
 - 四 幹事 三名
 - 五 顧問 二名
- 第四条 会長ハ本会事務ヲ統轄處理副会長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アル時其職務ヲ代理ス理事ハ會長ノ命ヲ受ケ金銭出納及會務一切ヲ常理ス幹事ハ會長ノ指揮ニ応答ス顧問ハ會長ノ諮問ニ答ヘ會長ヲ補佐シ本会ノ発達ヲ舒暢スルモノトス
- 第五条 会長副会長理事ハ總會ニ於テ會員中ヨリ選挙シ幹事ハ總會ニ於テ決定シ會長之ヲ囑託ス顧問ハ役員會ニ於テ予リ認定シ會長之ヲ推薦ス
- 第六条 会長副会長理事ハ名譽職トシ其任期ハ五ヶ年トス幹事ニ限り其

三、本会々員ヨリ寄付金並ニ基本積立金

第十三条 本会ニ加フル者ハ第十一条基本金ヲ積立ツル義務アルモノトス但シ基施行方法ニ付テハ第七条第一項及第二項ノ區別ニ依

ル

第十四条 左ノ一若シテハ数字ニ該当スル者ハ本会ノ決議ヲ經テ基本金積立ヲ中止又ハ免除スルモノトス

一、赤貧者ニシテ積立金ヲナシ得サル者

二、傷病疾病羅イ自活シ能ハサル者

三、孤兒不具者等ニシテ本会ノ救助ヲ要スル者

第十五条 本会ニ事務取扱ノ為メ左帳簿及物件ヲ備フ

一 会 則 一 基本金台帳

一 會員名簿 一 基本金積立簿

一 決議録 一 基本金収支決算簿

一 記 録

右ノ外事務上必要ナル補助簿ハ理事ニ於テ適宜調製スルコトヲ得

第十六条 会長ハ毎年一日總會ノ節理事ヲシテ年度収支決算報告及財産

報告ヲナサシメ且ツ財産処分ノ決議ヲ求ムルモノトス

第十七条 会則ノ変更ハ總會ニ於テ會員三分ノ二以上出席シ以テ決議ノ

上出席者十分ノ八以上ノ同意ヲ得テ之ヲ決ス

明治四拾四年

青年會員 積立帳

夜業物品

第一月二十日

一月二十日

二月二十日

一 繩五房

一 繩五房

小林福太郎

小仁田報得社青年会

三月二十日

一 雜炭二貫目

此計 金十一錢六厘

三・四 二月分

九月二十日

一 雜炭參貫五百目 五六七八

此代金 二十錢 四ヶ月分

十一月二十三日

一 雜炭五貫五百目 九十一

此代金參拾二錢 三ヶ月分

十二月二十日

一 金參拾二錢

内金拾七錢小林嘉十郎分

大正二年十二月二十日

一 繩五房 大正二年度相済

右のように三十五名分の記載がある。この後の帳面は、夜業物品積立帳でなく、余業物品積立帳となっている。

諸色引渡目録

一 青年会会則

一 基本金収支簿

一 諸帳簿

一 單筒

一 張灯

一 簾

一 諸道具入箱

一通

一通

參通

一個

參張

二枚

二個

一 不動尊判木

拾判

一 硯

一個

一 因旗

二枚

一 源平布

六本

一 水幕

六本

一 須賀大神織

二本

一 肩綱

四枚

一 会旗竿共

一本

一 畑反別二反六畝二拾五歩

大字川上字前原四百〇二番

一金一百九拾一円參拾八錢九厘

現在正金

以上

右之通り諸色現金引渡候也

大正拾四年四月三日

旧支部長

新支部長 石井章壽殿

鈴木弥平

夜学・補習・夜遊び

十二才で小学校を卒業すると、冬季にカッチキよって小学校へ寄って夜学をした。学科は漢字や裁縫で、漢字の師匠（吉野利之氏）の弟子が教えたり、小学校の先生が教えた。漢書・十八史略・日本外史などが主な教材だった。また、読書会をしたり、ソロバンなどもした。年限はきまりがなく、三年ぐらいやった。あとは家の手伝いをしたりして、よその土地へはあまり出なかつた。

夜遊びは夜学の埔りに友だちの家へ寄ってカルタ会などをした。祭りや盆には、藤原で寄ってにぎやかだった。

女子は昼間、裁縫の補習をした。学校でなく、平出や岡ヶ原の先生で、前橋の明治裁縫を出た人（吉野とよ・林せつ氏など）が教えた。その後、学校でも教えるようになった。（青木沢）

力くらべ

大声のエンママのお堂の下に力くらべする石があった。力のある人は大きな石を、胸でひとゆすりすると楽に担いだ。

昔は、若い衆の寄りそうなところにはたいがい力くらべの石があったものだ。（須田貝）

力石の二十四貫をかつげる人はいいたが、米俵二俵をかつげる人はいなかつた。（鹿野沢）

ヨバイ

子どものころは盛んに聞いたが、堂々とヨバイを実行していた。たいがいあらかじめ打ち合せておいて、夜娘の部屋へそっとはいこんでいく。ほとんど遊び半分で相手と結婚しない人が多かった。当時は親ががんで承知しないと結婚はできなかった。（青木沢）

むかしは湯桶曾に駐在所があったが、その駐在巡査はよくヨバイに出かけた。藤原の阿部庫久さんの家に泊って、部落の美人ふきさんの所に行った。まちがってオヤジのひげをなげたら、オヤジが「何だや」といった。びっくりしてとび出し、石垣からころがり落ちたということである。

むかしは結構盛んだった。ヨバイにゆくと床板の音がするの、娘が背負って入れたなどという話も残っている。話者の山口に行ったおじはワセッコで、太田ばあさまは年上だったが、仲がよかつたらしい。昼は炭をやき、夜はヨバイ。ある時その家のお初ばあさまに見つかって、「シウウ公、何きたや。」といわれた。おじはあくろをかいて、「ぬすみはぬすみだが、ぬすみがちがうぞ。」「せつかく来たところだ。お茶でものんで帰ってくんな。」たどという話も残っている。（幸知）

八十八の祝い

七十七才の祝いをしないで、八十八才の祝いをする。子供衆や孫たちが、赤いチャンチャンコに赤い頭巾、赤い着物を作って着せて祝う。別にお参りには行かない。お祝いのお返しにもとは赤飯をふかして子供たち配つたり、着物を切って分けてやる。一升ますのトボウ（斗棒）を

作って配る人や、吹き竹を作って配る人もいる。この竹で、火災の時に吹くとも風が向こうへ行くという。(青木沢)

五、婚 姻

通婚圏

婚姻は、下(平野部)との関係が多く、藤原の方へ嫁に行く例はほとんどない。月夜野町、新治村などとの縁組みが多く、ほとんど湯原から南である。また、寺間に嫁に行く例も少ない。(小仁田)

新湯から嫁に来る人は多く、湯曾曾・大穴辺に、新湯から嫁に来た人がいない家はないほどである。

しかし、新湯へ嫁に行った人の話はまだ聞かない。

この辺の家で新湯と関係のない家は少ない。新湯から働きにきてこちらに住みついた人が親戚の娘を仲介する。ただ、群馬から新湯に嫁に行く例はほとんどない。(大穴)

村内、水上のほか、片品村よりも越後、西入り(新治村)との婚姻が多い。片品とは交易も殆どなく、僅かに尾瀬を通して行く程度で、多くは粟沢から宝川の奥、更に越後に入った。粟沢は旗本領であったので、沼田との往来はあった。(粟沢)

藤原で女の人が減り、嫁になる人がなくなった時には、昔は名主さんなどの村の責任ある人が、湯曾曾から峠越しで越後へ行き、責任をもって希望者をつつとめて連れて来て藤原で結婚させた。もちろん見合なしでまとめたが、しっかりした人たちで、清水峠越しに往き来した。

(須田具、明川)

結婚の条件

縁談は親が家の格式や身上(しんしょう)の相当がつり合えば認めるが、家の格が違うといやがる。そこで本人同志がどうでも好きなら、仲人に頼んで口ききしてもらい、親に納得させた。

ふつうは親が仲人に息子や娘を頼んで押し付けた。仲人はめぼしい家に見当を付けると双方に渡りをつけていい返事を取りまとめる。(青木沢)

結婚は親が決める。見合いもしないから家も顔もわからない。(大穴) タツキメオトは離れやすいというので親がいやがった。昔は恋愛で一緒になった人は殆どなかった。(鹿野沢)

嫁に行くのをしぶると、「今日行って明日帰ってもいいから、一度は親のいうことを聞いてくれ」といわれた。結局、親のいうとおりになった。(大穴)

仲人

仲人の口ききで結婚する。仲人には知り合いの人が親戚の人がなる。

(大穴)

樽入れ

するめ代と酒二升塗りのひょうごに入れて持参。(湯原)

口サダメ(樽入れ)には、仲人が酒一升もってくれ方へ行って、いっごろ式をするか日を決めてくる。(青木沢)

仲人が口定めるとき、酒一升と魚料を持参。(湯原)

とまり初め・カリブ

口さだめ(樽入れ)が済むと、嫁が婿の家に行つて一晩とまる。とまり初めでそのままいつづけた例もある。(大穴)

たる入れの時には方から仲人を通して、トマリツメをしてくれと頼む。手不足の時など、田植えや蚕の手伝いをしてもらうために、嫁が式前に先方へ働きに行つて泊るもので、話が決まったら入れ後のことである。母親が娘に行つて送っていく、先方の組合の女衆を呼んでこいんやうどんを出し、今後よろしくと挨拶する。娘は名を書いた手ぬぐい一本もって近所を回る。母親も泊つて、見きわめて次の日に帰る。仲人がついて行って泊る場合もある。

娘はよそゆきの支度をして、作業着をふろしき包みにして持って行く。

お客に行つたようなかっこうで、先方は家内の者と同じに扱われ、旦那になる人と一緒に寝る。たいがい三、四日が多いが、なかには一月くらい、続くこともある。(青木沢)

カリブンとはタル入れがすむと、トマリゾメということで仲人が娘を連れて先方へ行き、そのまま嫁の生活に入ること。もらい方では隣り近所の人やおばさんくらいを招いてかたんなお祝いをする。こうして田のしつけ、秋のと入れ、家の様子などをおほえさせ、季節のいいときに祝儀をする。そのときに子どもも珍しくなかつた。十五年前ころまでは続いていた。(明川)

結納

仲人が日を選んでユイノウをもつて嫁方に行く。仲人はご祝儀の前日に嫁方に行つて、組の人を呼んでユイノウピラキをして、持ってきたものをひろうする。

ユイノウ目録を見て金いくら、酒何升などと確かめ、支度も見せる。

ユイノウをもらつて受取り書きを出す。その晩仲人はユイノウの酒を飲んで帰る。(青木沢)

結納は式の前日、羽織、はかま(男)、江戸袴(女)。(湯原)

ご祝儀(結婚式 嫁入り)

舞イチゲン

舞方のイチゲンは当日の朝早く来るので、朝客といい、嫁はまだ支度が出ていない。朝客に対し本膳や引き物などを出し、組から御相伴が一人か二人出て、酒をうんと飲んでもらう。嫁方の親類の代表や料理番も出て、酒は吸物碗で酔う衆で飲んでもらう。飲んだあと、うどん、おこわ(赤飯)などの昼飯を食べて帰る。(青木沢)

朝客(舞イチゲン)は父、伯父、兄弟、本人等七人が嫁の実家へ行く。

(湯原)

ご祝儀の朝、仲人は嫁について行くイチゲンの人の所を回って挨拶する。もらい方のイチゲンも朝早く舞のひろうに行く。(青木沢)

嫁イチゲン

嫁方は赤飯をふかし、親類に食べてもらつてから出かけるので、たいがい暗くなる。嫁の一行が先方につくと、中宿(チュウヤド)で一休みして、嫁の化粧をなおし、仲人の妻が介添人となつて嫁を連れて行き、オキノデいで取り結びの式をする。(青木沢)

嫁のおじ・おば・兄弟・両親等がイチゲン客となる。イチゲンの荷は嫁ギラ(嫁衣装)と酒と飾り物で、ノシ・コンブ・金包みなどは料理番が作ったものを仲人が持つて行く。(青木沢)

嫁支度・嫁入り着

ご祝儀の朝早く仲人夫妻が嫁の家へ迎えに行き、仲人の妻が嫁の髪を結び着物を着せて支度をする。(青木沢)

嫁入着はむかしは質素で地味であった。黒の三つ紋、合着(赤い裾が一寸五分位下に出る)下に白というだけであった。(谷川)

中宿

婿の近所の家で、必ず手前の家にする。婚家より向うでは、もどるといので悪い。(大穴)

中宿は嫁と舞の中間の家で通り越さない家。(湯原)

門迎え 入家式

嫁の一行がくると、舞方から男と女が羽織袴で支度をして、お相伴とともにタイマツか、提灯をもって嫁の出迎えに行く。嫁は舞の家の茶の間の正面から入る。入るときに火打ち金で切り火をする。(最近は何もしない。)(青木沢)

嫁が婚家に入ってくるとき、タイマツと称してオガラに赤い紙をつけたものを持った男女の子が両脇に立ち、嫁のタメトに投げ入れる。家に入るとき、イチゲンはオキノデイ(タレニ)から入り、嫁はコザシキ(トマノデイ)から入る。(小仁田)

組の代表が嫁を中宿まで迎えに行く。嫁の一行を舞たちがケードまで出迎える。その時高張り提灯を立てる。男女の子(おかたをする子)が

タイマツを嫁に投げる。おがらをまたぐ。嫁は茶の間から入る。(湯原)
嫁を迎えるのに提灯をつけてた。(大穴)

とり結びの式

取り結びの式はオキノデーに嫁と婿が坐り、仲人・介添人(仲人の妻)・メチョウ・オチョウがついて、盃ごとをする。盃は三つ組で小さい盃から使つて、嫁が先に飲んで婿にやり、三度ずついで盃を取りかわす。二献めにさかなとしてカズノコをささむ。酒は飲めない、脇に腕を置いてオシタステといつて酒をすてる。盃は小さいのが上で、下のが大きく重なるので、終ると仲人が末広でおめでとうございませと挨拶する。

(青木沢)

取り結びの式の盃ごとをしている時に、次の間に話し方がいて「高砂」の話しをしたが、最近ではほとんどしない。(青木沢)

おかたのとき、嫁は床柱をしょって坐る。両親の揃っている十才位の男女の子供が雄蝶、雌蝶をつぐ。(湯原)

この辺の結婚式は、三方も島台もなく、オトソ盃で三々九度をするよりのな質素なものであった。

この辺では結婚式に特別な作法はない。敷島村の人に嫁を世話して、式当日になり、嫁を連れて行ったところ、座敷に上る前に親子の盃をしてくれといわれて驚いた。

式の時には障子に穴をあけて嫁の顔をのぞく。唐ナスをころがし込んで例もある。(大穴)

イチゲン座敷

イチゲン座敷は、昔は嫁の方の人だけが席についてひろう宴をしていた。嫁方は顔を出して挨拶しただけで引こんだ。その後、組の人は別座敷(アトザシキという)でひろう宴をしたので、夜明けまでかかった。

今は嫁方と嫁方と一語に並ぶので、座組みの順序を決めるのが面倒である。向かって右へ嫁、左へ嫁、仲人も男と女がそれぞれ分かれてつく。

次に嫁の大おじ、おばが交互に坐わる。もとは親がおじ、おばの次にいた。次に組の人が坐り、親戚 友人 兄弟たちが坐る。(青木沢)

イチゲン座敷

イチゲン座敷は御相伴役がとりもちをする。御相伴役には組内の人で、適任者(酒が強く座のとりもちがうまくてもしかも部落の主だった人)がなる。貰い方がイチゲン座敷に一人ずつで挨拶するが、その時御相伴役が紹介をする。(谷川)

女衆が膳を並べておく。そこへイチゲンの人々が坐ると、まず茶・茶が出ると、この時座着ケノ餅が出る。雑煮餅一、二個出すのが本当だが、ぼた餅やすしでもよい。その後、本膳が出て酒がつがれ、お相伴が宴の進行をとりもつ。(青木沢)

後段

ゴダン(後段)といつてイチゲン座敷のあと、中宿で嫁のイチゲン客に吸物が出たり、酒が出たりする。最後にあっさりしたものを、果物などを出し、仲人も顔を出して終りになり、イチゲン客は帰る。後段までは、大げさにする人がやるので、めったにしない。仲人は最後まで膝もくすすなといわれて、気骨がおれた。これらは明治末期ごろまで固くやられた。(青木沢)

あと座敷

あと座敷といつて組の人のひろう宴はイチゲン座敷のあと、別座敷でした。嫁が出て、組の人に酒を一杯ずついで回った。嫁の色直しはしなかった。その後、勝手番の女衆に茶と茶がしを出してもてなすのが嫁の役だった。すっかりすむころは夜が明けてしまった。(青木沢)

式が終わると、組内の衆に嫁がお茶をいれる。茶のいれ方や菓子のつまみ方が嫁がためされる。菓子を落したりすれば笑われる。(谷川)

飾り物

ご祝儀の飾り物は料理番が受けもつて作つた。イサナギ・イザナミのオノコロシマに因んで「シマ台」を作り、切り昆布で松を立て、鶴・亀などを飾つた。この「シマ台」をめぐつて式をした。また「高砂」の掛

地を飾るが、なければ天照皇太神の掛地でもよい。(青木沢)

引き物

引き物は魚のお頭付とかまぼこ、結び豆腐などを折箱に入れて客に持たせた。料理番は腕を振って、粉を型に入れてめでたい松竹梅の形に作った物を入れたり、豆腐を細く切って結んだものを作ったりした。その後、鶏・亀の打ち物の粉がし折になった。(青木沢)

若い衆へのふるまい

御祝儀のときは若い衆へ酒を出すのが明治の初ころまでやっていたらしい。御祝儀の場所でなく、各土地土地にあった若い衆宿ともいえるところで、酒二、三升くらい出して、仲間に入れてもらうからというようなあいさつをしていたという。(明川)

床入れ

南枕に床を敷いて、髻が向かって右、嫁が左に寝る。枕元に金屏風の六枚ソウを立てて休む。仲人や髻の親が見とどけて、安心して帰って休む。嫁の親は先に帰る。(青木沢)

ミトドケ

古くは婚礼の夜、仲人は泊った。それは、新郎新婦が結びあったことをみとどけるためという。仲人は隣り座敷に泊っていて、夫婦の契りに使用した紙を投げてよこすまでは帰れなかった。(小仁田)

仲人送り

もらい方の者が仲人を家まで送って行って、酒一升と金一封をお礼として出した。その後初子ができるまで、ご年始・お中元・お歳暮を贈った。(青木沢)

ご祝儀の村役

組合(タミエ)という五人組で、冠婚葬祭や屋根ふしんに立ち合い、嫁の荷しよいや出迎えに行き、若い衆はほとんど関係しない。(青木沢)

御祝儀の客

御祝儀のときは、お客をどこまでにとめるかに迷う。村中が何らかの

つながりがあるので多すぎて困るから、せいぜいイトコまでの縁でとめることがふつうである。(明川)

料理番

ご祝儀の料理目録を作り、何がいくつなどいっさいを書き出したり、式に必要な飾り物のシマ台を作ったりするのが料理番の役目である。一部落に一人ぐらいはそういうことに精しい人がいるので、ムラの人の中から頼まれて料理番になってもらった。祝いの紙の折り方のできる人ではないと困る。

料理番は三日ぐらい前から品物の注文する時に行っていて細かくめんどうをみた。(青木沢)

祝儀の翌日(近所まわり)

嫁が来ると祝儀の翌日、女仲人が連れて近所まわりをする。手ぬぐい一本くらいがきまりになっている。

嫁をくれた場合には、先方のムコは初正月の年始と兼ねて近所まわりをし、手ぬぐい一本くらいいくばる。これを「ムコサンガ顔出シスル」という。(明川)

ご祝儀の次ぐ日に組の女衆を呼んでご苦労ふるまいをする。嫁は訪問着か、ふつうのよそいき着物を着て、仲人の妻や家の母親がつれて近所や近い親戚を挨拶に回る。(青木沢)

里帰り

里帰りは翌日もよいが、ふつうは三日めごろする。嫁・髻が一請に嫁の実家へ赤飯をしょって行きこちそうする。髻だけが嫁の組うちを回って挨拶する。(青木沢)

お歯黒

昔は、イチゲンの次の日に、嫁は支度をとって仲人の妻にお歯黒をつけてもらい、近所を挨拶に回った。お歯黒の金盃はイロリの隅に置いてあり、山からフッチの実を取ってきて入れておく。それを柄を使って歯に塗る。(青木沢)

山で樺の木の実をとってきて板の上でころがし粉にする。その粉をオハグロの時つける。樺の実のことをフツチェという。(鹿野沢)

嫁に来るとオハグロをした。一回すると七、十日はもつた。鉄屑の粉、オツカドの実を燃した炭を合せて作った。(湯松曾)

昔は嫁になると祝いに歯を黒く塗った。年の深い人が白歯で見たが悪いといわれたものである。(西)

葬式との類似

葬式のとこと同じ儀式が多く、実家から出ていくのに屋根に向って矢を放つ。弓は竹の皮が内側となり、肉が外になるように張って作る。トマノデエは十二疊羊ないし正式の式はできない。歩き方もむずかしかった。(小日向)

嫁が里に帰れる日

嫁が里へ帰れる日は正月、節供、田の植えきりの日、盆、ハツサタ、歳暮。彼岸に行くこともある。正月には米と粟と二枚のオオダチノ餅を持って行く。里の田の植えきりの日には、嫁が嫁の家へ手伝いに行ったもので、年取ってからも行く。盆にはソウメンを持って行く。ハツサタは八月一日で、嫁が米や粉やうどん・酒などを持って行ったもので料理して、もち米でボタ餅をつくり、粉でうどんをつくり、里方の人に何ももたせないですっかり用意してこちそうする。これらの時に、酒は必ずず持って行く。生き盆といふことはいわない。(青木沢)

祝儀の禁忌

ご祝儀には、ソバ切りは使わない。縁がきれるから。雨が降ると降りこまれるので、雨は降った方がよいという。(青木沢)

その他

御中元の習慣は以前はまったくなかった。きまっていたのはお歳暮と年始だけだった。お歳暮は、嫁方から嫁の実家に註一本、仲人に対しては何か気持ちの通じるものを送る。年始は、手ぬぐい、茶、さとういなどで、嫁は、もちを七枚から十枚ほどを持って年始に行った。(須田貝)

内縁 寄り合いで世帯をもつものもいるが、親は雑用がかからないでよいといひ、世間もおおっておく。寄り合いで結婚した女は、島田にマゲを入れて丸マゲが結えないので、一生頭を直しようがないという。(青木沢)

むこ 小糠三合持ったら、嫁に行くな、というが、米ぬか、米ぬかと三回言われるまで嫁に行くな、という意味である。(大穴)

降りこみ嫁子 嫁入りに、雨や雪が降って行った先から戻れないというこで、こんなとき「降りこみ嫁子」といった。(小仁田)

独身者 一生ハアケだという。ハアケとは女の独身者の場合という。(青木沢)

離縁 男の方から「三下半」を書いて出すもので、嫁に行った場合も男が出した。それによって役場へ届けた。離縁になると、嫁は持って行ったものをみんな持ち帰るほか、縁切り金も出してもらった。仲人はタツチしない。(青木沢)

逆さ水 逆さ水呑む人間にろくな者はいない。(下から上に嫁入りすることを逆さ水にたとえた)。(大穴)

嫁に行くならションベンだけでも下に行けという。(大穴)

六、死・喪

鳥鳴き

鳥は知らせものである。鳴きが悪いと人が死ぬ(大穴)

ヒトダマ(ヒカリダマ)

人が死ぬようなとき飛ぶといひ、青い玉を見たという人もある。赤い玉が飛ぶと火事があるといひて警戒する。しかし山鳥が年老いて尾の節(一年に一段つく)が十二以上になると尾をひいて光るといわれ、ヒトダマもこの種である。(綱子)

前知らせ

前の坊さんのいうことには、人が死んだときには寺に何かの知らせが来るという。泣き泣きやって来る。戸があく音がする。鐘の音がする。これらがその例である。(湯ノ小屋)

某氏が寺で住職のお給仕をしていたら(死んだ人が)正装できて挨拶して、本堂に行った。間もなくツゲが来たという。えらい人が死んだときやお産で死んだ人のあったときに、こうしたことがあるという。(綱子) オマンバアサンが死ぬ前日、正門から長髪を垂らし、抜身の脇差をもって本堂に入った。そしたら間もなく死んだ知らせがあった。

某が死んだときは、実家に来て、その仏壇に登って行くのを家人がみたという。(綱子)

子どもがなくなるときには、お寺へ来られない。石段があがれないという夢を和尚さんがみるという。和尚さまがお経をあげてやるとしずまるといふ。これは、お寺へ知らせが来る前に、和尚さまへは知らせがあるということである。(青木沢)

医者

昔は老衰では医者をよぶことはほとんどなく、死んでからよぶことが多かった。(須田貝)

陰膳

伊勢参りのとき、道中の無事を祈ってかげ膳をつくる。

けが、病氣などで入院したとき、無事の退院を祈ってかげ膳をつくる。

戦時中、出征した軍人の武運長久を祈ってかげ膳をつくれた。(湯ノ小屋)

よびかえし

まだ死んで困るような人が死んだとき、枕元で大声で名をよぶ。(明川)

病人が息を引き取る時に、よくその人の名を呼ばれる。すると目をさまして見回してからおしまいになる人もいる。昔は屋根に登って名を呼んだ。(平出)

人が死にそうなときに、病人のそばで名前をよんだり(名前を長くひっぱってよぶ)、屋根の棟にのぼって、名前をよぶ。(山口)

人が死にそうになると、そのうちの人が屋根の棟へあがって、病人の名前を呼んだ。(平出)

オガンシヨ

病が重くなると、神にオガンシヨをかける。茶ダチ、ヒモノダチ、シオモノダチなどある。病気が直ると願ほどきといってお礼参りをする。糯米と塩と清水を供えればよい。(大穴)

水ごり

病氣をなおしてもらおうと、体をきよめて家にお灯明を上げたり、神まいりをやったりしたと聞く。みんなでやるのでなく、特別の人がやったこと。(明川)

死に水

ごく近親者が唇に水をつけてやる。(大穴)

枕直し(魔除け)

息を引き取った人は座敷へ北向きに寝かせかえて、魔除けに刀やナタなどの刃物をのせておく。(平出)

北枕に枕直しをしてやり、ふとんの上に刀やなたのような刃物をのせるとともにサギツチヨをたてる。サギツチヨは七・八寸の長さのオッカドの木を三本合せてしぼり、ひもに石をゆわえて下げたもので、どちらも魔除けになるもので、サギツチヨは墓へもってゆき、土まんじゅうの上に乗せることになっている。(須田貝)

魔除けとして遺体に刃物をのせる。(阿能川)

人が死ぬと北枕にし、刃物、切れ物を乗せる。(大穴)

枕籠・枕だんご

土間のどこか別の場所では煮るところをつくり、特別の火で煮たり、つくったりする。玄米を使い、枕めしは山盛りにして箸をたて、死者にかぶせる紙のように紙をまき、三角が正面にくるようにする。このときの

火の灰は穴掘りのときに墓へもつてゆく。(須田貝)

枕ダンゴは石臼を逆に回して米を粉にひき、その粉で六個ダンゴを作つて皿に盛つて死者の枕もとへ供える。ツユは汁桶に盛る。枕ダンゴは他人さまがやつてくれることになつてゐる。(平出)

枕飯は米をとがずにもりきり一杯炊く。(大穴)

死者の枕もとに供える枕飯は、米を洗わないで茶碗にいっぱい取つて煮たものを碗に山盛りにして、箸をまん中に立てる。三角形の紙を巻いておく。(平出)

枕めしは私のふだん使つていた茶わんに一杯の米をとがずに炊き、余さずその茶わんに盛る。炊事は屋外です。(阿能川)

枕飯は米をとがずに家で炊き、一粒も残さないように盛る。(小日向)

神棚

神棚に白い紙をはる。(阿能川)

告げ

葬式の知らせには、組合の人が二人で組んで告げに出てくれる。(平出)
人が死ぬと組の人が寄つて当主と話合つて、寺に相談をかけ、順序を決めて一組二人ずつツゲが出る。

ツゲの人には必ずず食事を出すことになつてゐた。(大穴)

葬儀までの男の仕事

いよいよよだめになると近所の人に来てもらい、段取りをきめてもらう。男のしごとには次のようなのが葬儀前にある。

気のきいた人が一人、医者者の死亡診断書もらひ、埋葬許可書もらつてくる。

タミの人が大体この程度という見当をつけて、施主とも相談して、親せきの範囲、知己を書き出し、会葬者の予定数から予算をたて、ヒキモンをきめる。

予算にしたがつて諸品を注文したり、集めたりする。

葬儀の日をきめる。仏滅、友引き、申の日はさける。

告げに出る。必ず二人で行くきまりで、二、三組出る。

これらのしごとをムラヤクといい、全体の采配をふるうのは組の伍長でなく、本家新宅とか、縁故のある人で気の利いた人がやる。(須田貝)

葬儀までの女の仕事

湯カンのとき仏に着せる着物をぬぐ。キョウカタビラ、手甲、キャハン、五穀袋で、相続人が着る白い着物もぬぐ。全部ぬいはなしで糸をとめない。(須田貝)

当日のムラヤク

葬式当日のムラヤクは、穴掘り、野道具づくり(塔婆、イハイ、モンペイ、棺、ハナカゴ、天蓋、棺にのせるもの)であり、帳場、帳場でひきもんを出したりする助手等である。(須田貝)

湯灌

死者の身内の者が立ち合い、着物を左前に着て繩の帯をしめた支度とする。身体をきれいにふいてやり、着物をユカタなどに着せ替えてやる。

(平出)

仏の子どもや兄弟などの近親者がやるもので、湯かん酒を一杯ずつ飲み、別にわかれた湯で仏の体をふいてやり、女たちがぬつた着物を着かえさせてやる。(須田貝)

湯灌の水は緑の下にまける。(大穴)

納棺・副葬品

寝せ棺が多く、湯灌がすむと死体を棺におさめる。その時、五穀袋に米・麦・豆・ソバ・ヒエの五穀を入れて持たせてやる。(平出)

入棺の際に、座棺でもし死者の頭がうまく入りきらない時には、サンショウのスリコギで棺の蓋をたたくまねをすうと、うまく納まるといふ。それで、スリコギはサンショウの木の棒で取れといわれる。(平出)

棺には愛用品、六文銭、五穀袋(そば、稗、おたね、米、大麦)、竹製の杖を入れる。(阿野川)

五穀を三角の布袋に入れてやる。モミ、アワ、ヒユ、マメ、ナタネ、とす。

金は六文、現在は六円を入れてやるが、これがないと死者が橋を渡してもらえないというので。(湯ノ小屋)

死人の杖はオッカドで作る(粟沢)

通夜

子、兄弟、おじ、おば等の近親者と、ごく親しいタミの人がやり、ふつうはタミの人も関係はない。(須田貝)

香典・近隣の協力

ある人が死ぬと、その人の子供の数だけ香典受けの帳場ができる。他に縁づいている人は、その村の顔ききの人に後見人になってもらう。

後見人は葬式当日、それぞれ帳場に坐る。縁づいた先の親戚、懸意関係はその村の後見人のところに香典をおく。子供が五人いれば五人の後見人が協議して香典の額などきめるが、あまり集まりが少なく足すようなこともある。縁づいた先の交際範囲や力関係によって随分違うので後見人は気を使うことが多い。だからしっかりした人になってもらわないと困る。

式がすむと子供はそれぞれ位牌を持って縁づいた先に帰るが、後見人が一緒にいて行って、村人、組内の人に「これこれやってまいりました。」と香典や式の次第を披露する。そこで集まった人で、位牌をもらってきたというので供養をする。

位牌をもらってくるときは、その位牌をえりくびに逆さにさしていくものである。

利根部では皆このようにやっている。親戚や人の交際を大切にしたのである。(大穴)

門牌

モンペー(門牌)はひと七日(ヒトナノカ)まで葬家の庭に建てておき、ひと七日に墓地へ持って行ってエガキの中央に立ててくる。本当は

四十九日まで家の庭におくのを略してひと七日にする。(平出)

不幸があったときには、門口にモンペイをたてる。和尚が書いてくれる。新鋪元と書いた下に戒名を書き、新鋪元の右側に今日今日、左側に家門不幸と書く。モンペイのある内に物もらいが来たときには、施餓鬼接待(飲食させる)をしなければならない。(大穴)

忌中の印

カドロや茶の間の入口へ忌中と書いた紙をはったり、神棚に紙をはったりする。(平出)

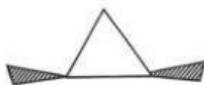
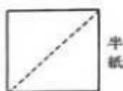
七、葬送

金葬者

藤原では昔は施主も一般も顔に紙で作った三角型のものをつけた。

お経がはじまると渡し、野辺送りをすませると取って棺と一緒にうめた。時代が変わり、現在ではそのようなことはせず、紙でへいそくのようなものを切り、それを帳場で渡し、背に差しておくことになった。これも金葬が終るまですることになっている。(湯原)

デハ
会葬者には、時間はどうな時間でも、「デハを食べてくれ」というわけ





仏教で用いる棺の外箱（寺間素師堂）
（中村和三郎撮影）

でめしを出す。

近年では「デハ」はスシが多くなった。（須田貝）

棺

トマノデエから出す。飯ばりを作る。副葬品、六文銭、五穀袋（五穀とはそば、ひえ、おたね、麦、米で、あわは入れない。）（小日向）

棺はトマノデエから出す。（阿野川）

ジンガン

死者を納めた寝棺の上に飾りのついたジンガンという屋根をかぶせて墓地へ運ぶ。ジンガンには青・黄・赤・白・黒（紫）の色紙を垂らす。

（平出）

葬列

葬列の役割は別に決めないで、親戚と組の人が自由に持って並ぶ。先頭から行灯（灯籠）一個、六字の旗四本、花籠一本（お金を入れて置いてまく）、六地藏六本、竜タツ、位牌、膳、棺、竜タツの順に並ぶ。（平出）

葬列は旗、僧、棺、天蓋、わにぐち二基、花籠、位牌（相続人、膳（相続人の妻か死者の妻）、近親者、一般会葬者の順になり、茶の間から僧も

仏も出る。写真は野には出さないで家にかざっておくだけである。（須田貝）

野辺送りには、位牌を長男が持ち、嫁は枕飯のお膳を持つ。（大穴）

野辺送りに施主（長男）は晒して作った袴を着る。袴は寺に納める。

（大穴）

タツ頭のことを竜タツといい、杉の皮と色紙で、竜が口をあけた形や、

口をしめた形のものを作る。目玉が三つ、角三本でヒツギのあと先に付く。（平出）

花竜には十六文を入れる。（大穴）

六地藏

埋葬・墓地

竹串に線香をさしたものを六本作り、墓地へ行く道の辻に立てておく。あとの人が拾って墓地のエガキの回りに置く。（平出）

埋葬・墓地

ジンガンジョウリという薬草履を履いて、輿を担いできて、墓地に埋める。この草履は帰る時に墓地に棄てていく。墓の上にはカヤで囲いをしてエガキ（忌垣？）を作っておく。灯籠を立て、四十九日まで毎晩明りを付けておく。エガキも四十九日まで置く。葬家のカドに立てて置く。



新しい墓のエガキ カヤをカゴメに納め、
中に位牌、前に供え物を置く（一献田）
（関口正己撮影）



墓に土をかけた。近親の頭で土をかけ、後は村の人が形をつくる。細い棒を四隅にたて、棺をしばっていった繩を二本一緒に回りをまわしてしばり、麻ガラを使って井垣をつくる。中心に一本の棒(太いもの)をたてる。塔婆の代りにたてるものでサギッチョはこの棒の下におく。(須田貝)

(関口正己撮影)

たモンベ(門牌)は一七日(ヒトナノカ)たつと墓の上に立てる。供え物は膳の上に飯・汁・洗米・団子をのせ、他にキョウリ、ナス、トマトなどの果物を供える。(一畝田)

土葬にして寝棺を埋めた上に土をかぶせ、木の棒の柱を四隅に立て、木を曲げたハジキをさしてカヤをカゴメに組んでエガキ(忌垣?)を作る。エガキの内には塔婆、位牌、ソトワ、サギッチョなどを



墓穴(大穴)(青木則子撮影)

棺を埋めた上に土饅頭を盛り、それにヒツバジキを作る。竹を割ったのを皮にしてまげてさす。ヒツバジキのことをカガリともいう。(大穴)

葬送には草鞋を五足作る。一足は死者にはかせ、四足は棺をかつぐ人がつけた。棺をかついだ人はその草鞋を三本辻にぬいでくる。長生きした人のおときには、その捨てた草鞋を拾っていく。(大穴)

葬送の桶りにはころんではいけないという。(大穴)

キヨメ

野辺から戻って来るとき、女の人のしごととして家の入口にオテシヨ(小皿)に入れた塩、たらいに洗いをくんで用意する。会葬者は水で手を洗うまねをして塩でキヨメをして、ここで一般会葬者は解散する。(須田貝)

ひきもん

葬式のひきもんは、昔は、さとう・茶・手ぬぐい・まんじゅう(よくなる)とつくもの)などだった。

現在ほどでも、さとう・茶・まんじゅうとなった。(須田貝)

位牌分け

親の位牌を分けてもらった人は泊らないで、位牌を逆さにしてよって後をふり向かないで帰る。帰ると茶ゴトといって、組の女衆を呼んで、茶呼びをする。ふつうは酒を出してふるまう。(平出)

むこにはみんな位牌をやる。むこは葬式費用を分担することになって

立てておき、前方に膳碗を供える。(平出)

相続人がふたくわくらしい土をかけ、近親の頭で土をかけ、後は村の人が形をつくる。細い棒を四隅にたて、棺をしばっていった繩を二本一緒に回りをまわしてしばり、麻ガラを使って井垣をつくる。中心に一本の棒(太いもの)をたてる。塔婆の代りにたてるものでサギッチョはこの棒の下におく。(須田貝)

三マタのヌルデの木をさかささに立てて、石をつるしたものもサギッチョウとい、エガキの真中に置く。(平出)

七日に一枚ずつ、四十九日まで七枚の札を、一枚の板に略して書いたものをソトワとい、エガキの中に置く。(平出)

棺を埋めるとき、長男から土をかける。棺のひもを解いて土饅頭の上に石を上げて、親の頭に登るのはこの時だげなどという。(大穴)

棺を埋めた後の土饅頭は、高くつむとその人が生前さんざ食ったという。低いと食い足りなかったという。(大穴)



あら仏の墓（阿能川）（中村和三部撮影）

いるが、位牌には、アブラゲ・酒二升・米二升がつけて渡される。アブラゲについては先方の組の人数によって量がちがう。

位牌はふろしきに包み、さかさに背負ってゆくが、むこの組からは総代人が迎えに来る。

組に帰ると、女の人たちが集まり、位牌披露の用意をしてあり、イッパイ出して披露をする。うどんが出される。

位牌は、位牌堂の前において線香を上げることになっている。（須田員）
ユズリ（形見分け）

式の当日に後見人がたちあつてユズリを受けた。（大穴）
三日のオトキ

葬儀の翌朝、酒を一杯のんで墓参りにゆく。墓参りだんごをつくってもってゆく。（須田員）

ズズ念仏

組の人が亡くなって一七日（ヒトナノカ）の夜、施主の家へ寄つてズズ念仏をする。今は略して葬式の終わった夜七日の供養をやつてしまふ。

大きな木の玉が百八個ついたズズ（数珠）を輪にして、ズズ繰りをしながら念仏を百万遍いう。「ズズー念仏、ナンマイダー」とくり返し唱えながら大きなズズを回すが一回回すのに三十分くらいかかる。クジ取り（数取り）が真中に入っていて、箸の長さほどのカヤの棒を四十八本用意し、半分に分けて持ち、一回ごとに棒を置いていき、終ると四十八本まとめて「ユウズウ念仏、ナンマイダー」と唱えて逆に回るようにする。「ナンマイダン仏、ナンマイダン」をくり返し唱える。

ズズ念仏が終ると、棒を墓に納めておく。（平出）

ズズーネンブツは葬式当夜、クミの人と親せきでナノカ（七日）というのをやる。葬式当夜ナノカをやつても、七日目にはナノカの供養をやる。酒のみ、うどんを食べ、寺にあった大きな数珠を繰りながら、「ズズーネンブツナンマイダー」をくりかえし、くりかえし十三回やる。これがすむとお茶をのんで終りになる。（須田員）

ジュズマワシを不幸のあと、参列した人々が参加して行なった。（谷川）
十三念仏は人が死んで、七日目にする念仏（鹿野沢）

四十九日

この日に墓直しをしてきれいにする。親せきや、ごくこいいな人、組の人と呼んで法事をする家もある。

四十九日までは仏はヤノムネを離れないといわれている。（須田員）

八、年祭・その他

一周忌

イツスイキといひ、近親者クミ・子どもが集まってやる。

その後の年忌

三年忌、七年忌、十三年忌、三十三年忌が年忌にあたるが、三十三年忌はよほどの人でなければやらない。やるときにはホトトギスをたてる。

杉や松の芯のあるのをけすつて塔婆をつくる。石塔は経済によるが、三



年忌参り（紙に玉子が包んである）（湯原）

（阿部 孝撮影）

年は建てないのがふつうで、埋めた上に建てる。（須田貝）

産婦が死んだときは、赤い布を四隅にひもをつけ、川の流れのゆるいところにはつておき、竹でシヤクをつけて水をかけてやる。大正初期ころあった。（須田貝）

産婦が死ぬと赤布と四本の棒で川の縁にたて竹のひしやくで水をかける。通りがかりの人もかけてやった。布の色がさめるまでそのままにしておいた。（高日向、川上、寺間）

ゴーザラシといってお産で母子が死んだ場合、人のよく通る、水の流れるところで、またぐところに赤布を地上におき、竹のヒシヤクを置く。通る人はこの布に水をかけてやった。これも大正五年頃が最後でその後見ない。（粟沢）

流れカンジョウといってお産で人が死んだ時に、赤い布を用いたにさうして、通る人が水をかけてやり、早く白くなった方がよいといわれた。昔やったのを一度見たことがある。（平出）

生きかえった話

ゴンゾーサンの妻君は、産あがりて死んでしまった。もうだめだからというので親せき中の人が集まって、葬式の買ひ物の相談をしていたら生き返ったという。仏だけの部屋から「明川のおっちゃん」と呼ぶ声がするので「行ってみじやあなるめえ」というので変な気で行って見たところが死んだはずの人が生き返っていた。話を聞いてみると「お寺の橋を渡るべえとしたらガキメラが来るじゃあねえと石を投げつけるのでとでもだめで、オッカネエから捕るべえと思ったら明川のオッチャンが見えたので呼びとめたのだ」ということだった。

この人はその後長生きをした。（湯ノ小屋）

生まれかわり

人が死んだとき、足のうらに住所氏名を書いてやると、どこかに生まれかわるといふ。生まれた先の人は、死んだ人の墓の土をもらって来て、字をこすると消えるという。（山口）

死んだ人にスミで身体はどこでも印をつけて葬儀する。こうすると親類の者に同じ所に同じような印のついた子が生れるという。また生まれた子にアザがついていると、某々の子の生れ代りだという。（綱子）

死産

ずっと古くは縁の下に埋めた。（高日向、川上、寺間）

子どもの墓

葬式でも、墓でも、やり方などほとんど成人と同じだが、ていねいにはやらない。（須田貝）

川流れの死

川流れで死亡した者は家の中に入れない。（阿能川）

川流れで死んだ人は家に入れないで葬る。（小日向）

年に二度の葬式

葬式、一年に一軒で二人亡くなった場合には、紙で人形を作り、棺の中に入れて葬る。（小日向）

一軒で二人死ぬと紙人形を作って棺に入れる。三人死ぬじやなんねえから。(阿能川)

焼香

焼香とは仏にして拝むという証拠であるという。(大穴)

神葬祭

藤原中でも山口・明川・青木沢・一畝田などで合せて十軒でいどが神葬祭で、他に数軒字会があるが、他はほとんどが応永寺である。(須田貝)

年中行事

はじめに

水上町における年中行事を概観すると、ごく大まかにみて次のような特色がとらえられると思う。

第一に、社会変容による生活様式の変化が年中行事の面にもあらわれているということである。たとえば、以前は山林業（炭焼きや木材のきりだしなど）に依存していた生活が、現在では温泉関係を中心にしたサービスマンに依存するという形に変化している。このために、旧六月二十五日におこなっていた祇園まつりは、湯原や小日向などの商店街では、八月二十三日から三日間、夏まつりとしてさかんであるが、他の地区ではやめているということもある。また、旧四月八日には百姓のまつりとして、アズキのめしとか赤飯などをたいて祝ったが、現在ではごく一部の農家において、かわりものをしていく程度になっている。

第二に、旧暦と新暦の混同が目立っているということがいえる。ここでは大正中ごろとか、昭和のはじめごろに、旧暦から新暦へのきりかえがおこなわれていた。たとえば藤原の須田貝では大正八、九年のころに、旧暦から新暦へきりかえていた。藤原の久保では、日華事変前までは旧暦で行事をおこなっていたが、戦時下の新体制運動によって新暦にきりかえていた。谷川では昭和四年ごろから新暦をつかうようになったが、現在でも新旧両方をつかっているという。藤原では、大正の中ごろまでは、新暦、旧暦二度の正月行事をおこなっていたが、大正九年か十年ごろに、新暦に統一したという（須田貝）。現在でも旧暦でおこなっている行事と

しては、藤原の場合をみると、十五夜、十三夜、十日夜のような月まつる行事、八朔（旧九月一日）、オクシチ、明川の榛名神社の祭典（旧四月八日）などである。十二まつりは旧暦でやっているところもあるが、現在ではほとんど新暦でおこなっている。五月の節供は新暦になっているが、ショウブの節供だけはきりはなして旧五月五日におこなっているような例（藤原）もある。

第三に、山林関係や稲作関係の行事はおこなわれているが、麦作関係の行事がみられなかった。麦作は粟沢や綱子ではみられるが、他の地区では気候や土地の関係でほとんどおこなわれていないので、このような結果になったといえよう。

つぎに、個々の行事について特色あると考えられる事項についてとりだしてみよう。

藤原には竹がないので、正月の門松のくいにヒノキをとってくる（ヒノキの代りにナラをつかうところもある）。このヒノキは一里も山奥まで行って、まつぐぐのもの（長さ四メートルぐらい）をえらんできつてきた。これをあとでハッテのさおにもつかったのである。現在は、明川と山口ぐらいいしか門松のくいをたてるところはないというが、地域の特徴があらわれているといえよう。

卯月八日を藤原では百姓のまつりとしていることはさきにも記しておいた。ここでは、以前はアワとかヒエが常食であったが、この日はアズキめしとか赤飯をたいて祝ったという。仕事はべつに休まなかったが。水上町ではむかしから七夕をあまざかにはしなかつたという。特に藤原では竹がないためか、旧暦の時代からあまりやらなかつたという。

新暦になってからはやめになっている。五月上旬、苗代づくりになるが、このとき苗間の水口に、焼米を供える。これはカラスの口を焼くためという。焼米は近所の子どもたちにも食べさせたという。須田貝や寺間などから報告されている珍しい行事である。焼米の習俗は他県にあるが、もっと資料のほしい行事である。

盆行事は仕事の関係で時々日時が変更になっている。これは他の地区でも同様である。現在では、藤原が九月三日から、他の地区が八月二十三日からとなっている。

藤原ではオクンチの行事を一族あるいは小字(部落)ごとに日をかえている。これは、仕事の関係などでおたがいの祭日に行き来できるように便宜をはかっているものという。ムラうちのつきあいのなかで工夫されたものであろうし、一族ごとの結束をかためるという役割も果たしているともいえるよう。

なお、行事の配列については一月から順にまとめたが、旧暦関係の行事については、特に「旧」の文字を各月に記して新暦と区別しておいた。地域の配列については特別の配慮をしなかった。(井田安雄)

一月

正月

茶の間で生活することになっていた。茶釜で竹のひしやくを使った。煮たきも全部行なう。そのために炉の端に板床が設けられていた。若水は人より先に汲むように努力した。その時使う桶、ひしやくは火打石で火花をかけてから使った。

年男

元日の朝は一番先に起きて、今年もママで暮らせるように豆の木でイロリの火をたき付ける。若水を汲んで茶を煮たて、雑煮を作る。まず、茶を正月様を初め大神宮様などに供え、次に餅を焼いて神の鉢(木鉢の



門松の基部 鬼打ち木というなら丸太をつける一昭和35年

(昭九十九一撮影)

小さいもの)にのせて道
ぜ、あとで家中で食べる。
年男は家の若い者がつと
める。(久保)

家中で一番元気の若者
か世帯主がやる。正月三
ヶ日、お飾りから供えも
のを、全部切火で清めて
やる。節分の時豆まきを
する。(粟沢)

年男は、若水を汲み、
お茶をわかつて、灯明を
あげる。(大穴)

年神様

年神様は卯の日の朝にあがるので、供えものはその日におろす。(大穴)
オミタマ様

改めてやらす、神棚と仏壇を毎日礼拝している。(粟沢)

供えもの

雑煮など供えものは、神の鉢(木鉢)に入れて供える。そして、それをホシイにして、病気のときなどに湯をさして食べた。(大穴)

家例

元日はおしるこを食べる。二日三日は雑煮。三が日の一晚はうどん、一晚はとろろ、一晚は御飯を食べる。

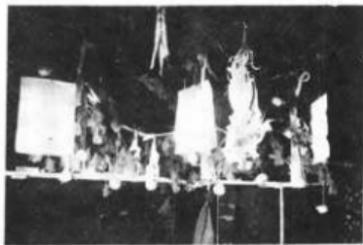
三が日は、夜そうじをする。そして外にははき出さない。(田村もと家)

(谷川)

初正月の幼児に祝(年玉)を進上する。

泊りに出るには、七日に出て九日に帰らない。

書初め、舟のり(本のり)(粟沢)



正月様の棚 (昭和35年藤原大芦)(都丸十九一撮影)



正月の神棚 (昭和35年藤原明川)(都丸十九一撮影)

元日のお雑煮の外は、昼御飯、夜うどんそぼである。来客により、平やつぼ付で膳作りをしたが、最近では好きな物を食べる。(栗沢)

雑煮 切り餅に、コブ・ニンジン・大根・里イモ・ゴボウなどを入れる。カツツンでだしを作る。(久保)

三が日 寺参りで関ヶ原の応永寺に行き、本尊様を拝み、和尚さんにご年始してくる。(久保)

三が日のうちに、トロロを食べる。食べるとカゼをひかない。(鹿野沢)

三が日は、若水でわかし茶を飲みながら、干柿を食べる。(鹿野沢)

どこの家もゾーニが家例で、この辺りでできるものを材料としていれる。のしもちは焼いて入れるもので、大根、人参、ごぼうなどに、最近はおかまぼこ、なるなどとも入れるようになった。(須田貝)

一月元日 若水汲み

年男が、流れに汲みに行く。(大穴)

富士浅間神社の鳥居の前の清水から汲む。(谷川)

元日の朝早く、ボウジメを張った手桶に、若水をむかえる。(藤原向山)

逆さ水は汲まない。(小仁田)

鈴木幸一宅では、若水のかわりに、鏡餅の米を洗った水でお茶を入れ、神棚と仏様だけに供える。これは大正月の三元日と、小正月の十四日、十五日、十六日の三日間。(小仁田)

流れ水を家の近くに引いてセキを作った所をイドと呼び、冬はわら囲いしてイド小屋にしてある家もある。このイドの水をひしゃくで汲んで手桶に入れてくる。元旦の若水を汲んで茶を煮て正月様や大神宮様に供える。イド神様をスイゼン様といい、オシメを供えておき、十四日の道ロク神焼きに下げて焼く。(久保)

三日日間、年男が汲む。先づ塩とおさこをまいて清めてから汲んで、自分で火をたいてわかし、神棚、正月棚その他の神々に茶をたてて供え、共に祖先の仏前に供える。(栗沢)

浅間様の鳥居のそばに清水がでる。それを汲みに行った。手桶にシメをはって汲んだ。(谷川)

初詣り

お元日に、お天狗様の里宮に行く。(藤原向山)

「朝まいる」といって、阿能川、湯原、川上、小日向、高日向の五部落の総鎮守だった大峰神社に初詣りした。今は、お詣りする人とならない人という。クバリジメとおさこは必ず持っていく。(小仁田)

朝早いほど良いと、五時頃行く。まず、屋敷桶荷と氏神明へ参詣してから、鎮守武尊神社へ行く。

神棚、御棚(年神棚)、八百万神、祖先代々へ餅、茶を供える。神詣りに行っている間、御神酒を供えておき、桶つてから、それとそ酒としていただき、朝食(雑煮)をとる。

それから、お日様へ鏡餅を供える。

お参りには、家長、長男が先に行き、主婦はその時留守居をしていて、日中になってからお参りに行く。(粟沢)

ここでは、雪が多く降るので、鎮守様へは初参りをしない。(久保)
初まいりには元旦の朝早く行こうと、除夜の鐘の鳴る前に出かけた(大穴)

二年始

親戚やふだん交際の深い家に二年始に行く。昔は手ぬぐい一本とか、かめのこたわしぐらいを持って回った。一日に十軒も二十軒も回り、きょうは山口、あすは一畝田とか決めて、正月いっぱいには藤原中回ればよかった。二月三日の節分まで回る人もあった。年始に来られれば、お返しに行く。今でも年始回りをするが、かえってではなくなり、酒や折など用意される。

元日の朝ゲにムラ中を回った。ばらばらに回ったが、その後神明宮に集まっていっしょに年始をすませるようにした。今はそれも略して、しなくなった。(久保)

昭和三十三年より、公民館に集まり年始の挨拶をかわしている。それ以前は、毎戸に出向いていた。(小仁田)

子供が、あらかじめ書初めをくばっておいて、年始に回る。行くと必ず年玉をくれる(鹿野沢、大穴)

戦前は、村中で、一軒一軒をぐるぐるまわったが、戦後は会礼になった。(大穴)

春折禱

春折禱の時に神主がご幣束を切ってくれるために家ごと回って来た。青木沢の武尊神社の宮守りをしていた津島守という神主が、正月のうちに回った。不幸などが生じると祈禱できない家があるから、正月早いほうがいいと、二年始ながら家々をカトアシにおして回り、ご幣を切ってお札を書き替えてくれた。カドの切りハギも作った。(山口)

元旦



大正月の宝船(小仁田)

(中村和三部撮影)

子どもはお年玉をもらいたいでうれしがって歩いた。大人は年頭に歩いたが、現在は什長が元日に交代するのになつていて、組中が集まり、年頭をしたり、什長の事務引き継ぎをしりするようになる。

主婦はいつものようにお勝手のしたくをして、年始客の礼をうけ、お茶を出したりする。(須田貝)

初絵売り 前には元日の朝、売りに来たが、どこからきた

のかわからない。(久保)

元日の朝げは、便所をする向きが、年によって異なる。(鹿野沢)
春駒 正月早々に、群馬郡あたりから、目あきの女が二人できた。

鈴のついた馬の頭を持って
春の始めの春駒なんぞ

夢にみてさえ、よいとや申せ
よりこめ、はりこめ、菱銅の……

お礼として、穀類(粟一升に米一合)をやった。(大穴)

(大穴では昭和初年まで焼畑で栗神をつくっていた)

朝風呂

元日の朝風呂は、好きな人がやるくらいで、特にやるきまりの家もない。(須田貝)

朝湯はわかさない。(粟沢・藤原)
元旦の朝風呂はめったにたてない。はいらずにしまった。(久保)

二 日

しごと始め

二日にしごと始めて山へ入り、若木迎えをする。木を切るのが商売だから、白紙に包んだオサゴを持って山へ行き、切る木の近くへ供えて切るようにした。年寄りの方をみて切るとをやかましくいった。この日が切り初めて、その後はいつでも山へ入れた。(須田貝)

二日は仕事始めで、朝飯前にタバツツラ(草刈り鎌)を七本拿う。長さ一ヒロの鎌が六本で一カケとなり、これで刈った草をたばねると馬に「ダン(駄)」分となり、カチ荷(人がしよって歩く荷)を一束しようので、七本必要である。

山入り・初買い・誂い初めなどはしない。(久保)

正月二日が多いが生れ年のえとから四つ目、十日にあたる日は四悪、十悪としてされた。不成就日であるとなわれなかつた。

仕事としてはだんご木切りであった。なたを使い始める方向はその年の暦によって決めた。山にはとまの十二(様)奥の十二(様)とあり山に入る時はお参りをして行く。お供え餅を上げ、餅を包んで行った紙をへいそく形にさいて木に吊す。春祭りは二月十二日か秋祭りは十月十二日である。(阿能川)

団子木を切ったり、セリをとる。(谷川)

マイ玉の木を切ったり、セリをつむ。二日には必ず出そめておく。(鹿野沢)

一月二日山にだんご木を切りに行く。その木は水ブサで伸びがよい。火事にあわないとされており昔から棟札に結びつけて祭る。どこの家でも植えて置く。

切りぞめ オサゴを十二様に供え、まゆ玉につかうミスブサの木を切る。(大六)

山入り 正月の若木迎え、日がよければ一月二日の朝、このときコナラ(ミスナラではない)の枝を切ってくる。これは十二様にキリハギ、

オサゴ、四角に切った餅をもって行って拝み、それから枝を切る。このとき十二様に、誰も飲まぬ前にお湯を供え、それから焼つて家人は飲む。この山入りをキリゾノともいう。山入りの方向は年によって違う。アキの方向は木を切ることだけは忌む。(綱子)

山入りといつて、十二神社にお詣りして、方を見て吉方に向つて細い木を三本伐る。これを伐り初めていう。

猟師は、弓はじめに吉方にむかつて発砲するか、まとうちをする。

年始廻りする。若木迎をする。(粟沢)

矢びらき 二日は矢びらき、たまびらきといひ、りょう師の鉄砲の射ち初めになるので、仲間が集まって、安全なところでやった。鉄砲をやらない家がないくらいだった。(須田貝)

嫁の年始

嫁は二日の客として親のあるうちは若夫婦そろつて実家の親もとへ年始に行く。「膳の餅」といって、膳の大きさに切った餅を二枚重ねて白紙に包み、わらでしばつてのしを掛け、松葉をさしたものをみやげ物として持つて行く。別に神には進ぜない。舞は酒一升か何か持つて行く。ナベカリはしない。(久保)

二日は新しい夫婦の場合実家へ御年始に出る日になつてゐる。(須田貝)

二日には嫁にくれた娘が年始にきて、一晩か二晩泊つていく。(久保)

シュウト礼

二日の夕方、妻の実家へタチ餅(センノ餅)を二つ持つて挨拶に行く。

寺へのご年始

二日には明治末までお寺に二銭包んで「ご年始」といってあいさつに行つた。(阿能川)

初夢

正月二日の晩、半紙に「長き夜のトウノネフリノ、ミナミザメ、波のり船の音のよきかな」と書いて、宝船をたたみ、枕の下に入れて寝ると



初夢の掛軸（小仁田）（中村和三部撮影）

よい夢をみる。以前は、子供も大人もよくそうした。昔段はあまりよい夢をみると、「夢まけ」して、死んでしまおうといい、百姓はセツチンくらい夢でよいともいっていた。

石井英雄（小仁田）宅では、二日の晩にだけ、なすびの絵のある掛軸をさげる習わしで、この掛軸には絵のほか、「新田源道純書、十三才新田智九画」とあって、「孝越なすは出世寿止かの婦しの山、高き称かたも家内安全」と記され

ている。（小仁田）

一富士、二鷹、三茄子というが、二日の夜に見る夢が初夢なので、「長き夜の……」という歌を書いて、舟にたんで枕の下に入れておくとよいといった。（須田貝）

二日の夜「ながき夜のおのねむりのみなめざめなみのりふねのおとのよきかな」と書いた紙を枕の下に入れて寝ると、いい夢を見るといわれ、家族がてんでやるわけになっている。（久保）

三日 日

不成就日

三日はフジウジュニチ（不成就日）で、事を始めるのはわるい。不成就日は九日目とにめぐってくる。二月二日、三月一日、四月四日、五月五日、六月六日、七月三日となり七月からくり返される。（久保）

三日は不浄といい、旅に出たり、他所へ出るのをきらう。この日は年始にも出るなという。（須田貝）

一月は三日が始まりで、九日目毎に不浄日が来る。新暦になってからは、言わなくなった。三二四五六と、二月は二日が始まりで三月は一日、四月は四日、五月は五日、六月は六日、七月は三日、八月は二日、九月は一日、十月は四日、十一月は五日、十二月は六日からはじまる。（鹿野沢）

四 日

お棚探し

年越以来供えたものをおろす。おそなえは保存して、六月田でかんじき草を刈る時、くろ刈りをする時に食べるとマムシにかまれないという。近親は二日に御年始に来るが、今日は役職のある人達が役初めの御年始に来る。（栗沢）

正月棚に進せたものはすぐ下げてもらうので、四日のお棚探しはしない。

坊さんの年始廻りも四日と決まっていけないが、正月中にお札を持って回ってくる。（久保）

四日はお棚さがして、三元日の供えものを、寺の年始がこないうちにかける。寺の年始は、家の門で「タノモウ」と大声でいい、戸口の所で「建明寺年頭」と挨拶した。（小仁田）

寺間の山田一郎宅では、卯の日にお棚さがしをする。正月さまは、一日の卯の刻に降りてきて、卯の日の卯の刻に昇って行くという。（寺間）

神棚へあげておいたものを、おろして雑炊にする。（谷川）
神棚に供えたものをおろして食べる。（鹿野沢）

坊さんの年始

三日は不浄日なので、三日に年始をするのを嫌った。（大穴）
坊さんが「モノモー」と言ってくるので、「ドウレー」と返事をして迎える。子供がよく坊さんのまねをしてからかった。（鹿野沢）

寺から坊主がお札を持って来た。坊主が「ものもう」というと、家の

者が「どうれ」と返事をする。坊主は「建明寺年頭」と言った。(阿能川)

六 日

仏さまの年とり

何も特別にはやらないが、その日炊いたものを仏さまにあげる。湯のみのような小さな茶わんに入れてあげる。(須田貝)

六日年

六日は六日年という。年とりと同じような事をし、神々をおがむ。(粟沢)

六日年にはソバをつくる。六日ゾメといって爪を切りはじめてよい。

(久保)

年とりそばを食う。鈴木利隆宅では、六日ゾメに、二日の仕事はじめてとったセリでゾメをさすってから切る。(小仁田)

七 日

七草

「一夜セリ」はいけない。たいがい二日の仕事はじめにとつてくる。

七草がゆをつくる。もとは「セリタタキ」といって、包丁の背で「七草なすな、唐土の島の渡らぬ先に、著たたけ、著たたけ」と、まないたの上ではいたが、いまは、ほとんどの家でやっていない。七草がゆを食うと毒消になるといふ。こうしてはたたくのは、支那からチンという毒を持った鳥がくるので、はたく真似をして追い払うのだという。(小仁田)

七草正月といひ、七草ぞうせいを朝つくる。松の内の供えことは、これで終る。(藤原向山)

セリタタキといひ、包丁の背で、「七草なすな唐土の島と日本の島と渡らぬうちに」と唱えながら、まないたの上ではいた。これは五十年ほど前までやった。(藤原青木沢)

七日正月 セリ、ナズナなど七種のものを入れた七草粥をつくる。

七日の朝、唐土の島の渡らぬうちに

七草ナズナ ストントン

と唱えながら、まな板をたたく。

一夜セリは良くないという。

大穴でも、本村組は、七草でも雑煮を食べる。(大穴)

七草ぞうすい 七日に七草ぞうすいというオジャをつくる。セリ、大

根、なっぱ、人参など、ハハ類を七種入れるが、なないろそろわないからコンボも入ることになる。もちを焼いて入れるのもきまりである。う

たはてまりうたの中にあるくらいで、実さいにはうたわれない。(須田貝)

セリ・大根・こぶ・豆等七種入れた粥を食べる。(谷川)

七草までは、雑煮を食べる。(鹿野沢)

オジャをつくる。

七草までは、オジャを煮るなという。(鹿野沢)

七日の朝は七草ゾウスイを作る。年男が若水を汲んで茶をわかして神

様に進せてから、七種の物を集めて、イモ・デーコン・ニンジン・ゴボウ・ヒバ・コブ・カンピョウなどをいれた雑炊を初めて作り、スマシで味をつける。ママは入れない。

セリ・ナズナはまだないので入れない。(久保)

七草とは、いも、大根、人参、セリ、ネギ、白菜、ゴボウをいい、五日の午後、とる。(粟沢)

九 日

金毘羅様 九日は金毘羅様の日で、アズキガニを神棚に進せる。(久保)

十一 日

お倉開き

一月十一日はお倉開きで、鈴木幸一宅では倉の戸口に、雑煮を供える。

(小仁田)

サク立て

十一日のサク立てや倉開きはしない。(久保)

十二様のよい祭

初の十二様のよい祭りで、改めて御神酒を上げる。(粟沢)

十二日

十二さま

正月十二日の朝、火をたきつけたら二日の若木迎えに切ってきた生木をくべて湯をわかし、茶を煎じて十二さまに進せて自分で飲む。十二さまは神だにまつてあり、この日は特に十二さまという。(須田員)

小正月

若木迎え

エトのいい日で天気の日、カッチキをはいて山へ小正月の飾り物を伐りに行く。小正月のダンゴをさして飾るアカイキ(ミズブサ)や、ハナにするオカドまたはクルミの木を伐ってくる。(久保)

モノ作り

十三日に若木をけずって、小正月の飾り物を作る。(久保)

百姓の正月

小正月は百姓の正月。もとは、十四日の晩、セイジョウ(清浄)神様(便所神様)にお膳を供えた。これは年男が供えて年男が食った。(藤原向山)

小正月はダンゴ正月ともいい、米のダンゴやヒエのダンゴを作ってアカイキ(ミズブサ)の二、三年たった枝にさして、神前に飾る。宝船などの飾り菓子や、蚕のタネ紙などもいっしょに吊るした。(山口)

ダンゴかざり



小正月のまゆ玉飾り(藤原)

(阿部 孝撮影)

十三日はお飾り。ダンゴ正月ともいって二十日のオイベス講までが小正月。もとは小正月のダンゴ飾りは十四日の朝けであった。(高日向)

十三日から二十日のオイベス講までがダンゴ正月。ヒエダンゴ、米ダンゴをミズブサの木やモミジの木にさして飾る。幸知の阿部安次郎宅では、モミジの木にのし餅を三角に切った三角餅をさして屋内の十二様にあげた。(幸知)

ダンゴ正月の時は、うであげてから米の粉をつけるが、枕ダンゴの時は、ウドン粉で作る、うであげてから粉をつけない。ミズブサの枝で子供たちは、カギンコあそび(カギツピキ)をしてあそんだ(幸知・綱子・青木沢)。ミズブサの木で、モリバナ、カドバナ、ハナなどを作り、ミズブサの木にダンゴをさし、ハナをつけて飾る。カドバナは松ダイにしめを張りその中央にさげる。(綱子)

豆をかたどったマメダマを、モミジの枝にさして、わら俵のニューウに飾った。

小正月ハナは「ハシナタ」でかく。ハナにはクルミの木を用いる。

オシラ様にはマイダマを十六個供えるが、他はダンゴを飾る。もとは、大神宮様、年神様にはウルチ米のダンゴを、他はヒエダンゴを飾った。

もとは、ダンゴをとって置いて、「カリシキカリ」といって、青草を刈って、田にしき、田のこやしにしたが、山へ行くとき「マムシロケ」だといってダンゴを焼いて持って行った。(藤原青木沢)

年神さまのだんごは大きいだんごで、アカボヤ（みずぶさ）の枝に七こずつさしたものを二本つくり、神だなの左右に上げる。オシラさま、荒神さまのものも大きい。

まいだまだんごは、少し大きめのもので、まゆの形にしたものを十六こつくる。

まめだんごは小さなものを多数つくり、もみじの枝のたくさんあるものをとってきてこまかくさす。もみじの枝は、タワラカマスの木一尺五寸くらいの長さに切りそろえてしばった台の中にさしこんで立ててかさる。

小正月につくるダンゴのことで、マイタマというのは十六こつくれたものだけのこと、かさった後のダンゴは「ビョウケダンゴ」という。（須田具）十三日に米の粉をこねてマユ玉を作る。マユナリ（マユ玉形）をしたものと、丸いものを作って、アカキの枝にさして飾る。何本も作り正月様や大神宮様などに供えるが、マユナリをしたものは董神に供える。董神はふつう神棚に祭つてある。

マユ玉を道ロク神焼ぎに持つていって、その火で焼いて食べたり、持ち帰って家で一つずつ食べると、虫歯にならないという。（久保）

小正月にはダンゴ正月といつてマユ玉を作る。マユナリのダンゴを十六個、タワの枝にさしてオシラ様に供える。ほかの丸いダンゴはアカキ（ミズブサ）にさすが、荒神様様に二十五個、大神宮様に十五個、お十二様に十二個、年神様に十二個（または十三個）、えびす大黒様に七個、カマ神様に五個、俵神様に五個、稲荷様に五個、井戸・便所に各五個、仏様にも五個ずつ供える。（西）

一畝田ではマユ玉をカツラにさす。（一畝田）

コドシのマユ玉は十三日に飾り、二十日正月まで飾っておく。

十二様に十二個、年神様には十個と十一個と二十一個、董神には十六個供える。（一畝田）

丸や蘭の形をしたものを、水木にさし、神棚・董神・正月の松を飾つ

たところに立てる。水木は、木の伐初めした二日から、七草の間にとる。（栗沢）

蘭玉は、二十日正月の朝食べる。これを食べると、夏蚕が当るといふ。

若餅

十三日に小正月の餅をつく。マユ玉とまぜて、木にさして飾り付け人もいる。道ロク神焼ぎに持つていって焼いて食べる人もいる。（久保）

小正月はマイ玉正月ともいふ。

十三日に、団子をつくり、ミズブサ（団子の木）にさして飾る。

大神宮様とオシラ様には、蘭形のを十六個、白い木（ハナの木、イタヤ、カエデ）にさして飾る。

オシラサマは、大黒柱の上にまつてある。

ニワトコの木を、芽ぶきが良いと言つて、神棚に飾る。（谷川）

一月十三日にはお松をおろし、ミズブサにさしたまゆ玉を、松を飾つ

たところに飾る。

また、まゆの型をしたものを十六個作つて、桑の木にさして、オシラ

サマに供える。オシラサマは董の神様である。（大穴）

一月十三日には団子を松とみきかえる。松を一本、初午までとってお

く。団子はミズブサにさして、床柱にしばりつける。以前は花菓子など

を売りに来たので、いっしょにかさった。

また、くるみでタバリ花を団子の木につける。

餅のカードを、団子のかわりにさすこともある（鹿野沢）

ものづくり

はらみ箸、くるみの木で、家数の人数分だけつくり、団子といっしょ

に供えておき、十五日に小豆粥を食べる。

ハナくるみの木で、お注連の数だけつくる。ニワトコでハナをかい

て、神棚へ飾る。

アハボ・コメボ、くるみの木でつくる。皮をむかないのがアハボで、



小正月、アハボ、ヒエボ (藤原)

(阿部 孝撮影)

皮をむいたのがコムボで神棚に飾る。(大穴)

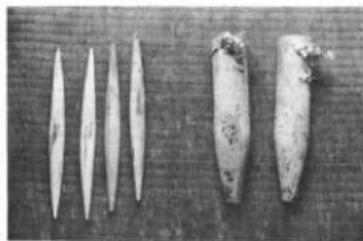
ハナ ミズブサの木を使って、ハナガンナで削ると一番きれいにハナがかかる。ヘエナタの先に刃を付けて引張って削る人もいる。また、ヤナギの木でかく人もいる。ふつうは略して、クルミの木を四つざきにしたものへ三つべえけずりかけをしたキツカケバナを作っている。長さ六、七寸。これを家の内外の神々へ配りバナにして供える。(久保)

早くからくるみの木のすじょうのいいのを切ってほして用意しておく、なからがわきになったものをハナカキナタでけずってつくり、キリダシでやるときには、腕をそろえて切つてやる。(須田具)

ハナはクルミやミズキでかき、神社・墓・神棚・仏壇・門などへ供える。(粟沢)

タワラ クルミの木を皮をむかずに長さ一尺、径一尺ぐらゐにまると、わら縄で五つとこしばりにしてきれいに作り、俵をつんごく所や穀倉などに立てて飾る。その上にかいたハナをさしたり、マユダマダンゴをさしたりする。(久保)

アーボヒーボ クルミ(沢の岸にクルミの木が非常に多い)の皮をむいてハナをかいたのはアワボ、皮をむかないのがヒエボとしてアーボヒーボを作り、山タワラの枝にさして、カド松の松ダイを取り去ったあと



はらみ箸とカユカキ棒 (小仁田)

(中村和三郎撮影)



さげばなとアーボヒーボ (藤原青木沢)

(中村和三郎撮影)

にいわい(結び)つける。アワボ八個、ヒエボ七個、計十五個つけたもので、七五三飾りで十五個になるからだという。肥やし場には立てない。(久保)

クルミの木を切つて皮をむいたアーボと、皮をむかないヒーボを作り、カツラのポヤ一本に十二、三個のアーボヒーボを付ける。長さ二mぐらゐにもなる木なので、先が垂れるようになる。それを十四日の晩松飾りを取ったあとのマツダイに、一方はアワボ、

他方にはヒエボをしぼりつけて飾る。オニウチキは付けたまま置く。二十日正月の夜まで飾っておき、あとは取ってすてる。栗沢ではダンゴを肥イ塚にも立てる。(山口)

くるみの木で、十二日につくる。俵かますといつて、俵の型に縄で束ねて、かま神様の前におく。(栗沢)

ハラミバシ タルミの木を割り、真中を太く両端を細くして桶の穂ばらみのような形にして、ハラミバシを作る。家のチー(家族)の人数だけ用意して、十五日のアズキゲイをそれで食べる。(久保)

小正月にはくるみの木ではらみばしを作る。十六日の朝食がすむと十文字に組み合せ、わらで結び、すわっているところから屋根うらに向って投げ上る。唱えごとがあつたが今はわからない。(かやぶきの屋根であるからよくささる鬼の目玉にぶつぷせというような唱えごとであつた。)普通山で食事をした時のしは折つて木の枝に投げて、枝に掛ればその晩はごちそうがあるという。又掛れば一人前ともいわれた。「はしとかとうどは(部下、手下)は太いほどよい」といわれている(阿能川)

蛇ヨケタンゴ 小正月のマユ玉を取つて置いて、五月に山でカッチキの草を刈る時に、かじりかじり刈ると、アシナカをはいて行つてもマヘビ(マムシ)に食われぬといふ。(一献田)

要神 ケーコ神をオシラ様といひ、シナから来た神でお安は女神で初絵や掛軸がある。小正月のマユ玉のマユナリをしたものを飾る。ふつう神棚に祭るが、キヌガサ様とはいわぬ。初午にも祭る。(久保)

オシラサマには、藁玉を十六個、桑の木にさしてあげる。

まい玉が、しみ割れて落ちると陽気が良い。(谷川)

団子玉 春の彼岸頃、みそ玉を煮るときにたきぞめにつかう。(谷川)

十四日 日

小正月十四日

どこの家でも一斗ぐらいの米を粉にしたものでまゆ玉を作つた。まゆ玉は水ぶさの木の枝の先に差し神棚や神様の祭られてあるところはすべ

て飾つた。このだんごをゆでた時の湯を家のまわりにまくとへびが家にはいれないといわれていた。又穂の突のならない木のまわりにもこの湯をくると沢山なるといわれていた。(阿能川)

ハナ

木を削つてハナにして、十四日にシメ飾りに下げた。松の正月のあとを取つて松飾りを下げ、マツグイに新しいシメ縄を張つて、まん中にハナを一本吊るす。

また、配りバナといつて、ハナをかいた木を、家の外の神々のある所へ、シメ飾りを配つたように十四日の晩配つてくる。(山口)

ドンドンヤキ

十四日夕、暗くなるさけえにドンドンヤキの火をつけるという。ドンドンヤキは、松だけではよく燃えないから、親たちが干草(いまはわら)を出してオシメ等一切をマルニューのようにつくり、燃す前には各家々からお供え餅の下にした紙を集めて来てボンデンに切り、マルニューの中央に立てて火をつける。これが早く燃えると陽気が良いといわれるが、突さいにはこの日は荒れる晩になつていて、きまつて大荒れするが、火事はおきたことがない。子どもたちはコドシのダンゴをもつて行つて、かさつた木にさして焼いて食べる。これを食べると虫歯がやめぬといひ、現在もやつてゐる。昔は紙はもつたないなかつたから松をひいて紙をもらつたりしたがいまは書き初めをこの火で燃す。(須田貝)

十四日に道ロク神焼キをする。正月の松飾りはずしたものを、近所の子どもが松もらいに回つてくる。「松をくれてください」といつてくるので、松飾りを渡し、ミカンなどをくれてやる。子どもが松を道祖神の石碑の前に集めて、おとなも出て小屋を作つてやる(当番はいいが、適当に集まつてやる)。燃えくさの中にくるんで松飾りで小さな小屋を作るが、中には入れない。これを十四日の晩方「道ロク神だ、ヤーイ」と人々を呼び集めて悪魔払いに燃やす。

この火でマユ玉を焼いて食べる。(久保)

原・師入はドンドン焼きもいっしょにする。厄年の人はこの時に厄落

としをしてミカンを投げた。男は雪の上に下帯をひろげて、その上に四十二才なら四十二銭のお金をのせて置いてきた。女衆は手ぬぐいを敷いてお金をのせた。(原)

旧一月十四日に、おまつ、おしめ、わら、ひえがら、草などをもちよつて、小屋をつくる。小屋のまわりはしめなわでぐるぐるまく。小屋の上の方にはお札をつけた。一番上にはほんでんをたてた。

子どもたちは、交代で「どうろくじんだ、やあい」と大きな音をたてながらどなる。村中の人々がそろわないと小屋に火をつけなかった。火をつけるのは大人。厄年のものは、どんどんやきるときに来た人にミカンを投げた。女の人にはふだん髪をとかすときに出る毛をためておいて、どんどんやきのとときに、その毛を焼く。

荻野入と関ヶ原とは組んでどんどんやきをやっていたが、むかし関ヶ原に厄病がはやったのでやめになり、荻野入だけにするようになった。

(荻野入)

朝、道祖神のところに、子供達が松をひいてきて、山に積んで燃す。お札、ダルマなどを燃す。

厄おとしの人が、みかん、金を投げる。(谷川)

十三日におろした松をつみあげて燃す。二またの松を持ってきて、カドに置く。

厄年の人が、年の数だけミカンや金を投げた。(大穴)

荒木屋旅船わきの川へ、子供が松をひいてくる。「松をひかせてくれ」と子供のいない家に松をひきに行つて駄賃をもらった。

ドンドン焼の火で、餅やスルメを焼いて食べるとかぜをひかないというが、団子はもつて行かない。

朝は雑煮を食べる。

夜は、オシラ日待をする。早く寝ると白髪が出る。(鹿野沢)

厄落とし、厄年の人は道コト神の時にそこへ行つて、お金やミカン一箱を投げて厄落としをする。そのミカンは子どもがひろう。厄年は男二



道祖神の時につくるドッコイ(木刀)。男の子の数だけつくり、これをやいてもちかえり、あとは屋根の軒うらにさしておく。この家では数十年來のものが一この写真以外にもたくさん一さしてあった。(粟沢)

(都九十九一撮影)

十五、四十二才、女十九、三十三才。(久保)

その年の厄年の男女が、厄おとしとして金や物を子供にあたえる。

男の子に木刀をさすけて、道祖神へ行かせる。(粟沢)

ドンドンヤキのとき、厄年の人は、年の数だけの銭を上げる。二十五銭、四十二銭などだが、本当は焼ける中に投げこむが、これではもつたないので進せてから集まった子どもたちに投げこむ。また四十二才は古いふんどしを、女なら髪を火に落とすこともするようだった。

現在は厄年の人はみかんをくばる。(須田員)

道祖神祭、大正月の飾りに用いた松・注連縄・その他を一ヶ所に集めて燃す。ドンド燃きとか、ドウロクジンと呼ぶ。

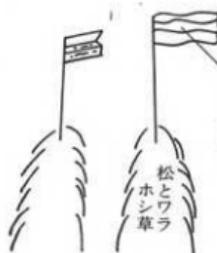
書初めが高く遠く飛ぶと、米が上手になるという。

ダンゴの木(水ブサ)に、米ダンゴ、ヒエダンゴ等をさし、松飾りを

とつたところに飾る。花をかいで、氏神や、先祖に供える。(粟沢)

道祖神マチ 仲よし集りで、かるたをしたり、酒を飲みながら夜ふか

村中の書初



しをする。丁半、めくり、はぐきなどをやった。(粟沢)

道ロク神焼キの火 道ロク神焼キの火がよく燃えあがれば、今年は陽気がよくとか、厄病かはやらないとかいう。メータジ(燃えさし)を持ってきて、家の屋根に投げ上げると火伏せのご祈禱になるというので、もとはよくやったが、平出、山口、西の三ヶ所とも火事になったことがあつ

て廃止した。

道ロク神焼キの煙にあたるとカゼをひかないという。(久保)

道ロク神焼キ 道ロク神の晩に大雪が降って、たと荒れると今年は豊年だという。(久保)

飾りがえ 十四日は飾りがえ、物作りにクルミの木で「トッコイ(刀)」を作り「火防せ」だといって、十四日の晩、ドウロクジン焼きに、先を焼いて持ち帰り、屋根にさす。十四日は年取り。(粟沢)

十四日の朝、神だなに上げたおそなえもちを煮て食う。(須田貝)

成木責め

コドシノダangoのうで湯は、熱いでは困るからさまして、実のならない柿に「なれ」といつてかけると実るようになる。(須田貝)

十四日の晩、ダngoをうでた湯を柿の木などの実の成る木の所へ持つていって、「ナツテクレ」といって湯をかけてくる。傷はつけない。(山口)

一月十五日 十五日粥

くるみの木で作ったはらみ箸で、小豆粥を食べる。十五日がゆをふいて食べてはいけない。くるみの木で、先を十字に切り入れた棒をつくり、それで粥をかきまわす。それはとって置いて苗代にたてる。(大穴)

ケーカキ棒で、十五日粥(小豆・餅)をかきまわして、粥をたけて神棚へあげておく。小豆粥をふいて食べると、田植のとき風が吹くという。

神棚へあげておいたケーカキ棒は、田の水口へ立てる。(谷川)

ケーカキ棒—上方をササラ(花)にし、下方は十字に切りこむ。

くるみの木でハラミ箸を、家族の人数分つくり、それで小豆粥を食べる。小豆粥を吹いて食うと、田植に風が吹くという。

小豆粥を、ケーカキ棒でかきまわして、十字字に割ったところに、焼米をはさんでおいて、苗代の水口にさす。

十五日まで、小豆を煮るなというので、暮の三十一日に、小豆を煮ておいた。(鹿野沢)

小豆ゲイをにて、ケーカキ棒でかきまわして、ハラミ箸で食う。十五日ゲイを吹いて食うと、田植に風が吹くという。十五日までは小豆をにず、おしるこも作らない家もある。寺間の星野姓(四軒)の家では、便所での小豆ゲイを一ぱい食う習わしである。(寺間)

ハラミ箸のことを「ハナ箸」ともいう。桐を用いる。桶の穂がよく孕むようにという。(幸知)

カユ箸は、六、七寸のクルミの木に、十字字の割れ目を入れたもので、二本つくる。十五日の小豆がゆに塩を入れて、カユ箸でかきまわす。ハラミ箸を作らない。(藤原青木沢)

小豆がゆをつくり、神棚、仏壇へ供えてから、くるみの木で作ったはらみ箸で食べる。

はらみ箸は、十二日に作り、農作物の実入りがよくなるようにと折って使う。

このはらみ箸は、十八日(十八日ガユ)にも用いる。ハチにさされな

いおまじないとして。(粟沢)

ケエカキ棒

ヌリデの木の一方を四つに割り、かんたんなハナをかき、片方側はトグシにして杭にして神だなに上げる。

ケエカキボーは、苗代づくりをして種をまいたときに持って行って水口を立て、オシメもって置いて水口に進める。(須田貝)

十五日はアズキカヌを煮て、棒の先にハナをかけたケエカキ棒でかきまわす。ケエカキ棒は苗代の水口にあとでさす。ハラミバシはしない。(山口)

水の上を四つ割にしてダンゴを挟んだケエカキ棒(ケエバシラともいう)を作り、十五日のかゆをかき回すのに用いる。(久保)

十五日のカヌをうすめて家のまわりになくと蛇や虫が入らない。

小仁田ではマユ玉をゆでた水をまわり、小仁田ではダンゴに粉をつけてまぶすことを化粧をしてあげるという。(谷川)

十六マイ玉 マユ形をした大きなマユ玉を十六個作り、カツラの木にさして部屋の隅に立て、オシラ様に供える。オシラ様は薬神、蜚影神社で、掛物もある。(山口)

仏様の正月

十六日は仏様の正月。この日「千匹ゲ」といって、粟と豆をにてわらのトットコに入れて、三本辻に出す。(寺間、川上、高日向)

十六日は仏様の年取りで、茶飯とケンチン汁を作って、茶碗に盛って仏様に供える。(山口)

せんびきげえ

正月十六日に、ひえを煮て豆を少し入れ、わらでつとつこをつくり、三つにぎりぐらいの大きさにしばったものを三本辻に出す。家畜の何かだというのが、馬のせんびきげえといった。(須田貝)

ガキのびもゆるされるといって、殺生をしない。千匹がゆを煮ておつとに入れ、三本辻へ供える。

この日は、洗たく、そうじをしない。ほうきをもたない。(粟沢)

正月十六日は千匹ゲで、豆とヒエを二、三升だきの釜でかゆに煮て、オットに入れて道ばたや地蔵様の所に供えた。これは、鳥にくれるもので、鳥が鳴かないうちにこさえて進ぜることになっていた。鳥が飛んで

きて食べた、きつねも食ったようだ。その後、馬にくれる。この日は馬のお祝いで「馬をなかせるな」とい、馬にさんざ食べさせる日になっていた。馬にはどこしをする日だろうという。(山口)

十六日に米・豆・ヒエ・アワ・ソバなどいろいろの穀物をまぜて少し煮て、ワラのトットコを三角形に折って盛り、道端に出しておく。これは朝なるべく早く出すもので、鳥が鳴かないうちに出す。バクにくれるといい、あげないとバクに食われるから、もとは各戸で出していた。(平出)

一月十六日には、タルミレンガで、餅を食べる。

一月十六日には、ケンチョンを仏様に供える。(大穴)

一月十六日 お神明 沼田のお神明様へ行く。(鹿野沢)

小正月関係その他

門かざり オオドンには松をかざり、コドンにはアーボヒーボを作つてかざる。アーボはキタダの木を利用する。この木はけずると黄色くなる栗を表わすのに良い。ヒーボはタルミの木を表わし、けずると稗のような色になる。アーボは西の木だから桂の枝にさして下げる。ヒーボは東の方に桂の枝にさして下げる。どちらも六寸ぐらいの長さとして、ずに枝をさしこんで飾る。(須田貝)

かざりがし コドンノダンゴをつくるころ、沼田から仕入れたものを土地の菓子屋が売り歩いた。(須田貝)

お松をはやす 十三日夕方、門松を外す。子どもたちがドーロタジンのドンドンヤキの場所にもつてゆく。(須田貝)

小だしもち 小正月につく餅のことで、白でつく。今は機械の人もいる。(粟沢)

お棚さがし コドン(小正月)になって、ダンゴを上げる時に、お正月餅に供えたものを下げる。四日のお棚さがしはしない。(原)

オミタマ様 小正月にオミタマ様を祭るとはいわない。(久保)

正月の松 正月の松を一本とっておいて、春のお蚤さまのあげそめに

あける。(谷川)

一月十八日 十八ゲ

十五日粥を残しておいて、あたためて食べる。そうするとハチにさされなれと言ふ。(大穴)

十八日がゆは、十五日のかゆをとっておいで食べる。(粟沢)

十五日ゲ(かゆ)の残りを、十八日に食うが、これを「十八日ゲ」といい、これ食うと風邪をひかないという。(寺間・川上・高日向・小仁田)

二十日正月

正月の終りとして神仏を拜し、仕事を休む。小正月飾りを取り、お棚をかたづけする。(粟沢)

二十日で正月は終る。(二十日正月)

まゆ玉を、カラスの鳴かないうちにと、早くにさげる。

まゆ玉は、ほして残しておく。(大穴)

まゆ玉をとって、ふかして食べた。また、水につけておいで、ほうろくで焼いて食べた。(谷川)

小正月の団子をもぐ。朝早くもぐと、仕事に遅れないという。団子の

木は、ナタで切り、初年までとっておいて、初午に燃す。(鹿野沢)

コドシに飾ったものを二十日正月にははずす。朝飯後、半日は縄ない

をして、一年中に使う草刈り縄(カチナワ)をない、ダンゴを入れて、

年朔の棚板をひっくり返して上げた。年神の棚は縄でぶら下げである。

しまい正月は別にしない。(山口)

小正月のお飾りは、二十日正月の朝げさげるが、これを「こなしもん」とい

った。人より遅くさげると、今年仕事人より遅れるといい、な

るべく早くさげた(藤原青木沢)

オイベス講

おいベス講といひおいベす様、大黒様がかせぎに(櫛に)出るといひ朝ごちそろうをして供える。家の有り金(持っている金)は全部供えその

年大いに働いて来てもらうのだといった。この時のぜんを「おいベすぜん」といひ普通のぜんとは違え、左に置くものは右におくようにして、ぜんに値をつける。「いくらで買って来た」「五万円で買って来た」などといひながら供えものをさげる。未婚の者は、縁遠くなり、結婚が出来なくなるといひ供え物は「さい食べさせない。(阿能川)

一月二十日はオイベス講。この日はまたお棚さがしの日である。

二十七日

石尊様

一月、二月の二十七日に甘酒祭りをする。大きな石宮(川上神社境内)

にはつぎのような銘文がある。

明治二十五年 願 当

石尊大神 主 所

壬辰一月吉日 中

越後国刈羽郡門出村

石工 小林角藏

(川上)

二十八日

秋葉講

秋葉様は火防神である。一月二十八日に秋葉様におまいりに行く。(大

穴)

不動様祭り

一月二十八日には鎮守様や不動様へおまいりに行く。(粟沢)

旧 一月

旧正月

昭和九年ごろまでは旧正月でしていた。(原)

若木迎え

旧正月二日の仕事始めに山入りをする。(原)

ウマヤ肥イ

正月の申の日に、始めてウマヤ肥イを出す。あとはいつの日に出してもよい。(久保)

エビス講

旧一月二十日にエビス講をする。エビス、大黒の掛軸を下げ、西宮大神のお札を区長を通じて買ってあるので飾り、膳にうどんを盛って供える。エビス様がかせぎに出る日で、お金は供えない。(山口)

愛岩神社

祭日は旧一月二十四日。若衆が酒を背負って頂上で酒を飲んで下る。そのとき雪が降らないときは、アシナカで登ったこともあった。(粟沢)

二月 月

一日

次郎の一日

二月一日を次郎の一日とはいわない。(山口)

節分

豆をいるにも、いわしの頭をさすにも豆の木を使う。

豆まきは、八百万の神さまに進せてから、ありったけの大声を出して

「福は内、福は内、鬼は外」とやる。(須田具)

豆まき 旧正月のころは、節分の豆まきが重なり、松の枝に豆がぶ

つかってはいけなないので、豆を餅に入れて正月様に供えておくだけで、

豆まきは松のうちはしなかった。(久保)

豆いり 節分の晩にはイロリで豆がらを燃して豆をいる。またのある

豆の木の枝にイワシの頭をさして門口に飾る。そのため豆がらを取っておく。(山口)

豆まき 豆まきの豆は豆木で照って、一升ますに入れて神棚に上げておく。山口の部落だけは豆まきをしない。雲越のイチマキは昔から豆まきをしないことになっている。豆は夕食後、福茶にして家中で飲む。あとの豆は年令の数だけ取っておいて、カギ竹に下げて置く。雷の鳴るまで食っちゃならないという。(山口)

節分の豆まきは、昔からまく家とまかない家がある。(平出)

節分の豆まきは、部屋ごと戸を開けて、福は内鬼は外と唱えながらまく。屋敷稲荷にも必ずまく。豆まきの豆は、少々紙に包んでカギ竹につるして置き、初雷の時に食う。雷が落ちないという。(小仁田)

節分の豆占い 節分の夜いろりの火を中心に灰の上に十二個の大豆を置き、一年の十二月に見立てて、その焼けぐあいにより、その年の各

月の気候を占った。例えば白ければ照る。黒は降り。煙が出れば風があるなどと判断した。その外いわしの口焼きもやった。「四十二色の虫の口焼き」といい家中の者が交わるがわるつばをつけては焼き、後に家の入口に差しておき悪病、害虫除けとした。(阿能川)

ヤキカガシ 節分は寒あきの前の日。節分にはヤキカガシといって、

いわしの頭を豆がらにさしていろりの火で焼く。このツバをはきかけ、四十二いろの虫を焼き殺す、とか、つくり耕作の虫を焼き殺す、などと唱える。ヤキカガシはカドに二本さして置く。小仁田でも鈴木利隆宅では、二本はカドに、一本は便所にさすので三本つくる。(小仁田)

イワシの頭を豆の木にさしてつばをかけながら、

つくりこうさく、四十二色の虫

みんなチリチリ

と唱えながら焼いて、軒先にさす。作物に虫がつかないようにとのまじりである。(大穴)

豆の木にイワシの頭をさして、イロリで、四十八の虫の口を焼きます」と

と、トットとつばをつけて焼いて、茶の間の入口にさしておく。

豆占 十二粒の豆をイロリに入れて占った。(鹿野沢)



ヤカガシの始末—のきばのはりに
さしておく—(粟沢)

(都九十九—撮影)

豆は、ホウロクで、豆の木
の着でかきまわしながら
煎る。

年男が、茶の間から、福
は内、鬼は外といってまく。

福は内(神棚)、鬼は外(出
口)、福は内(神棚)と三回
いう。(粟沢)

豆の木にイワシの頭をさ
して火でこがし、つばを吹
きかけながら、「作り耕作
物四十二様(種類の事)を
食う虫の口やざり」といっ
てやいて、窓口の上にさし

ておく。(粟沢)

豆まきをした後、豆を鉄びんに入れ、福茶にして飲む。

豆を特に残しておき、春一番の雷の時食へる。(粟沢)

豆をいるのに、豆の枝を燃し、豆の枝でかきまぜる。年の数だけ豆を
紙につんで、三本辻に投げると厄ばらいになる。

豆の枝に、イワシの頭をさして、「田の虫たえろ、畑の虫たえろ」と、
つばをかけて焼いて、トボグチにさす。(谷川)

節分の豆は残しておいて、初雷の時に食へる。(大穴、谷川)

節分の時には豆がらを燃して、豆をいる。自分の年の数だけ豆を食べ
るものだという。(大穴)

豆まき 旧暦でやると節分が二回あり、実際の豆まきを一回やるから
豆の三度まきという。現在は新でやるから節分の豆まきと畑の豆まきの
二回になった。(須田貝)

初午

あんこを入れただんごをつくり、桑の木の枯れっこを拾って来て火を
燃してゆで、ますの中に直接入れて神だなに供えたが、しだいに略式に
なってきた。(須田貝)

蚕の神様であるオシラサマを祭る。

前夜は、豆腐を作り串にさして焼いて味噌をぬって食べる。(レンガ
タ)。うどんをつくり、蕨といって食べる。

初午の朝は、菌型の団子を水木にさして供え、小豆のあん入りの団子
を沢山つくる。(粟沢)

タワの木を燃して初午のダンゴをゆでて、タワの木の二またに十六個
さして、オシラ様に供える。(一畝田)

マユナリのダンゴを十六個、ますに盛ってお棚へ供える。(西)

初午のダンゴはアッコ入りで、マユ玉に一粒ずつアズキを入れてサナ
ギがわりとする。雪の中をカチ渡りして行って畑から桑の木の枯れたの
をわざわざ取って来て、燃してダンゴをゆでる。ゆでたマユ玉は一升ま
すに入れて神に供える。

マユ玉は布の小袋に十五個か二十個入れて近所の親類に配る。「初午ず
るから来ないか」と、蚕に関係ある人や手伝いにくる人を呼んで「これ
ぐらい蚕をはくから、今年も頼むぜ」と話しておき、うどんのごちそ
うをする。(山口)

二月の初午の日、コカゲ(蚕影)様を祝う。前夜豆腐をひいて作った、
トウフダをイロリで焼き、味噌を塗って田楽をする。神様に進ぜたり
供食する。翌朝団子をマイダマの形に作り、ミズブサの枝にさして進ぜ
る。(綱子)

大峰社境内の大神神社に、甘酒を竹筒に入れ杉の葉の檢をして供え
た。大神神社はエビス造りの立派な神殿である。

初午には、団子を作って、オシラ様(蚕神)に供える。あんこの入っ
た団子十六個を、一升拵に入れ、マブシをのせた。まゆ型の団子も作っ
た。この団子は屋敷稲荷にも供えた。(小仁田、寺間)

年神様のお松は、とっておいて、この日にいろいろで燃やす。(小仁田)
あずきを入れた十六個の団子を、一升杵にマブシを敷いて入れて、オシラサマにあげる。(谷川)

ニワトコを二本、水引で結んで床の間に飾る。(谷川)

あんこの入ったまゆ型の団子を十六個、二升五合杵に入れてオシラサマにあげる。オシラサマは台所と茶の間のスマに飾る。

小正月の団子をほとぼしておいて、初午にこねなおして団子をつくる。

(鹿野沢)

一月二十日の初寄合のときに、暦とは別に決める。(谷川・鹿野沢)

あんこの入った大きな初午団子を、稲荷様とオシラ様に供える。オシラ様には、おひつに十六個入れて供える。(鹿野沢)

初午、オシラ日待は蚤の祭。杵の中に、藁を敷いてマブシにみたてて、団子を十六個入れる。また、正月に使った竹をとっておいて、団子をさす。団子には、あんを入れるが、オシラ様のものには、あんを入れないで、小豆をさなぎの代りにと、一粒ずつ入れる。

オシラ様の位置は、神棚の左の端である。(大穴)

七 日

オコト

目のたくさんあるもの(スイノウウなど)を出す。自分の目より数が多いからと逃げてゆく。(鹿野沢)

夜、目のあるもの(カゴ)を窓に出す。これを出しておくと厄病神を追い払うという。(粟沢)

八 日

ことはじめ

二月八日には、スイノウウなどのようなものもあるものを外に出さない、と、鬼が来て家へ寄るからという。(須田貝)

子どもの頃、二月八日にはコドリ籠(山桑を少し取る時の小籠で紐付)を高く差し上げろといわれ、軒端に吊るした。雪の上に棒を立てて上向きに上げた。豆トオシ(豆ぶるい)でもよい。目ばかりあり、鬼がたまげるからだという。(山口)

生家の親に御馳走をする。(粟沢)

二月八日はオコト始め。(大穴)

十二 日

十二講

十二講は二月十二日。ヨイマツリ、一戸一人村中から出て、宿で掛軸をかけ、茶を飲み夜食を食べてオヒマチをする。宿は初寄合のときに決めるが、順番に回る。翌日も一戸一人ずつ出て、謡をして酒盛をする。(鹿野沢)

二月十二日は十二講で、山仕事は休み。十二講が十一日昼過ぎから十二日午前にかけて、山の木を敷えているからだという。山小屋では、パシダイモチをついた。モチの木をズリで引いた木株の上で、ウルチ米を切りヨキの釜をついて、十二講にあけてから食ったものだ。(小仁田)

十二講 十二山神はどの山にも一つ祭られている石宮で、家に掛軸もある。二月十二日と秋九月十二日にジッチョウウの家に寄って祭り、酒を飲んでちっとにぎやかになる。(久保)

十二講は、大山祇神である。越後から来た人は、十二講は女だという。山で仕事をする人は、木の切かぶの上で、うるちをつけて、パンダイ餅をつくり、十二講に供える。(鹿野沢)

初寄合 二月十二日の十二講にジッチョウウ(什長、よそで伍長ともいう組長のこと)さまの家に寄って会合し、酒を飲んだ。十二山神の掛軸をかけて祭り、年度替りなのでジッチョウウの引き譲りをして、ジッチョウ箱(たて一、二尺横一尺深さ一尺)に入った帳簿や祭り勘定帳面などを新しい役員に渡す。(久保)

二月十二日は十二様の日。(大穴)

十五日

オシヤカ様

オシヤカ様の死んだ日。寺でヤセ馬(団子の小さいもの)をまくので、子供が拾いに行く。(鹿野沢)

二十四日

秋葉様

川場村から神主が来て祝詞をあげる。宿をきめ、一軒から一人ずつ出て酒盛をする。(鹿野沢)

天神まち(講)

月々の二十五日に昔はやったが、今はやめた。(粟沢)

二十八日

焼け祭り

明治二十九年二月二十八日山口では大火があつて九軒焼けたので、秋葉神社に代参が行つて、火事が出ないように祈り、分身をもらつて来た。そこで焼けた日を記念して、旧二月二十八日(十年前からは新の四月十日)に回りもちの宿に寄つて秋葉様を祭り、飲み食いした。関ヶ原も同じ組でやる。(山口)

旧二月十二日

十二講

旧二月十二日は十二講で、ムラ中が子どもまで祖頭の家に寄つて、夜飯(ヨメシ)を食べた。酒やうどんのこちそうで、宿は回りもちにしていた。山の神の石宮にゴへいを立ててくる。十二講を過ぎると山に入つ

て、山仕事をするために山小屋に行く。そのけじめになる。(山口)

三月

三日

ひなまつり

むこが節供礼に来る。シンショをゆずられる頃までは、二人で来ることになっていて、酒一升とセツクモチ(餅の下の大きさに四角に切つたもの二枚)、その他のみやげを持ってくるのがきまり。親はこづかいなどをくれてやる。

初係には初節供のひなさまを届ける。(須田貝)

(関口正己撮影)

伴蔵ピナと油とっくり(青木沢)



ヒナ飾りは二月二十八日に出して飾り、三月五日にしまう。ヒナ祭りには紅白の餅のほかに、草餅をどうでもつかなければならぬので、餅草を前の年に取つて置く。初節供にヒナ様を贈られるが、そのお返しにヒシ餅を配る。

古いヒナ様も棄てない。(山口)

菱餅をつくる。

アワセ餅、米の粉だけの白餅と、新草でつくつた草餅を合わせてのしをつくる。

ハナ餅 餅を木型で花の形に切る。初節供には、餅をくばる。(鹿野沢)

新暦の三月三日。

おひな様は、内裏様を上には、後はひな様の歴史を考え、又下さった人の経歴等も考えて飾る。

お客に来る人は、家により色々であるが、主として、里の祖父母、父母、家の近親等である。

贈答品は、菓子折、紅白の餅等である。(粟沢)

大正十二年頃までは男女の初節供を三月にしたが、男は五月にも二重にした。(湯原)

女の節供(モモノ節供) 初節供には、男子の場合は天神様や内裏様で、女子の場合はオチャボウズなどをもらった。古いひなは、大塚様に納めるので、古いひなさまはない。(小仁田)

十三日

虚空蔵様

嫁が里帰りする。

建明寺の坊さんが来て、大般若経をあげる。(鹿野沢)

彼岸

以前は必らず墓参りに行ったり来たりした。つくりものはまちまちで、入り、中日などに、すし、ぼたもちをつくる。ぼたもちは二度くらいつくった。(須田貝)

墓参り、昔は念仏をした。(大穴)

藤原以外のところでは、彼岸に字ごとにお堂で念仏をした。鹿野沢や谷川などでは年輩者(主に男衆)が、粟沢では若いものがお堂に集って念仏をし、そのあと一杯のんだ。戦前のことである。

アラヒガンの場合には、春とか秋の彼岸のどちらでも、時期的にみて都合のよい方で供養をした。場合によっては、アラボンに供養した。近しい人は、うどんとかぼたもちをもつて、お見舞に行った。

彼岸のごちそうはぼたもちとかうどんであるが、仏様の好きなもの(酒でも魚でも肉でも)をあげた。墓参りにはダンゴをもつて行って供えた。

彼岸にはまた年忌の供養をした。(鹿野沢・谷川・鯛子・粟沢・小仁田)

彼岸にはダンゴを作つて墓参りに行く。最近親の亡くなった者は、親の家(お墓参りに行く。一年忌、三年忌などの供養も彼岸にする。石塔も彼岸に建てるが、春は雪が積もつていて石塔の頭が出ればよい程なので秋彼岸にすることが多い。シメエ年忌(三十三年忌)には杉の木の出た塔婆をたてる。霊魂がどこへ行くか不明。

墓参りには家々で行つて石塔にダンゴや果物などをせて供える。社日は知らない。(山口)

旧暦のこよみで決められており、お墓参りする。特に新盆の人は寺参りする。おはぎを食べ、お客さんはうどんを持つてくる。(粟沢)

社日 彼岸の中日。(大穴)

旧三月二十五日

天神マチ

横山地区だけが旧三月二十五日にするが、山口ではない。(山口)

四月

八日

シヤカ

四月八日には、子どもが寺に行くので、寺では甘茶をつくつておいておしゃかさんにかけてお参りする。大人は世話人くらいだった。(須田貝)

四月八日はオシヤカ様の日で、オシヤカ様のお堂の屋根をツツジの花でかざる。(鹿野沢)

四月八日にはお堂へ行って甘酒をもらう。(大穴)

四月八日のおしゃか様には、武尊山庇水寺で甘茶をくれる。(山口)
「クワ・鎌を鳴らさず四月八日かな」といって、四月八日は百姓の休
みで、クワとカマを使ってはいけない。(原)

湯前薬師

四月八日と十月八日は湯前薬師のご縁日。建明寺の坊さんが来て、お
経をあげる。村人が寄って、福引をしたり、和讃をする。

病氣直しの神様である。(谷川)

四月十日(旧三月十日)

琴平神社祭。(大穴)

二十六日

番祭り

鎮守武尊神社の祭りで、御神楽を奏上し、宮司が祝詞を奏上する。そ
の後は酒をのむ。各家では、赤飯をつくり、懇親者の処へ重箱で届ける。

(粟沢)

二十八日

富士浅間神社

四月二十八日、七月第一日曜日 十月二十八日は富士浅間神社の祭日。
谷川岳に登るときは、必ずこの神社にお参りする。

境内に、くっかけ柳というのがあり、登山するときは、ここでワラジ
をはきかえ、帰りに、里のワラジにはきかえる。

万延のとき、ワラジの重みで、木が枯れたと伝えられている。(谷川)

二十九日

セカキ

寺に坊さんが大勢集まって、大般若経を読む。壇徒に、お札、オミゴ

ク(餅)がくばられる。

旧四月八日

卯月八日

しゃか様の生まれた日として、先祖の霊前に甘茶、酒、その他を供え
る。(粟沢)

旧の四月八日は、おしゃかさまが生まれた日なので、銀や鎌をならす
なという。

四月八日にはお寺へ行って甘茶をのんだ。

この日、藤の花酒をわかつて飲んだ。藤の花をとって来て、酒の中に
藤の花をうかせればよかった。この酒をのまないとうじがわくといわれ
た。だから、この日はどうしても酒をのむものだという。(萩野入)

五月 月

二日

武尊神社の祭り

五月二日、八十八夜前に武尊神社でお祭りをして、太々神楽をやった
ので、昔は子どもまで泊りながらオコモリに参詣した。最近はだんだん
メシになり、ふつうの人は行かなくなった。組長が代表して武尊神社
まで行ってお札を受けてくるようになった。(原)

八十八夜

八十八夜の前夜から農作業のメドをつけるが、特別の行事はない。八十
八夜からはナーマ(苗代)はいいという。(須田貝)

八十八夜には武尊の頂上までミチガリをして登った。頂上には石宮が
あり日本武尊の銅像が二体立っている。登る支度は着物・袴・ミノ・菅
笠にワラジばきで、弁当をメシバか飯ごうに入れ、手製のビタ(ナツブ



しょうぶかさり (明川 大坪忠之輔氏方)

(阪本英一撮影)

ザツク様の袋)でしょった。

昔は武尊神社で太々神楽をしたが、だんだんノメシ(ものぐさ)になって行かなくなり、青木沢の里宮で太々をするようになった。(原)

旧五月四日

宵節供

ショウブとヨモギを軒先の三カ所にさす。ショウブ酒(酒の中にショウブを入れる)をつくる(大穴)

しょうぶかさり

魔除けとして、しょうぶ、よもぎを組んで、屋根にさすが、東から七・五・三にふくのがきまりになっている。(須田貝)

婦人の魔除けの一つとしてかざるもので、蛇の子が生まれないようにする。もし蛇の子を腹に宿しても、表にかざったしょうぶと、よもぎとを煎じて飲むとみんな下つてしまふからというのを昔からいわれた。(大沢)

五日

五月節供

男児の健康と出世を祝う日で、吹流し、矢車を立て、内飾りをする。かしわ餅を、仲人や近親者へ贈る。

朝は餅、夜はうどんそば、酒はその家の力により出来るだけ沢山飲む。軒へよもぎとしょうぶをさす。しょうぶは刀、よもぎは弓の矢のたと

えて、悪魔除に飾る。

また、しょうぶを風呂に入れてはいる。頭痛に良い。(栗沢)

旧五月五日にはショウブとヨモギを軒端に七・五・三にさして、病気を予防する。ショウブ湯をたてて入ると丈夫になるといふ。(山口)

しょうぶ湯

しょうぶを二寸くらいに切つてふろに入れる。子どもはこれをさいて笛にして湯の中で遊んだりした。(須田貝)

五月の節供に入る。「昔話にある蛇の子を妊娠しても萬葉湯に入れば流れる」といふところから、女の人は湯に入るものだといわれている。(大穴)

ヨモギとショウブを入口にさした。お桶荷様にもさした。ショウブ湯に入り、ショウブ酒を飲む。「人間に畜生の子をはらませるのはたやすいが、ショウブ湯に入るからだめだ。」というので蛇の難をさけられる。また蛇に追われて、ヨモギ、ショウブの蔭にかくれて助かったともいふ。

ショウブではちまきをする頭がやめない。(鹿野沢)

柏餅をつくる。柏餅は、よくこねると、のめっこくなる。

旧の五月五日、ヨモギ、ショウブを、入口や窓、三ヶ所にさす。魔除けである。(鹿野沢)

藤の花酒

藤の花が咲くころ、藤の花を絞めながら酒を飲んだ。

やき米

苗代に種をまくときは、ヤキゴメをつくり、からすの口を焼くという。このヤキ米はくす米を梗のまま蒸しうりにし、てんび乾燥してパツタリダルマでついて米にしたもので、黒いが硬くて香ばしく、うまいものだ。これを水口に進ぜるが、「カラスの口を焼く」といい、近所の子どもにヤキゴメをくれて「カラスを追つてくれよ」と頼んだりした。(須田貝)

水口祝い

苗代にモミをまく時、十五日ケーのケーカキ棒を水口に立て、焼き米を

十文字の割れ目に紙に包んでほさみ、道を通った人にくれる。こうする
と苗があたるといふ。昭和三十五年くらいまではそうした。(寺間、小仁
田、川上)

六 月

ウエキリ

田植えの終ったときウエキリの行事がある。夜はうらんだが、昼に赤
飯をつくり近所の家へ重箱につめてくばる。子どもたちはその家に招ば
れて行ってごちそうになり楽しむ。赤飯にすまし汁が出るが、ぜんまい、
大根の切りほし、にんじんの入った汁だった。大根の切り干しは、ウエキ
リ用に特別につくられるもので平切り(たんざく)にしたものを使うことにな
っている。(須田貝)

田植えが終ると、植エキリ祝イをして、赤飯をふかして神棚に供え、
隣近所や親戚にも配って祝う。(山口)

マンガアレエ

ウエキリが部落中の最後になると、今年はおらが家が須田貝中のマン
ガアレエだといって、おらがところでマンガに酒をかけねえじやなるめ
えという。しごとがおそいのは手柄の話ではなく、不名誉なことなので
こういった。(須田貝)

旧六月一日

水の餅

正月のおそなえもちを水らせておいて、これを六月一日に水にひたし
ておき、ほうろくで焼いて食べる。(阿能川)

旧の六月一日に、川ピタリといって、正月のおそなえを干しておいた
のを、ほうろくで焼いて食べた。日が長くなって、腹がへらないよう
にと食べるものである。(谷川)

鹿野沢では、水餅を六月十五日に食べる。
山口では土用のミツメに食べる。

二十五日

ぎおん

須佐の男の命を祭り、夏の健康を祈る。子どもが天王様にきゅうりを
供える。今はやらない。(栗沢)

七 月

農休み

七月一日に農休みをすることにして、戦後になってやり始めたが、十
年と続かないでよした。宝川へ行く人が少なくて続かない。

麦をあまり作らないので、麦刈りの祝いをしなかった。(山口)

七月一日ころが農休みになる。昔、藤原に舞台があったときは、村外
から招いて木戸銭をとって歌舞伎をやった。

昔からこの日一日限りで宝川では温泉を開放して、無料で入湯させた。
(須田貝)

一定していない。雨の日等に、家中で休んで好み好みのご馳走をつくっ
て食べる。(栗沢)

ハゲンブロー

半夏生のころにフロウをまくと、さやをとるのにやっこくていい。(須
田貝)

七 日

七夕

藤原には竹がないからあまりやらない。小さい子でもいるときはまね
ごとをするていどのことしかしない。(須田貝)

この頃では、新暦七月七日にやる。昔は、七夕に、七回食して、七回泳ぐといった。

子供の着物を七夕様にかすのだと、ひとえ物と帯をかけて飾る。

食物は、御飯の家、うどんの家といろいろであるが、きゅうりをもちではいけないという。(粟沢)

七回飯を食べて、七回水あびをする。盆が八月二十三日からになってからは、盆と日が離れすぎてしまったため、やらなくなった。(谷川)

十五日

富士浅間神社祭

現在は、谷川岳の山開きと同じ日(七月第一日曜日)に行なう。(大穴)

二十三日、二十五日

川上の天王様



天王様のお飯屋 (小日向神社)
祭日 7月 23日

(中村和三部撮影)

むかし高札場のあった場所
に天王様の石宮があり、

七月二十三日から二十五日

まで御興をかつぐ祭りがあ

る。もとは六月二十三日か

ら二十五日で、若衆と子供

の両方の御興がでた。ミコ

シはこの地の石井伊賀守藤

原敷重という宮大工が造っ

たものである。

祭りの前に若衆(後に社

健)の頭がいて、いまの世

話人の役をした。最初区長

家へ御興がいき、順に毎戸



大塚神社にある天王のみこし
(小仁田)

(近藤義雄撮影)

を巡っていった。村境までいくと、大きな声で喚声をあげ、太鼓をつづけてたいた。御興の巡ってきた家は、賽銭やキウウリなどをあげ、それを袋に入れて運ぶ役もあり、相当量が集った。賽銭で酒を買い、キウウリを肴にして二十五日の晩参加者が飲んだ。この祭りがすむまでは、キウウリは食べてはいけない。はづなりは天王様にあげる」ともいっていた。

御興は、二十五日には荒れることもあり、若衆の力競べのようで、わざと田の中に落ちたりし、各家々の中まで入りこんだ、だがたいいはおとなしく次へ移るが、時に例外としてあばれることもあった。(川上)

オギオン

部落毎にある天王様をかつぎ出し、オカリヤに天王様を飾り、マンドウ(山車)をひき歩く。昔の天王様はあはれたが、この頃の天王様はおとなしい。しかし、今はかつぐ人がいなくなった。(大穴・鹿野沢)

谷川では、天王様はまつらない。(谷川)

二十六日

天王さま

七月二十六日が天王様の祭りで、以前は獅子舞いを奉納し、その後で

酒を出した。(須田具)

旧七月一日

カマノロアキ

旧七月一日はカマノロアキで、お盆の初めの日といわれる。麦の粉を
といて薄焼きをこしらえて、ヤキバガシにして仏様に上げる。(山口)
釜のふたのやきはがしともいう。地獄の釜のフタをとる日で、うどん
粉をかいて(ゆりやき、又はじりやきという)焼いて供えたり、食べて
火ぶせを祈る。

旧七月一日は、石尊神社の祭日でもある。(粟沢)

七夕

旧七月七日、七夕はたまにしか飾らない。竹が生えないから、やらな
いようなものといってよい。モミジの枝に短冊などのお飾りを吊したこ
ともある。供え物は何もしない。柏餅をこしらえてふかして食べる。

昔は、着物を七夕様に貸さねばならないといって、虫干しのように庭
へ繩を張って着物をずつと掛けた。天気が悪くても、いい着物を出して、
七夕様に貸すんだといった。

七夕過ぎてから墓場掃除をやる。(山口)

七夕(タナバタ)には水泳きをしてはいけない。昔、西のゴンジイが
カッパに尻を抜かれて死んだ命日なので、川へ行くとゴンジイが出る
という。(畝田)

カマのクチアケという名称は聞いたことがあるが、どんなことをした
のかは知らない。(大穴)

盆中の朝ツクリ

盆の十三日から十六日も、朝ツクリといって、朝草刈に出た。十七日
の盆ガラも同じにした。(小仁田)

二十五日

八坂神社

八坂神社は久保・山口・大戸の三か所にある。もとは旧七月二十四日
が武尊神社の祭り、翌二十五日が天王様の祭りだった。山口・関ヶ原
では昔は先々代戸長をしていた小坂のデエジン(大尻)阿部藤久宅へ集
まって祝ったが、今は什長の家で祝う。天王様(キウウリ)の初なりを供
え、酒を湧かしてキウウリにミンをつけて肴にして飲む。天王様にあげ
ないうちにキウウリを食ってはいけないという。(山口)

二十五日—二十七日

影精進

湯陰曾ではあまり言わないが、粟沢の方では盛んだった。諏訪神社の
宵祭りは旧七月二十五日、本祭りが七月二十六日、二十七日であったが、
その間、前一年間不幸のあった家の者は、外に出るにもホンシロ(白無
垢)かホンクロ(黒無垢)をかぶって外に出た。また谷川岳や武尊山に
も登らなかつた。これを影精進といい、これに対して親戚や村内のもの
は乾麺などを持って見舞にいった。これを影見舞という。女シなどは盛
装していった。(粟沢)

諏訪様祭(二十七日)

大穴に諏訪様はないので、湯陰曾の祭のときに行く。(大穴)
諏訪祭 青葙の箸で赤飯を食べる。青葙の穂を、のぼりの上につけて
立てる。

青大將の大きなものを、オスワサマという。(鹿野沢)

八月

一日

武尊神社の祭り

昭和四十四年から八月一日に変わったが、それ以前は七月二十五日だった。藤原中の総まつりになるが、特別の料理もしいない。(須田貝)

武尊神社の祭には氏子総代五人、上区十人、中区十四人、下区三人、計三十二人のほか、助役、議長、町会議員、ベニヤ林業、小西六などのお客が招かれて、神王を中心に祭典を行なうので、かなりにぎやかになる。(西)

風祭り



ミチガリ(8月2日)武尊神社のギオンで女衆が
ミチガリ、男衆が山の下刈り(山口)
(関口正己撮影)

八月一日に武尊神社のお祭りで配られたカザ祭りのお札を、各部落で

ミチガリしたあと、道のは
ずれに立てるようになって
いる。(一畝田)

八月初めに村はずれにお
札を立てて厄病神を防ぐこ
とをカザ祭りという。(平
道)

道刈り 八月一日は武尊

神社のお祓園で、ムラ中の
者が出てミチガリをする。

ミチガリは女衆が出て鎌を
持って神明様へ行く道や、
その他の道の生い茂った草
を刈り払って通行に便利の

ようにする。男衆は大鎌をもって共有林の下刈りに行く。(山口)

村々総出で七月七日ごろやっていた。原部落では八月一日に武尊神社
へ行く道を、トクの沢の自動車道までミチガリする。(原)

祓園まつり

武尊さまのおまつりの晩に、中区のうち近接している山口、関ヶ原、
荻野入が合同でした。あつまるのは三十戸ほど、多いときは四十戸以上
あった。天王さまをまつた宿は仕長の家。この日は近所の女衆がごち
そうつくりの手伝いに仕長のところへ行った。この日の費用はあとで勘
定する。

この日は、東山の武尊さまへ朝まいりをしおこもりをした。武尊さま
へおまいりに行つてこないものは、のめしもん(意けもの)といわれた。

(荻野入)

八坂神社

八月二日は八坂神社の祓園祭りで関ヶ原で祭っていたが、今は分れて、
天王様の祭りを山口でやる(山口)

七日

七夕

七夕には、七回飯を食って、七回水をあびる。(大穴)

二十三日—二十六日

お盆

八月二十三日から、二十六日迄である。お盆は、先祖の供養をする日
で、盆棚を作り、花を飾り、仏壇より、お位牌を迎えて、くだもの等を
供える。

盆棚は、家により異なるが、新竹で花さしを作りこしらえる。近頃では、
棚をつくり、花びんをさしてすます。とまのだい、あるいはおきのでい
につくる。

迎え火を、かど火といひ、門でたく。
お盆に来る客は、生れた家の人やその子供、あとは又イトコ位までである。

供えものは、くだもの、菓子、乾麺、そば等である。神棚へも、自分が食べるものをその都度供える。

盆に食べるものは、ぼたもち、そば、うどん等である。

送り盆 二十六日の朝、盆棚へ供えたものと、きゅうりへとうきみのししげで馬をつくって、辻または、道祖神のわきに送る。供えたぼたもち、花、線香で送る。

新盆 お寺へ行っておがんでもらい、近親を招いてお通夜の様に泊ってもらふ。昔は酒と精進料理であったが、この頃は魚も食べる。

墓参り お盆は、仏様が来ているといひ、墓参りはあまりやらない。

二十三日の夕方、墓まで迎えに行く家や、十四、五日に家族全員で墓参りに行く家もある。

御先祖様の他に、無縁仏や観音様をまつる。(粟沢)

二十三日が迎え盆である。ヒデ(松ヤニ)やカワラギで、カド火を燃す。以前は毎晩燃したが、今は、迎え盆だけである。

青竹の一節をぬいて、花をさして墓へもってゆく。

竹で盆棚をつくり、ナスの牛、キュウリの馬、うどん、ハスの葉(イモの葉が多い)にナスのさいの目切とひきわりをのせて供える。

おがむどきに、ミソハギの葉を水にひたしてその上にふりかける。

イハイ堂にも、お供えをあげる。

あら盆様は、他の仏様より一段低いところにおく。

盆棚の下にも、線香をたて、お供えをするが、供えたものはすぐさげてしまう。

八月二十六日がおくり盆で供えたものを、三本辻にもって行ったが、今はほとんど墓へ送る。(鹿野沢)



盆 棚(鹿野沢) (青木則子撮影)

盆の一週間前に、インドウバ(墓地)の草をむしる。

二十三日にわらでカド火をたく。墓に新しい竹でつくった花筒を持って行く。

盆棚は茶の間につくる。竹を二本たてて、わら縄を張り、杉の枝をはさみ、うどんをかける。

無縁仏は棚の下に置く。キュウリの馬、ナスのさいの目に切ったものとオサゴを、里イモの葉にのせて供える。

留守の仏壇にも供えものをあげる。

盆花は、アワ花、コメ花、キキョウなど、以前は山へ取りに行ったが、今は花がない。

二十六日の朝早く、供えたものを全部持たせて、三本辻へおくり出す。(谷川)

以前は、旧七月十三日からだったが、蛋の盛んだった明治から大正にかけての頃、沼田市に合わせて、九月に行なったことがあるが、現在は、八月二十三日からである。

(現在、養蚕はほとんどやっていない)

二十三日に、もみじ、または竹で棚をつくる。仏壇から離して、茶の間につくり、繩を張り、そうめんをかける。きゅうりの馬、なすの牛をつくり、くだもの、ぼたもち、盆花(みそはぎ、おみなえし、ききょう)を供える。

カド火 家の出入口、ケイ道で、松のヤニ木を燃す。

あら盆 近所、親戚の人が、ほしうどんを三〜五束もって、線香をたてに来る。

あら盆の家の当主は、諏訪祭のときに日向に出てはいけないという。おくり火、仏様におはぎを持たせて、掃す。おくり火をたき、棚のものを、三本辻に置く。最近は川へ流す。近頃は棚もほとんどつくらなくなった。

無縁仏 人にならないガキドウ、結婚前に死んだ人をさし、棚の下におく。

仏壇 あき盆といつて、しめておく。(大穴)

隠見舞

親のあら盆の時にはかげにいる。日向に出てはならない。便所へ行くにも笠をかぶって行く。七月二十三日〜二十六日までに蔭にいる。二十三日の本まつりには出てもいい。かげにいる時に見舞うが隠見舞。

ご精進でお淋しうございます。もう少しのご辛抱です。という意味のきまり文句があったが、忘れてしまった。(小日向)

旧八月一日

八朔の節供

大芦の神明さまで獅子舞を上げる、この日はごちそうをつくってお客をよび、むこが来る日になっている。(須田貝)

旧八月一日はハツサクで、豊作を祈るのだが、行事は特別しない。今年もなから実が入るなどと挨拶する程度である。(山口)

平出の赤城神社の庭で、ハツサクの日に獅子舞を一ニワだけやる。親戚を呼んで赤飯をごちそうする日になっている。(平出)

ハツサク礼 若夫婦が粉やうどんをしょって実家へお客に掃り、行った先を贈うほど持ってきた食料でごちそうをこさえて親に食べさせた。酒も出してごちそうしてくるので、親も待っている。親戚は呼ばない。お返しは別にもらわない。(山口)

八朔

裸ろうそくを、竿の先につける。

八朔以後は、仕事に忙がしくなるので、この日が遊び終いである。(鹿野沢)

八朔礼として、この日線・舞が実家に掃る。(大穴)

八海山

部落の希望者で講をつくり、代参が行ってお礼をもらってくる。講に入っている家では、長い竿の先にちようちんをつるして、中にろうそくを入れて、庭先に立てる。八海山に行くと、その火がみえるとい

う。(大穴)

越後の八海山へハツサクにお参りに行くかわりに、長い竿の先にはだからうそくをつけて庭先に立てる。その火が八海山に登るのが見えるといわれた。(山口)

八月一日は八朔。八海山に「明りを上げる」といい、裸ろうそくを竹の先にする。高く上げるほどよいとされ、新潟の八海山に登って見ていると遠くで上げた明りまでよく見ると言った。(阿能川)

十五日

十五夜

旧八月十五日で、だんごはせず、赤飯をつくる。以前はこの日に八幡宮の庭に敷物を敷いて獅子舞をした。(須田貝)

十五夜は旧八月十五日。庭先にワラビ粉をつく石臼の大きいのが出て

いるので、その上に箕をのせて、まず酒を供え、あとで下げてからあんを入れなくて餅をのせて供える。大根を二本添えて置く。里芋は作らないので供えないが、枝豆などを供える。ススキは使わない。

若え衆が夜遊びに盗みに行く。(山口)

旧八月十五日は、「豆の年取り」とか「大豆の年取り」といい、大豆とススキを供える。(小仁田)

十五夜には団子と、葉つきの里芋、枝豆を箕に入れ、すすきと共に供える。子供が取りに来た。(大穴)

十五夜には八幡神社にお参りをする。餅に大豆・大根を供える。

昔は、餅さしといって、子供達が、人の餅をとって食べたが、近頃はやめた。(粟沢)

二十八日

稲荷祭

おかりやを竹で作り、赤飯又はうどんを供える。(粟沢)

九月

一日

風祭り

九月一日は今もやる。道刈りをしたあと風神様を祭り神主にお札をつくってもらう。以前は道を横断してしめをはった。大穴や鹿野沢では大きなわらじを下げておいたが、今はしていないようだ。その後神前で酒を呑む。(粟沢)

注連縄でソウリを一足つくり、小日向境と大穴境に一片ずつ飾る。また、幣束に祈願文を書いて、部落の各神社(ポンテンマイリ)をする。(鹿野沢)

一日(または二日)

八丁じめ

風祭りに、村境にナワをはり、わらじなどをかける。現在は、神主が神札を村境にはる。(粟沢)

昔、柿平の上やアテラ沢の境など、ちよと村の境になる所に木を立てたりして、七五三のシメ縄をはった。(山口)

昔やったことがある。(大穴)

三日〜六日

盆

旧七月十三日から盆としていたが、昭和初年から九月三、四、五日に変えた。理由は、旧でやると秋蚕の多忙な時期にあたり、上塚前で収入もなく、九月七日にお諏訪さまの祭りとして、その前にお盆とすれば休みが続く、獅子の練習その他でも都合が良かったことだった。お諏訪さまの祭りも七月二七日だったのを九月七日に変えたのも同様であった。

バンメーリ(晩参り) 十三日にお寺参りに行く。寺の入口に店屋が

出てにぎやかで、子どもの楽しみだった。

盆むかえ 十三日夕、ちようちんで墓から盆さんを迎えて来るが、門

の石の上にヒデをのせて、ヒデを燃して迎える。

盆だな 盆だなは、ホーの木を二本前の方立て、百合、おみなえし、萩、ききょう、くずの花などをゆつけてかざる。昔は無理して蓮の葉を買って来てきゅうり、ぼたもちなどを上げたが、いまはホーの葉の上にあげる。きゅうりは足をつけて馬をつくり、なすは牛をつくってトキービ(トーモロコシ)の毛で尾をつくる。水は盆だなには上げない。

アラボン 親せきからお墓参りに来る。

お寺で施餓鬼というのでお経を上げてもらう。

送り盆 盆にかざった花をつけたさお、つくりものの馬や牛、ぼたもちをもって墓参りに行く。このときは送り火はたかない。(須田貝)

盆棚 盆棚は三日の朝作る。ホウノ木二本を前に立て、盆バナを飾る。(平出)

高さ三尺ほどの台に板をのせ盆ごさを敷いて盆棚を造り、前に竹がないのでかりにホウの木を二本左右に立てて、いろいろの花を飾り付ける。ホウの木にはタズフジの花の咲いたのを渡して、仏様のしよい繩にするためでないうどんなどを引っ掛けておく。

盆棚には位牌を出して並べ、果物などを供え、前に近親者の持ってきた供え物を上げる。

仏壇はからになるが、お留守居様はおかない。(山口)

盆迎え もとは旧の七月十三日の夕食後、盆迎えのため応永寺へお寺参りに行った。おとなが盆礼(金包み)を持って行き、和尚さんに挨拶して寺の盆棚を拝んでくる。若い者や子どもまで遊びに集まって、寺が大変にぎやかになり、行商も店を出したりした。菓子屋が何軒も出て、餅や砂糖を小袋で売っていた。砂糖の小袋を買ってボタ餅に付けて食べた。

家に来てケエドで松ヒデを燃して迎え火とする。家の戸を明けておいて燃す。(山口)

盆の間は、旧七月十三日、十四、十五日(現在九月三日、六日)とも夕方になると、ケードでマツヒデを燃す。家の戸を明けておいて火を燃す。(山口)

迎え火 三日の夕方迎え火をたく。川木(流れ木)・オガラ・ワラ・杉の葉などをカドで燃すのでカド火ともいう。三、四、五、六日の四日間とも夕方、カド火を燃すが、迎え火だけの家もあり、送り火だけたか家もある。(平出)

盆送り 六日に盆送りで、カド火をたいて夕方送り出す。盆棚に供えた物を墓へ持って行って置き、キウリ・ナスの馬を供える。(平出)

盆の十六日(現在九月六日)の朝飯を食べるとすぐ盆棚を送り出す。フウツ葉(ホウの葉)にお昼としてすし・おはぎやナス・フロウ(インゲン豆)・ナシなどをのせてお墓に置いてくる。キウリに四本の棒をさして馬をこさえ、トウモロコシの毛をシクボにして、いっしょにおく。盆花もそえて出す。盆花は紫色の花・萩・ミソハギ・赤いヤチユリ等の花を用いる。買った造花も使う。送り火はもさない。(山口)

施餓鬼 戦前までは盆の十四日に寺で施餓鬼を行ない、前の年に亡くなった者の供養をまとめてした。亡くなった者の家族や近親者が呼ばれたので、イケ・イチャマが多ければ大変な人数になった。呼ばれてくる者からそれぞれ施主に包んで来て出すが、施主から寺へ決まった額を包んだ。寺へ呼ばれる順序があり、お昼が出された。寺には百人分からの什器があり、近所の女衆を頼んで賄いをして、昼御飯を用意した。十五日にする家もある。(山口)

新盆 アラ盆の家は墓地に灯籠をたて、明かりをつける。近い親戚を呼ぶが、呼ばなくも来ることになっていて、寺へ施餓鬼に呼ばれた。家では別にしなかった。近所からはアラ盆見舞に来ない。(山口)

盆参り 亡くなってから三、四年の間は、近親の者が盆礼に来る。昔は近所も呼んだ。(山口)

盆の食習 お盆のうち十四日朝と十六日朝の二日(現在は九月四日と六日)はぼた餅を作る。他はうどんやませ飯を作る。魚や肉は盆棚には上げない。(山口)

盆の禁忌 盆のうち川遊びをするな、カッパにケツを抜かれるという。そのほかは、生き物を殺すなどとは特別にいわない。(山口)

七 日

諏訪神社の秋祭り

九月七日の諏訪様の祭りには、神棚にカヤの穂を上げて、赤飯を供える。カヤの箸で赤飯を食べる。(山口)

神明宮の祭り

山口の神明宮のオクンチは九月七日に祭り、獅子舞をする。獅子舞は上・中・下の三組から、三年に一度ずつ奉納するもので、今年はその組（山口・大滝沢）でやる。来年の番にあたる組の者が、前日に社地刈りをして舞殿のシャジキ（棧敷）の石段にマツグイを二本ずつ持ってきて屋根をかけて準備をする。（もとは屋根なし）。獅子舞は四ニワあって、十才ほどの子どもから若い衆へだんだん年が大きい者が舞う。三頭だての獅子で頭は三組ある。太鼓と笛はおとながやる。（山口）

彼岸

現在は新暦でおこなっている。行事の内容は、春の彼岸の場合と大体同じである。ただ春の彼岸に雪の深いところでは、年忌に石塔を建てような場合に、秋に建てようとしている。（山口）

旧九月十三日

十三夜

旧九月十三日、もちをつく。（須田貝）

十三夜は旧九月十三日とする。十五夜と同じようにして、箕の上に粟のついたままの大豆を置いて供える。ほかのものは供えない。（山口）

旧九月十三日は「里芋の年取り」とか「粟の年取り」という。（小仁田）

十三夜は十五夜と同様である。（大穴）

三峯神社

祭日は旧九月十九日、三峯様には石宮があり、三峯講があつて、むかしは山の頂までたき火をしてオコモリをした。（粟沢）

オクンチ

藤原中もいくつかに分れていて、お互いにオキヤクッコーヨビッコをした。赤飯とシトギダangoをつくる。

十四日 一畝田

十九日 平出

二十八日 西、原、湯ノ小屋

二十九日 須田貝

（須田貝）

オクンチは旧九月九日、十九日、二十九日で、初クンチ、中のクンチ、オクンチと呼ぶ。

イザナギ、イザナミ両命を祭り、一門一家の繁栄を祈る。（粟沢）

一族の苗字によつて、秋祭りのオクンチの日取りが違っている。

阿部クンチは旧九月十四日（新十月十四日）で、一畝田が一番早い。

平出クンチは旧九月十八日で、平出と湖底に沈んだ橋詰・貝沢の夜後三

が郷、今の下区全部で赤城神社を祭る。佐藤クンチは旧九月二十八日

で、中区が神明宮を祭る。山口も神明宮を祭る。安達氏も二十八日に祭

る。中村クンチは旧九月二十九日で、西組が武尊神社を祭る。大坪氏も

二十九日に祭る。

オクンチは農家の取納祝いなので、わざわざイチマキによつて日を違

えて祭り、行き来ができるようにしている。同じ地域に同じ苗字で住ん

でいるものをイチマキといひ、正月の飾り付けや祭り方なども違ってい

る。（西）

旧九月二十九日はシマイクンチで、ムラの鎮守や氏神を祭る。阿部氏

はオクンチ様（熊野神社）、阿部氏以外は神明様を祭る。奥山には雪をか

ぶつている寒い頃だが、前の晩にムラ中で出て神社の掃除をしてノボリ

を立て、お灯明を上げてくる。オクンチの朝は、夜明けを待って霜柱を

踏んで神社へ朝参りする。家中全部そろつて行き、重箱に赤飯とオシト

ギを別々に入れて二重ね持つて行き、神社でカヤの箸を使ってフウ（ホ

ウ）の葉の上に赤飯とオシトギをのせて神様に進げる。オミキ（神酒）

も一升供える。愛宕様・秋葉（アキヤ）様などの神々にも同じようにフ

ウッ葉にのせて進げる。

家々からの朝参りが終るのをジツチョウ（什長・組長）が、時期見は

からって、みんなの上げたものを下げて集めて、オミゴクとして握り飯に作って二、三年生以下の小さい子に分けてくれる。赤飯とオシトギをまぜないように二品作るが、少しまざる。

一昨年までこの行事をしていたが、昨年からは止めてしまった。須田貝ではお膳を持って行つて供える。(山口)

一畝田の阿部氏の氏神はオクマン様(熊野神社)で、秋祭りのオクマンチはこの辺で一番早く旧九月十四日に祭る。それまでに稲刈りをすませしておく。十四日の夜、月がある時にお参りに行くが、フウ(ホウ)の葉にオシトギと赤飯とうどんを盛って行き供える。オミキを上げて灯明をつける。その前でもオミキを一杯いだけてくる。兵隊に出る時も嫁入りの時も夜お参りした。

オクマン様の氏はクマの肉を食わない。

甘酒祭り 一畝田のタンチ祭りは甘酒祭りをしてきた。青木沢では今でも甘酒祭りをしてる。(一畝田)

オクマンチは旧九月九・十九・二十九日。

ハツの九日・ナカの九日・オトクマンチの三回のうち、普通はオトクマンチにまつる。

新薬で、稲荷様のオヤリヤをつくり、赤飯をしんぜ、甘酒を作つて飲む。

甘酒が「どぶ」にかわり、それが廃止されてからは行なわれなくなつた。

荒木佐門次・山口市十郎・木村要吉の三家の稲荷様(社会生活の地図参照)は位が良いので、ナカの九日にまつる。

ホウの葉に、オシトギを包んで食べる。(鹿野沢)

秋のオクマンチ(オトクゲンチ)

子どもが小屋をかけて、さつまを焼いて食つたり、柿を食つたりした。この日だけは人の家の柿をとつてもよいとされていた。小屋は竹や木で作られ、グルリをかこい、薬を敷いたそまつな物であった。食物は上級生

が下級生にあつめさせた。(鹿野沢)

オベツトー オクマンチには、子どもたちは神社へ行つてオベツトーをする。子どものある家では子どもたちにセツケエゼンという膳をあずける。このお膳をお宮の前に並べておくので、村の人たちは持つて来たシトギと赤飯を少しずつ分けて上げてくれる。フー(ほう)の葉の上のせて行つたものは適当に分ける。子どもたちは社殿の後にいてちよつと出て食べた。その日だけの別当である。(大芦)

シトギ シトギはオクマンチと十二講の時に作る。神様に上げるのは米の粉を水でこねるが、ふつうのものは湯でこねる。これをイロリの灰の中で焼いて、しょうゆでもつけて食べる。丸くて平べったい形にする。十二講の時には、十二個作つて、膳のせて進める。親戚を呼んでやったり取つたりする。(山口)

二十八日

神明祭 (旧九月二十八日)

氏神明といつて、阿部なら阿部神明、真庭は真庭神明、桑原は桑原神明と粟沢に三社あり、豊受大神宮を主神とした神々を祭る。

おかりやを作り、本殿とかり屋へ供え物をし、参詣して氏毎に酒肴で祭る。宿は順番でやり、赤飯を食べる。(粟沢)

ある時、山口市十郎の家で、忙がしくてお供えをするのを忘れていた。夕方暗くなると、狐が屋根をかくので、忘れていたことに気づいて、急いでお供えをすると、屋根をかく音が止んだ。(鹿野沢)

十月

十二日

山神祭

大山祇の命を祭り、山神祭を賑やかにやる。(粟沢)

二十日

オエビス餅

一月二十日に働きに出かけたエビス様が帰ってくる日。沼田原町のオエビス様の本宮から、お札をもらってくる。

お頭付を供え、財布を出して、出入りの手伝人達を呼んでふるまう。エビス様のそなえものは、縁どおくなるから、子供にあけてはいけな

い。また、大神宮様より高いところにあつてはいけないという。(大穴)

秋祭り

十月は神様が出雲へ行っているので、秋祭りは、新暦十月二十日過ぎに行なう。(大穴)

旧十月

神無月

旧十月には神さまがみんな出雲へ行つて留守になる神無月だから、御祝儀はやるな、という。(須田貝)

旧十月一日は、神々が高天原へ引上げて会合するために旅立つ日。出雲の国へ、八百万神をおくりだす日。(粟沢)

旧十月は神無月のため、この月にはご祝儀をしない。一日に神様が出雲大社へ会議に出かけるので、留守になる。十二様は残っているが、カマ神様が残るかどうかわからない。(山口)

十日

十日夜

旧十月十日、もちをつけて外へ出して供える。この日は子どもの祭りで、みょうがのからを中に入れてわらをしばったわらでっぽうをつくり、

集団でもぐらを迫るために地面を叩いて歩くが「おらが家にも来てくれた」とうれしがられた。うたは次のようなもので、「十日夜、十日夜、朝そばきりに昼だんご、ようもち食つたら、ぶったたけ」とやる。現在はやらない。(須田貝)

十日夜の餅 十日夜は旧十月十日に農家が祝う。お月様の餅をついて、あんな入れない大きな餅を一個盆に入れて、大根といっしょに庭先へ出しお月様にあげる。餅は次ぐ日に切つて家中で食べる。(山口)

ワラデッポウ 十日夜には子どもが新わらでツトッコの大きいものを作り、中にミョウガのからを入れて縄で巻く。これで地面をたたきながら、男も女もそろつてムラ中を回つたり、いい月夜の時にはよそ村まで出ることもある。唱え言「十日夜ノワラデッポウ 朝ツバキリニ昼ダンゴヨウメシクツチャブタケ」と大声で唱える。家々の庭先でたいて、何もくれないと「モグラがいっぱいもぐらあ」と悪口をいう。小銭をくれる家が多い。

今もやっている子どもの行事である。これはモグラ除けで、モグラが土を持ちあげないようにたたくのだという。(山口)

十日夜の天気 十五夜にくもると、十三夜や十日夜にもくもる。十五夜に晴れると、十三夜も十日夜も同じように晴れるという。晴れた方がよいわけだが、年によつては雪がくることもある。たいがいいい月夜でどこまでも空が澄んで、子どもたちがワラデッポウをたいてムラ中を回る。(山口)

薬でトウカンヤをつくり、子供達が、

十日夜 十日夜 朝そばきりに 昼団子

夕餅食つちゃ 腹太鼓(ぶっぱたけ)と唱えながら、家々を回つて、駄賃(餅)をもらった。駄賃の出しつぷりが悪いと、いたずらをした。

トウカンヤに、みょうがを入れると音が良い。

もぐらが、田畑をつぶさないようにと云ってやる。

大根の年取りとも言う。(大穴)

薬でトウカンヤをつくり、

十日夜 十日夜、いいもんだ

朝ソバキリに 昼団子 夕餅食っちゃ

ぶっぱたけ

と、モグラに地をもちあげられないようにと村中をたいて歩いた。

大根の年取りともいい、十日夜すぎると、大根をとつても良い。(谷川)

十日夜 「大根の年取り」といい、大根二本と餅七個を箕の中に入れて

供える。わらでっぽうの芯にみょうがを入れて、まわりをくぞ藤のつ

るで固く巻く。子供たちは、「十日夜はいいもんだ、朝そばきりに、昼団

子、よう飯食っちゃぶったたけ」と叫えながら、パタンコン、パタンコ

ンと屋敷を歩いて歩く。こうするとモグラがおこさないという。家によ

つては、一升マスに団子十個、お供え一個を入れ、大根二根を箕に入

れ、縁側に供える。

十日夜のわらでっぽうは、柿の木の枝にさげておく。柿の実入りがよ

い。(寺間、小仁田、川上)

十日夜 お月様を祭る。餅・団子・又はうどんをつくり、大根と豆を



柿の木の枝にさげた十日夜の
わらでっぽう(小仁田)

(中村和三部撮影)

一緒に月の見えるところに供える。(十五夜と大体同じ)

子供達は、ミョウガを芯に入れて、薬で作った棒で、地面をたたき歩

く。たたくと、もぐらが、とられないといっている。

十日夜の唱え言

十日夜、十日夜、十日たてばお恵比須講

十日夜、十日夜、朝ソバ切りに昼団子、夜 餅食っちゃあ、ぶったた

け。(粟沢)

とうかみやとうかみや あさそばきりにひるだんご ようもちくつ

ちやぶったたけ(湯原)

エベス講

十日夜の十日後がエベス講で、机の上に恵比須、大黒を並べ、その前

に家内中の有金を全部入れた一升ますを供え、めし、汁、かしらつきを

盛ったお膳をエベスセンにつくって二組供える。エベスセンとは左膳の

ことである。(須田具)

恵比須様は金の神様、商人の守り神(日本でいえば、事代主命)で、

この日は、働らいたお金を持って来る日なので、お金を受取るのは良い

が、出すのは控える日という。

おかしら付の魚・餅又はうどんと、お金を供える。お金は沢山供えるほ

ど良い。

箸は、萱の長いものをつかう。(粟沢)

十一月

十五日

カマキヨメ

赤餅を、釜神様にあげる。(鹿野沢)

カマ神のかけ穂

取れ秋になると、稲の穂を田んぼから抜いて来て、カマ神様の前に掛けて供える。(山口)

二十三日

太子講

デエシ講は、あずきがゆのお膳をつくり、黄箸の長いものをつくって進ぜる。職人の神さまだというので、聖徳太子をまつつという。(須田貝)十一月二十三日はデエシ講で、夜アズキガユをたく。カユの中に米の粉で小さく作った「デエシ講のダンゴ」をいっぱい入れて、二ゼン分を一ゼンに盛って膳にのせ、オボケという麻をうむ曲げ物の上にお膳だとして供える。お膳にはアズキガユのほか、大根オロシ・ゴマアユぐらいを皿に盛り大根汁をつけ、長いカヤの箸を添える。デエシ講は足の悪い神なので、長い箸を添えるのだという。また、デエシ講は弘法大師だという。夫婦でくる神だともいう。

この日は「デエシ講荒レ」といって、荒れる時期で、ふぶいてえらいもんである。(山口)

小豆粥に、長い黄の箸を供える。(鹿野沢)

萱で、お膳より長い箸をつくり、赤飯にそえて供える。

デエシ講のあとがくし。(大穴)

大豆がゆに団子を入れたものをかゆ柱といい、黄の長い箸(四十五センチ位)をそえて神棚へ供える。

この箸で字を書くと、上手に書けるようになるという。(粟沢)

刈り上げ祝 かわり物を作って食べるくらいで、別に祝をしない。(山口)

ツジユウダンゴ

作物の落ち穂を集めてつくる。(粟沢)

ヒビナオシ

温泉に来るのは、遊びに来るよりも病気なおしが多く、昔は胃腸病・

リョーマチの人が来た。また百姓しごとの終ったときに湯治に来た。川場・池田あたりからも武尊越しにやって来て、一週間から十日くらい自炊して行く人が多かった。この人の中には、春の田植えの終った頃来て湯治しながらイワナ釣りをして何貫取もってほして、一年中食べる分とした人もいた。(湯ノ小屋)

旧十一月一日

神迎え

旧十一月一日に出雲から神様が帰ってくる。アズキ飯をつくるくらいで、ほかの行事はない。(山口)

旧十一月十四日

釜神様

火ぶせの神様で、いつも清掃していきれいずきな神様である。釜神棚に供えものをする。(粟沢)

十二月

一日

カビタリモチ

つきたてのもちをひら膳の上にあけて切り、お供えものは白いままでとって、食うものはどんどん小さく千切ってはくるみみそであえたものをつくって食う。くるみをすり鉢ですり、味つけをしたものをくるみみそというが、熱いもちの熱が加わるとくるみとくるみが白くなってゴマのようになり、みそは赤くなるのでちやうどカビの生えたように見えるのでカビタリモチという。埼玉の食べ方という。(大西)

十二月になってすぐのような気がしたが、川ながれにやるものだと聞

いている。食うもちの一片を井戸（飲用に使う用水）に流せといわれてやることがある。（須田貝）

川びたりという餅をついて、馬や牛によく渡れといつて食べさせる。

（粟沢）

十二月一日に川ビタリ餅をついて食べる。（山口・大穴）

十二月一日にカビタリ餅といつてマゼ餅をつくる。（鹿野沢）

川流れ餅 十二月一日には川流れ餅で、川流れの人の供養をするのだという。餅をついて川へ流したり、馬にくれたり、猫にもくれたりした。（原）

馬の年取り

馬におしるこを、戸主の茶碗で、やしなつて食べさせる。（鹿野沢）

八 日

事おさめ

メのあるものを外に出しておき、あずきめしをつくつて食う。針供養なし。（須田貝）

十二月八日

十二月八日を事納めといい、餅をついて里の親にくれる。（粟沢）

十二月八日

十二月八日はオトおさめで、おほぎをつくる。カゴを外に出しておく。マドウはカゴの目数を数えられないという。（大穴）

十三 日

すずはき

十二月十三日か二十三日にすずはきをするが、他の日は膳をみてやらねばならない。竹か何か竿にわらをつけたものをススオトコというが、使った後はしばらくの間、わらをつけたまま家から離れたところに立てしておく。（須田貝）

煤はきは十二月十三日頃にする。なるべく早くやる。中心になる人を煤男という。

主婦が中心になる家もある。（粟沢）

十二月十三・四日はすずはきである。この日門松を迎えてくる。「切りあげる」と言つて、家の川下から切つてくるのが良い。（大穴）

十二月十三日は煤はきである。十二月十三日なら、何の日でも松をとつて良いことになっているが、日が早すぎるので、二十八日前後にとる。（谷川）

十二月十三日をコウボウ様の煤はきという。この日なら、何の日でも、煤はきをして良い。（鹿野沢）

暮の一週間前ごろすずはきをする。竹がないのですす竹は作らないが、ワラの本を上にして木の林に三か所しはりにしぼつてスス男を作る。スス男ですずを払ったあと、道はたにすずを出して雪の中にそのスス男を立てておく。正月までにはこわれてしまう。（山口）

十四 日

釜神

湯拾曾の本家族館の釜がゆだった日。（大穴）

二十三 日

冬至

「冬至トウガ」といって、トウガ（カボチャ）を煮て食う。カゼをひかないという。（山口）

ナスの木を燃して、腹をやまないように供養と拝礼をする。カボチャを煮て食べる。

冬至豆腐を供えたり食べる。（粟沢）

冬至とはとうなすを食べる。中気にならない。（大穴）

お松迎え

お松には五葉松を使うが、家よりシモから迎えない。カミの方から迎えるものだといいわれ、わるくない日に迎える。オッケエ（大きい）かっこうのよいものを使うと大きいドーロク神ができるからで、門松二本、歳神二、十二さま一、大黒、オシラ、荒神さま各一など小さいものも迎

えてくる。(須田員)

山へ行って、オサゴをまいて挿んでから、正月用のお松を伐る。取ってきたお松は雪をさけて軒下のけがれない所へ置き、オサゴ(米)やカツシを一升ますに入れて供える。(久保)

お松は十二月の吉日に、自分の所有の山から迎えてきて、家中の間毎に、その他屋敷桶荷・氏神明・門にたてる。(粟沢)

二十五日

しめなわくばり

注産繩をつくり、石宮その他各所にくばり歩く。(大穴)

餅つき

二十八日ごろ餅つきをする。トヤではシシ餅といって、年とりの晩にシシをとってきてかいて食べた。(山口)

二十八日か三十日に餅つきをする。九日餅はつくらない。(鹿野沢)

大正月に、一色餅をつくらないって、米と粟・稗と二色のおそなえをつくった。

戦後は、食糧難とも合わせて二色の餅をつくっていたが、最近はずくづくなってきた。(谷川)

おかざり

クンチかざりと一夜シヨール

はいやがるので、オシメナイ

は暮の二十八日か三十日に、

おかざりは三十一日にやる。

たな板は毎年同じものを使う。

昔は歳神さまの方があるので

曆をみては向きを変えた。

(須田員)



正月餅をつく(藤原明川)

(都九十九一撮影)

オシメナイ すすきはきを十三日にするわけだが、ふつう二十四日・五日にする。そのあと風呂に入ってきたりになってから、オシメナイをする。ふつう餅つき前にする。(藤原)

シメ飾り 一夜ジメはやめろというが、たいがい年取りの日に作る。(山口)

オシメ配り オシメと松飾りを作るのは暮の二十八日のわけだが、都合で大晦日にやる。

大晦日の夕方、オシメを持って、鎮守様・十二様・屋敷桶荷様・イド

神様(水前様)・墓場などに進んで回る。(久保)

正月のお飾りをする時に、シメ飾りをたくさん作り、家の外の神々にも供えてくるのをタバリジメという。武尊神社に三本、墓地に三本、庚

申様に三本、井戸に一本供える。(西)

松飾り 一族によって松飾りの形式が違ふ。久保では五葉松を飾る。(ない所は二葉松ですませる。原の方も五葉松の家がある。久保)

カド松 山から高さ三間もある松を取ってきて庭に立てた。久保は五葉松を使うが、ほかの部落は二葉松を立てる。カド松の根っこにオニウ

チギを三・五本ぐらいっ付けた。オニウチギはイロリで燃す三尺ぐらいの木で、何の木でもよい。ネツイ人が新たに山から取ってきてたんと

付けた。カド松には三方日の間、朝・夕・晩餅を供える。七草ガニも供える。(久保)

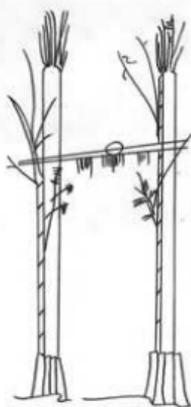
門松の竿には長さ三間もあるヒノキを共有山(名倉山)から伐つてきて立てる。ヒノキはためて、桶を掛けるハンデの棒にするので、軒下に保存しておく。今は竹でやるようになった。(山口)

松を、大神宮様、氏神様、大年神様、桶荷様、水神様、恵比須様、オシラ様の七ヶ所に飾り、茶の間に、オシメを張りめぐらす。

門松は上方に葉を残して、皮をむいた杉の木(長さ七、八m)二本に

松と竹をつけて家の入口に立てる。それに竹を横にわたし、七五三の注

連繩を張って、真中にみかんをつける。根元は、ナラの木で、一方を七

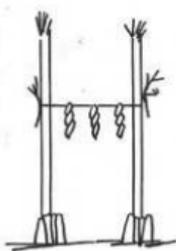


本、一方を八本にしてよせる。これをオミウチ木という。(谷川)

一夜飾はよくないというので、三十日に飾る。

庭に、皮をむいた杉の細木(松ぐい)を二本立て、注連縄を張り、松をつける。

松ぐいには、松をつかったこともあるが、たいていは杉で、正月に使ったあとは、桶のハツテにする。この日餅つきをする。(大穴)



お注連の一夜飾りはするなという。

餅は、三升臼で、十臼くらいつく。

(四升臼の場合もあるが、少ない。)十臼のうち、モチ米の餅 四、マゼ餅

二、栗餅キミ餅 二、くらい割合でつく。お重は、白餅だけでつく。

お注連の一夜飾りはするなという。

以前は、茶の間に、七五三にお注連を張りめぐらしたが、今はオッポウジメ一本だけを飾る。松やお注連は、今頃は店で売っているので、買っつかい、家できつらなくなった。松の枝に、塩びき、イワシ、スルメ、ミカン、干柿などをさげる。

カド松は六尺くらい杉、またはナラの木の皮をむいたものを立てて、松を結いつける。根元にはナラの木を割ってつかう。山口、荒木家では、竹はつかわぬ。

カド松には、毎年新しい木をつかう。

お重は、白餅だけで、十重くらいつく。大神宮様と年神様には、大きな二重ねのおそなえを、半紙を敷いて供え、仏様、オシラ様、荒神様、便所神様へは、重箱に入れて供え、正月のお雑煮、そばなどいっしょに入れる。

便所のおそなえを食べると、虫歯つかないという。(鹿野沢)

三十一日

クバリオシメ

クバリオシメは、三十一日にくぼる(小仁田)

クバリジメは、三十一日の晩までに、水神さま、墓場、十二様、アズマヤ様、肥にわなどにあげた。(寺間)

クバリオシメのことを、ボウジメ、モリジメ、シミツクリともいう(粟沢)

一夜ジメはしない。飾るまでは箕の中に入れて正月棚にのせておく。

(藤原向山)

十二月三十一日に、モリジメ(四方ジメ)を、神棚(八幡様)祖先の墓へ供える。(粟沢)

大晦日

盆暮勘定のときは、借金のいいわけなど大変で、いろいろにいそがしかった。

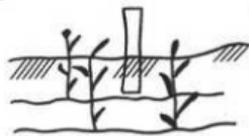
この晩は、早く寝ると白毛になる。(須田具)

大みそかの晩、湯をわかして、年男を先に順番に必ず入る。この晩湯に入らないとむじなになるといわれる。

年とりの日。早く湯を浴し、年越そばを食し、就寝。(粟沢)

正月棚

神棚とは別に作り、二十日正月まで置く。家により廻り棚といって、あきの方の方位を年々廻って作る家と、定棚といって同じ所に作る家とがある。板で棚を作り、松を二本立てる家と、阿部姓の者には三本立て



る家とがあるが、そのわけは明らかでない。藪で
作った七五三の注連（紙の注連をはさんで作り、
その奥に大年皇大神の御札を祭る。供えるものは、
おそなえ、燈明、串柿等である。

松へは、頭付、すめ、みかん、昆布等をつる
す。この飾りの賑やかな程繁昌のしるしといひ、
飾りの小さい家を、暮しが沈んだといっている。

(粟沢)

お正月には部屋に四方ジメを張り、アキの方向
に年神様を祀る。これが年によって動くわけだ、

マツリダナをつくる。オタナは厚さ四〜五分の六尺の一枚板で、タナに
は真中に年神様、三〜五カイの松三本、棚への供え物は二組である。

(粟沢)

正月棚にお飾りをしてから何も上げないでよくと、貧乏神が上がる
いう。二十日に小正月のお飾りを取ると、すぐわら細工を上げた。わら
細工は草刈り縄で、二十日の午前になっておいた。この縄は夏に毎朝山
から馬に一駄ずつ草を刈ってくる時に使用する。(原)

正月棚は「年神様」とか「おタナ」とも呼ぶが、「神棚」ということが
多い。昆布、柿、みかん、いわし、いかなどを飾る。最近まで「マワリ
ダナ」といって、その年の恵方に棚を設けた。また、その頃は「総ジメ」
といひ、棚のある茶の間の四周に縄ジメを張りめぐらした。(小仁田)
年神様とかオタナといひ、茶の間に作った。昭和四年の大火までは、
「マワリダナ」を、総ジメを張った。(綱子)

正月棚は神棚の前につくり、するめ、こんぶ、かつお、柿、かち栗な
ど、縁起の良いものを飾る。(大穴)

年神棚 棚の一枚板と出るわくがあり、縄をなつて下げて作った。大
神宮様の棚とかネの手に吊る。おはらい様（伊勢神宮の札）を置き、オ
シメを飾り、お供え餅を膳に供える。ミカン・カキ・コブ・イワシ・ス

ルメなどを棚の前の松の枝に下げたり、柿を渡して下げたりしたが、今
は略した。(久保)

事勸定

昔はふだん掛けて買ひ物をしたので、暮に商店から金を取りに来た。
また、商店へ暮の買物に行き、「何とか年を取らせてくれ」「ご祝いを置
いて行くから一本入れてくれ」ということで、二合どっくりを一本つけ
てもらひ、飲んでふらふらになって帰ってきたりしたものである。

借金すると利率が一割五分もつき、払えないと、畑をよこせ、田をよ
こせといわれた。(山口)

歳暮

子供が一人前になると、また嫁にやつた子供がもってくる。(大穴)
特に、その年世話になった人や、交際の深い人に対し、酒、魚、ミカ
ン、しょうゆ等を贈る。(粟沢)

稲荷祭り

屋敷稲荷の祭りは特別にしない。年取りの晩に、小さいツトを五つ作っ
て供えておく。(山口)

年取り

年取りの晩（大晦日）には、家中の者が茶の間に集まってお膳を用意
して食事をする。ふだんは台所で食事していて茶の間のイロロは使わな
いので、たき火を盛んに燃やす。その回りに膳を出し酒・サカナでお膳
立てをする。年取りザカナにはニシンのスジツケやイワシのスジツケを
初めて取り出して食べる。これでお正月気分になる。

早く寝るとシラガが生えるというので、除夜の鐘を聞くまで起きてい
る。(山口)

大晦日から元日までは、火をたやさない。豆がらで火をたきつけてお
く。(谷川)

口頭伝承

はじめに

新刊の「昔話は生きている」(三省堂新書)を見ると、全国には、昔話を百話二百話と語る語り手が、まだまだ残っていることが判る。特にお隣の新潟県では、水沢謙一氏 노력により、百話クラス以上の語り手が、十三人も紹介された。その新潟と縁の深い水上地区において採集されたのは、「ムカシムカシアッタト」という冒頭の文句と、「イチチガサケカッタトサ」という結末の文句だけである。かつての調査地、片品・白沢も、昔話は乏しかった。「利根の昔話」でえろん息子」(昭和二六年)を編んだ時にめぐりあった新治村の細川にきさんのようなお婆さんは、水上にはいないのだろうか。二五一話語る新潟県長岡市の下条登美さんは、明治三七年生れだという。今度の調査を機会に、すぐ隣りにいるかもしれない語り手の紹介をお願いしたい。

怪異は、天狗に始まり、十二様・ノツチ・ひかり玉・狐・むじな・いたち・ねこ・かっぱ・くも・蛇・雷獣に至るまで、話題に事欠かない。夜は彼等の活躍の舞台であったが、上越縁の開通にともない、象徴的な私たちの死によって、幕を閉じてしまった。

数多く採集された地名を見ると、どの河、どの沢にも、くらしとの結びつきがあり、親しみをもって、名のりかけて来るようである。

「のめし」というめしは、すえ飯より悪い」という語が採集された。のめしとは怠け者のことである。私が利根で最初に聞いた方言は、こののめしであった。ただし、この時のめしは、生徒の愛用する小型の自習

書だった。今も生徒諸君は使っていると思うが、のめしというかどうか。(上野 勇)

一、伝 説

行人塚

小仁田の鈴木隆氏の先祖は、生きながら埋めてもらい、竹筒で水を送ってやったという。

浪人屋敷



浪人屋敷 (寺間閉塾)

(近藤義雄撮影)



上杉憲政の馬つなぎ石 (高日向陽石)

(近藤義雄撮影)

寺間開墾に浪人屋敷というところがある。もと落人か何か住みついたものであろう。大塚山へ金を埋めた話もあり、そんな話と何か関係があるのではないかと。 (寺間)

ウマカクレ杉

杉の太木で、切りかぶに、「ネコ」(ワラムシロの厚いもので、二帖敷)を敷いても、キツが落ちないという大きなもの、その上で、バクチをしたという。

ウマカクレ杉の背板を、メンバ板として現在でも使用している。(谷川)

馬つなぎ石

上杉憲政が、北条氏に攻められ越後に落ちのびるさい、馬をつないだ石だという。別に「タテ石」とも呼ばれている。(高日向)

蛇洞

安部彦太郎という者、土合の洞でつりをしていた。土合には五、六間ずつ離れたところに洞が三つある。その一番大きい洞でつっていると、洞の中はどから、くもの形をしたものが走りよつてくる。見ていると自分の足半ぞうりに糸をからませてひきあげた。かくすること三度。そして足半を洞の中にひきこんでしまった。ふとどきな奴めと、野刀を口にくわえて洞にとびこんだが何も見えない。出て来て一休みして考えてみるに、洞中のあの腐れ木が怪しいとてふたたび野刀を口にくわえてとびこみ、腐れ木に向つて野刀のつば元までつき通した。水中俄かにあわだつて、まっ赤になった。この洞の主である大蛇だったという。大蛇は血が湯後近くの東黒沢に入つて死んだ。それから十日ぐらひは、大蛇の血が湯陰曾川を流れた。その大蛇の死んだところを、いま蛇洞という。(湯陰曾、阿部義孝氏)

赤沢で大きな蛇にあった。馬がフウといつて止まつてしまったのでみると蛇が大きな口をあけて火焰を吹いていた。その火焰で毒氣を抜かれるのである。(大穴)

ヨエモン洞

四国からきたヨエモンという人が、当地の後家はあさんと懇ろになり入籍した。行者らしい人であった。ある時村で不都合をしかして若い衆にスマキにされて洞に投げ込まれた。そこをヨエモン洞という。(大穴)

経塚

綱子には経塚が二つある。一つは路傍にあり、これはもう一つの経塚より移したものだといふ。ところでもう一つは阿部吉代美宅前にあり「永和二年」銘の宝篋院塔が建てられており、また板碑も傍らにある。これについて昔から護良親王の霊を慰めるために若宮八幡を祭つた時のものだといふ。またこの塚を掘つた者は湯陰曾に出て、死んだ。(綱子)

片野元貞

天保元年月夜野に生れ、後湯原に來た医者。死にたければ元良さんにかかれとまで言われた。その奥方は沼田藩家老の奥方であつたが故あつて家老が切腹してしまつたので、元良方へ嫁したといふ。その縁でか現在でも沼田城主土岐氏の文書や拝領の腰弁当などがある。(湯原)

林氏の先祖

平出二十八戸あるうち林氏が二十五戸ある。林氏の先祖は稲葉佐渡守林七郎右衛門正通は美濃國の城主で、幕府の材木奉行をしていた。材木の伐り出しに失敗して千葉景佐倉に移封され、元禄十四年に亡くなり、あとの一族が平出に住みつたといふ。鎮守の赤城神社は先祖が建てたものといふ。紋章は九枚笹を使うが、稲葉守の紋は中が白いのが正しいのだが、墓石などはよく間違えて中を黒くしてしまうといふ。(平出)

無鐘塔

源頼朝が富士の巻狩りをした時に大声から人足で出たムトウ坊という者がいた。彼の留守中に妻が間男をつくり、彼が帰つてくると困るので途中で待ち伏せて殺してしまつた。そこでたたりがあるので、村人が無鐘塔を建てて霊を鎮めたといふ。今は祭らない。(平出)

ヤチ田

湿地で深い田をいう。(平出)

遊宝田

天明山妙光院の法印遊宝の名を取って田の名にした。(平出)

内山という苗字

上杉憲政が逃げてきて、粟沢でほうそうになつた。内山さんの先祖が介抱してやった。そのお礼として、内山という苗字をもらった。さらに、藩刀を許され、請役御免、二人扶持をもらつて、遊び暮らしていた。そのため、年中火事になり、憲政からもらつたものは皆火事で焼いてしまつた。(大穴)

伝説破片

○綱子には生きた人をそのままいけたと伝える藪がある。
○アクトという所には八束脛の足あとがあった。(綱子)

千代の松

昔は名もなかったが、湯治に来た大泉トクセツという小説家がつけたもので、あんな大きないい松に名もないからつけてやるといふので千代の松となつた。

話によると上の原の十二さまの松と一緒に植えられたものといふが、十二さまの松は切られて株しか残っていない。(湯ノ小屋)



千代の松 (湯ノ小屋)
(版本英一撮影)

ヤツカハギ

ふだんは尾瀬に住むが、山口から三キロぐらゐの所にあるオオユウを中宿にして、各地へ出ては悪いことをして困る。ヤツカハギは藪のつるを伝つてオオユウの奥の方へ入りこんでいることを知つた村人が、奥に入りこんだところを藪つるを切つてしまつたら、さすかのヤツカハギも再び外へ出ることもできず餓死したといふ。(湯ノ小屋)

オオユウ

ヤツカハギに住んだといふオオユウ(大きな洞穴)は、昔はりょう師の宿にも使われたらしく、入口はせまいが、中は広く、冬の水柱は美しい。途中でガスが出るらしく、奥へは入れないときがあったが、この穴にわたりを追ひこんだら越後に抜け出たといふ。(湯ノ小屋)

二、昔話

昔ばなし

昔ばなしのことをムカシといひ、昔ばなしを話すことをカタルといふ。冒頭の文句は、ムカシムカシアッタト、で結末の文句は、イッチガサケカッタトサ、であるが、こうしたことばも、かすかに老人の記憶につながるもので、もう昔ばなしは聞かれない。(川上)

三、怪異

天狗

赤谷に庚申講に行った桶り若い衆は仏岩の辺で天狗に驚かされた。それは強い風が吹いて、大きな石が音をたてて落ちて来たかと思つたと大木が倒れる音がしたりして生きた気がしないので桶つたが、翌日行つて見たが少しも変わつておらなかつた。同じに行つた信仰のあつゝ加藤太郎氏には何にも聞えなかつたといわれていた。(江戸時代)

大正九年の春ある夕方仏岩に一本松のあるところで阿部常衛さんが炭がまの仕事をしておったところ下の方で高一郎さんが「オーイ、オーイ」と呼ぶので何ごとか起ったと思つて返事をしたが、いつもとちがつて少しも山にひびかない。そこで考えなおしてみると、高一郎さんは早く帰つたことに気づくやいなや、大きな石がとんだ音が聞こえた。恐しくなつて逃げ帰り、翌日音のあったところに行つて見たが少しも変わつていなかった。天狗に驚かされたのだからということだつた。

小野原一郎さんが土沢で一人で歩いていたら誰れかが笑つているようだが気がもかけずにそのまま歩きつづけると又大きな笑い声が聞こえてきたので、何を笑うのかと笑い返してやったら前にも増して大きい笑聲に驚いて気味が悪く逃げ帰つた。後に村人に聞いたがその日に山に行つた者がいないことから天狗が笑つたんだらうということになった。

ある猟師がぼぎんという鉄砲のような音がしたが気がぬけているような音なので気合を入れる意味で一発打つてみせた。するとそれにもまして大きい音がした。これは天狗の仕わざだということだつた。

ぶなの木などでぼぎんという大きな音がすることを十二様か鉄砲を打つという。猟師はこの音が多い日は獲物が多く、少ない日には獲物が少くないといつた。

大正時代に谷川の広田仙次郎さんが子持神社でおこもりをしていたら、一本歯の下駄をはいた天狗様が見れたといふことだつた。

明治初年の三国戦争（官軍と会津藩との戦い）の人足にかり出された時、首のひつぎをかつがされたり、さらし首を見た話を炭がまの前で仲間と話していたら、天狗がきらつて山の上から恐しい音をたてて驚かされた。

一人で木を伐りに山に入ると、耳の近くでボーボーという音がする。天狗のしわざらしい。

猪とりに三人で行つて、女の噂などのヨタをしていたら、二十三夜様が二度あがつた。十二様は女の噂などは嫌いらしい。

十二様にさからうことはしてはならない。

天狗は昔はいたが、今は逃げてしまった。

天狗は唯たまがせるだけ。（以上阿能川）

天狗に家をゆすられた。（湯原）

夜中に何も無いのに風が吹くことがあるが天狗が飛ぶのだから。（小日向）

明治三十九年八月の話。湯原の須藤長松さんが寝ていた。ところが突然消えてしまい、家の人をはじめ近所から村中のさわぎとなり、手分り川、沢、山から橋の下までもさがした。五日間見てまわつたが見つからずついにあきらめた。不思議なことがあるものだと言つた。ところが近所の人々が翌朝早く起き、くずまゆの糸をつむぐための水くみに出て、長松さんの家の屋根を見ると一番高いところに長松さんが立ってあった。早速、近所の人を呼び集めて降そうとしたが、くず屋（かやで）おいてあり急（こうばい）で足場がなく助けられず、はしごをつなぎやつのことで降すことができた。全然のぼつたあとがなく、又のぼらうとしても不可能だつた。

その後本人に聞いてみると茶の間に寝ており、起き出して家と倉の間までは覚えていたが、その後の記憶は全然ないといつており、夏の暑い日に五日間も飲まず食わずにいることは考えられない。よく聞いたはずと食べたおぼえはないが、おもゆのようなものを飲まされ谷をとべとべといわれたようだつたと言つておゆ、体には見たことのない毛が何本もついてた。そこで人々は、長松さんは天狗にさらわれたんだらうといふことになった。

その後一ヶ月ぐらいて死んでしまつたが、死んだその晩は非常に大きな雷鳴があり、村人は天狗の仕業だと恐れたといふ。（湯原）

寺間の天狗様

小日向に字天狗下という地名がある。むかしそこが火事になつたとき、二つ火の玉になつて寺間に飛んできた。そこに天狗様をまつた。旧の

二月初卯の日に天狗祭りする。このときは御神酒を二升あげ、それを順番できめた宿により酒宴を開いた。この祭りは宵祭りのため、一日二晩続けられ、近郷からも人が集まり、男は花札、女はホボキ（五本の繩のくじ）などした。このような博奕はずっと以前の話である。（寺間）

天狗のカラキオリ

實際は木は倒れていないのであるが、木が折れてバリバリドスンと木を倒したと同様の音がある。これを天狗のカラキオリという。この音を馬が聞き、驚いて手綱を切つて逃げたことがある。（綱子）

天狗まつり

旧二月初卯の日はまつりで、宿はまわり番だが、これは街道順。一日二晩飲み食ひした。酒や菓子に元値で分けてもらひ、たらふく飲み食ひした。すみ酒は二升あげた。もとはばく徒が大勢集まつた。花札、めくり、ホボキなどやつた。

寺間の天狗さまは、小日向の南にある天狗さまが火事で焼け、火玉になつて、大天狗と小天狗がきたものという。（寺間）

山の怪

話者が若いころ、お三夜様の晩、用事があつて湯原に出た。夜遅くなつてそこを出て、阿能川に出たが、どうもハリーが悪い（さびしい）。もとの役場の辺まで来ると、急に明るくなつてお三夜様の月が出た。自分の影が利根川に映る。まだそんな時刻ではないのにどうも変だ、とて土橋の上でたばこを出して一ふくすつて出てみると、やはりあたりは明るくて、お三夜様の影が利根川に映る。虚空蔵さままで休んでいるうちはよいが、出てみるとやはり同様で薄気味が悪い。大穴まで来たところではんと月の出となつて、大穴の人が拜んでいた。

奥利根館のあたりは悪いところだつた。話者が若いころ、利さんのところに貸しがあったので、勘定をもらひに行つた。おかみさんがいて、だんなは「沼田から来るわけだ」からというので待たされた。しかしつまでたつても帰らない。請求すると「一銭もねえ」とてどうしても戻

れないのを、それでもとうとう一五〇円ださせて、外へ出てみると小雨が降つている。傘をかりて、今の奥利根館の辺まで来ると、急に後から「ふあつ」と明るくなつた。後をふりかえると、まっくらでも見ええない。また前に進むと急に明るくなつて、ばらすの一つ一つが見えるくらい明るい。そんなこんなで、大穴の明りが見えるところまで来ると、急に暗くなつて、何も見えなくなつてしまつた。

サルマタの山で炭をやいて、その炭を運び出した。コシミノをつけて、コダレを杖にして、炭二俵を背負つて出て来た。すると後からサラサラという音がする。ふりかえつてみたが何も無い。急にさみしくなつた。歩きだすと、またその音がする。ドンノクボ（盆の窪）の毛がさかだつほどさむしい。いつもふりかえると何も無い。綱子の体ミドに来て休んでいると何も無い。おかしから何かあるに違ひねえと、家に着いて聞いてみると、藤原の横山の人か死んだというオト（沙汰）があつた。

本家のオフデさんが死んだ時、馬の草刈りに行つた。くるみの木がワリワリと大きな音をたてて草の上に倒れた。フサフサと枝がゆれているのだから通れまいと思つたが、行つてみると何でもなく、草も乱れてもいなかつた。（幸知）

話者が三十才ころのことだつた。当時オキセンザワの官林に山桑を植えて大木があつた。その下刈りに行つた。その時すく頭の上で、えらい音がして大木があつた。そのうちにがらがらと音がしてころがり落ちてくる。その音がまるで舞先までくる。実際には何も起らなかつたのであるがその音があまりにすさまじいので、いらねなくなつてにげ帰つたことがある。官林で盗伐などしていると、よくこういふことがあつた。天狗のしわざという。（湯樽曾）

テゴヤ

ボンデン岩といわれる近くに飯場をつくり木を伐り出したとき、大ぜいだから五升だきの釜で飯を煮た。あるとき、ちょうど飯が煮えたと

とき、天井から毛むくじやらな大きな手が出てきたと思うとたんに釜をひとにぎりしてしまった。ところが煮えたばかりのもので熱かったらしくて手をぶるぶる振ったので、めしが黄色くなって散ったという。それからその辺をテゴヤという。湯ノ小屋から奥へ六キロメートルくらい入ったところのこと。(湯ノ小屋)

オオクラゼン

ここへ魚つりに行ったある人が、「今日はバカに釣れる。こんなはずはない」と思いながら、もういっぱいだろうとビタの中を見たとき、ビタの中は木の葉だけ、こんなバカバカしい話はないと思ったとき、向うの方で動物だか人間だか奇妙な声がしたというが、こわかったという。(湯ノ小屋)

ノツチ

人が歩くと音だけがトチトチ、トチトチと後をついて来る。こちらが止ると音も止る。わるさはせず、音がするだけで形は見えないものをノツチという。(須田貝)

ひかり玉

カッチキのヤマノクチを持って、キタッピラからヤクラノハゲというところふたつ玉がとんだ。夜明け前のことで村中のみんなで見えた。

秋のもみこなをすませて、ネコの下に敷いてあった草ガタを片づけていたところ、夕方だったが急に明るくなったのでふと上を見ると、大沢の方からやってきたものらしいふたつ玉が、土蔵の上の高いところをとんでいて、これで明るくなったものだった。山の方へとんで行ってそこで線香花火のようにパチパチして消えた。(須田貝)

ループトンネルのある山で、いっしょに登っていた六人全員が、一尺程の火の玉をみた。それをみて、幸知に何かあると直感した。その日、トンネルの事故で人が死んだ。(大穴)

ソンニヤの話

ホドの沢の岩の上に、渦巻き形のひとえもんを着た綺麗な娘がいた。

「ソンニヤ、どこから来た。」というとホドノ沢の奥を指さす。みると、娘の口は耳までさけ、体は大きくなり、筭が沢の両側にひっかかったという。

オキタさんという度胸のよい人がいた。夜道を歩いてくると何か異様な物音がする。若い衆がいたずらでもしようとするのかも知れないというので、薬師様の所まで調べに行つた。みると、犬が茶碗をなめていたという。昔の夜道は、夜霧で木の枝がさがって頭をなでられたりしてこわかった。道も今のようではなく二人並んでは通れないような細い道であった。(谷川)

狐にばかされた話

十二月二十七日の大雪の晩に、つねさんが沼田に塩びきを買に行つたまま帰らないので、村中で探した。杉やぶの中で水の湧いている井戸窟の雪のない所に坐りこんでいた。大声で名前を呼んでも返事もしないので、はっとばしたら気がついた。(小日向)

ある時越後の清水村の方から峠をこしてこちらに二人の若者がやって来た。途中一老人に出会つたので、湯楡曾への道を尋ねたところ老人は、「もうすぐだ。」と答え、自分はこれから越後に行くのだが、腹がへって歩けない、という。二人は弁当をみんな与えてしまった。二人は老人に別れてしばらくゆくと家が見える。湯楡曾だろうと思つて立寄つて聞く、「とんでこない、ここは越後だ。それにしてもここまでくるのにそんなに時間のかかるわけがない。きつねつきだらう。」とて、近所の鉄砲子ちを呼んだ。二人は今までのことをすぐに話して、その晩は泊めてもらったという。(湯楡曾)

粟沢の人が夜自動車で藤原に向つた。途中えらいベッピンさんが車をとめて乗つた。藤原までということだったが、途中ふりかえつてみると、その者はいなくなつていた。多分狐だったらうという。(幸知)

湯原から谷川に行く途中に大きなヤブがあった。ある人がそのヤブで狐にばかされた。谷川に出ようとするのだがいつの間にか湯原にもどつ

てしまう。なんとしても道がわからずに朝方になってふらふら谷川に落
いた。(谷川)

むじなにばかされた話

阿部喜美次さんの先祖が、馬をひいて宝川に行く途中、大鹿橋のあた
りで、いい女が道に横になっていた。事情を聞くと「腹がいたい」とい
う。かわいそうに思って馬にのせた。しかし考えてみるとどうもおかし
い。家にひき返す途中で、繩でぎりぎりにしばってつれて来た。ばあさ
んを呼んで下ろそうとしたが、にげられてしまった。むじなだったとい
う。(幸知)

イタチにばかされた話

明治初年郵便配達の万平さん(この人は他所からきて湯槽曾に落着い
た人)がイタチに化かされた。道を歩いているときれいな女に会った。
石を投げたがどちらに行っても家に帰れない。やっと夜中になって家に
たどりついたら、身体中傷だらけになっていた。(綱子)

上越線が開通した頃、いたちが大入道に化けて三回程線路に出た。最
後に汽車にひき殺されて、それ以後は出ない。黒いたちだったという。

(小日向)

ばけネコ(ネコばばあ)

藤原の西にいそじという名主がいた。その人の屋敷は現在水没してし
まっていた。その先祖のはなしで、いつのころか、なんとという名前なの
かわからない。

あるとき、その家の嫁さんが姑がなかなかおきてこないで、朝め
しの仕度ができたらおきてくださいといったところ、姑が、しぞくね
えをしましてどうにもおきられないといった。嫁はしぞくねえとい
うのは寝小便でもしたのかとおもったので、しぞくねえをしてもいいか
ら早くおきてくださいという、そんなことではなくて、とんでもねえ
しぞくねえをしましておきられねえといながら、それれといいて、
嫁さんの前に赤ん坊の手をほりだした。(ばあさんは孫と一緒に寝てい

た)嫁さんはまさかそんなことをしたとは思わなかったたので、腰をぬか
して倒れてしまった。その瞬間にはあさんは爪をといで、雨戸をつきや
ぶって宝川の奥へひっこんだという。その後何年かたつて、その部落で
葬式などがあつた場合には、いつでも出棺前はいい天気でありながら、
出棺の時刻がせまってくる、宝川の奥から雲が出てきて、墓場へ行く
途中で死びとが必ずとられてしまう。あちらのうちでも、こちらのうち
でも、葬式のときに死びとを必ず出棺の途中にとられてしまう。あると
き、これではとてもかなわないというので、坊さんが棺の上のつてお
経を唱えながらいったが、坊さんをほりりだして死びとをとられてし
まったという。山口のある家の葬式のときにも、いいお天気の日に葬式
を出す日どりになっていたが、たまたま出棺の時刻になったら、庭先の
桑の木の枝のところにきらきら光る火の玉をみつけた。そのうちに出棺
もせまり、やがて墓場にむかって行ったところが、途中で一天にわかにか
きくもり、死びとをとられてしまったという。

その後、西組の中村家の先祖にかめどんという人(もと万才であった
という)があつた。この人は、何回も山仕事へ行っていた。あるとき、
山でおにばあが鹿を生でしゃぶっているのをみた。おにばあに、村
へ帰つてこのことをしゃべると生かしてはおかないといわれた。けっし
てそういうことはないませんといいて帰つて来た。ところが村へ帰つて
来てすぐこのことを村の人にきいてしまった。そのあと、かめどんは宝
川の奥へ行つた。山へのぼるとき十二機をまつつていったといふとこ
ろが何日たつてもかめどんは帰つてこなかった。村の人は心配で山へ
行ったところが、かめどんの着物が木にかかっていた。そこで、村の人
は、かめどんはばけネコにくわれたのであろうといつたという。現在西
組の中村家には、かめどんの遺品という巻物と木の箱のこつてい
る。その後、宝川の山へ行つて、万才とネコのはなしをしてはいけないと
いう。また、宝川の方へ水あびに行つて、ネコのはなしをすると、雨が
降るといわれている。(西)

オワンのふたの蓋

寺の住職が法事の掃りにねむくなり、腰をかけて休み眠ってしまった。そしたらよく来てくれたと接待され、そのときのオワンの蓋がとて立派なもので、欲しくなった。そしてフタをかくして持ってきた。眼がさめてみると衣の裾にその蓋が入っていた。然し位置は前に休んだところと同じ所であったという。(鯛子)

カッパのはなし

もとの横山で、利根川と武尊川の合流点から二百メートルほど川上へのぼったところに馬洗い淵というところがある。そこは、馬をひいて行って日中馬を水の中に入れておいて夕方つれてかえっていたところである。横山(現在は大滝沢に移転)の林某さんのところである日馬洗い淵へ馬をひいていった。馬の舟(木をくりぬいて馬に水をくれたりえさをくれたりするもの)の中でビチャビチャという音がしたのでみるとカッパであった。林さんはカッパを殺さず川の中にはなしてやった。するとそれから毎晩たらいの中に入っていた。カッパがもってきたものだった。ところが、ある日林さんのところで洗濯した着物をとりこむのを忘れて庭に干したままになっていた。その中に子どものかすりの着物があった。カッパはかすりが大きいらだった。その晩からカッパはこなくなってしまったという。

川へ行くときには、かすりの着物を着ていけばカッパにケツをぬかれないといわれている。

カッパと相撲をとったという人もあった。カッパは子どもくらゐの大きさで、一方の手をちじめると、片方の手がどこまでものびるといふ。

(平出)

クモのはなし

ある人が、利根川のひのきよどというところで魚つりをしていた。夕方のことだったが大きなクモが川の中に浮いていた。そのうちにクモがおかへあがつてきて、その人のはいいた足なかとぞうりのはなほオタモ

エズをかけては、川の中へ何回も往復していた。その人ははいいたぞうりをぬいでそっとしておき、わきで見えたところ、川の中で木やりをうたつてぞうりをひきこんだ。えらい力があるとみていたら、川の中で大声で笑った声があったという。(平出)

アズキ洗い

山の沢を夕方通つたりすると、ザクザク、ザクザクと小豆を洗うような音が聞えた。これを「アズキ洗い」といった(川上)

大きなヘビか

原の鶴松さんという人は、桑つけに行つたところが、カヤを押しつぶしていい道ができていたので、こりやあいい道があつて良かったといつたところ、親から「毒気でも吹きこまれたらどうするの」と叱られた。

(湯ノ小屋)

ヘビゴシキ

ヘビがくみあわさり、からみあつてのを見たら、女のふんどしをかぶせると、そのヘビがみんな金になつてしまふという。これをヘビゴシキというが、ゴシキということばは、わらで編んで座ぶとんの代りにしたようなものごとをいう。(湯ノ小屋)

ヘビのいびき

ある人が山へキノコとりに行つたところ、向うの方からすごいいびきのような音がする、かみなりさまのような音で変だといふのでだんだん音のする方へ近づいてみたら、木のうろ(空罎)の中から聞えてきた。これはヘビだといふので逃げたという。(湯ノ小屋)

ビゴ貝戸の初五郎さんは、春先きに薪切りしていて寝入ってしまった、ふと目を覚ますと蛇が鎌首をもたげていた。背中に天保銭ほどのその時蛇にかまれた傷あとが残っていた。寝入つたのは蛇におなされたのだらう。

諏訪神社の境内のいつも水をたたえていた所には蛇のぬしがいた。竹におさこを入れて諏訪神社に願かけをすると蛇に出くわさない。

大きい蛇はいびきをかく。(湯原)

雷獸

六十年前程前、鏡子橋に落雷した時、雷と一語に雷獸が落ちた。猫に似ているが、爪が長く、目が鋭い。(小日向)

四、命 名

(一) 人 名

二つの名前

幸知の区長さんの名を福万といい、藤原の生れである。明治四十年二月一日、生れた時ちょうど役場に出向く人が近所にあつたので、その人に出生届けを頼んだ。ところがその人は家でつけた譲(ゆずる)という名を忘れてしまったので、縁起のよい名にしてくれと、役場の職員にいい福万と届けて来た。ゆづってその報告をしなかつたので、種痘の時に来た通知をみてびっくりしたという。以来通称はユズルさんであり、公称はフクマン氏である。どちらにもこだわりはないという。(幸知)

山口長次郎家では、代々の長男に長のつく名前をつける。

長次郎—長太郎—長雄—長寿(鹿野沢)

呼称

1 阿部貞牧さんをアーボー、小さい時赤いすべすべした顔をしていたので、「ボー」は可愛いという意。

2 桑原重栄さんをヤロー、ヤローとは男の子ということ、姉が二人あつて次に生れたので、ヤロー、ヤローとあやしたのが通称となつた。

3 真庭繁雄さんをシゲボー、可愛いくてボー、ボーといったのがそのまま通称となる。

4 戸籍名 阿部さきゑ 呼び名:ふみ

本家の大伯父が名付けてくれたが、小さいとき弱かつたので、名前で

もよすぎるからだろうかといって、「ふみ」と呼ぶことにしようということになつた。生家では「ふみ」というが他は「さきゑ」で通っている。

5 戸籍名 阿部さん 呼び名:つま

初め「さん」と名付けたが「さん」では呼びにくいというわけで「つま」と呼ぶようになった。

6 戸籍名 阿部あんぐり 呼び名:あき

女子ばかり生れ「あんぐり」さんは四女、父親が男子を一人ほしいと望み「あぐり」という名をつけると男子が生まれるというのでつけたのが、役場の戸籍吏が間違つて「ん」を一字入れてしまったといわれる。その後呼びにくいというわけで「あき」と改めた。現在は「あき」で通っている。この人の場合男子は生れず、七人姉妹の女子揃いであつた。(綱子)

オジツボウ 頭の働きが悪く、よく家で働いている人。小日向にはカネダラ なかった。(小日向)

コンジン様 変わった人、ヘソの曲がつた人のことをいう

(二) 地 名

川上の地名

腰巻(コシマキ)

浦和(ウラワ)

東原(ヒガシハラ)

川上田(カワカミダ)

前原(メーロッパラ)

山根(ヤマネ)

早沢(ハイザワ)

峠(トウゲ)

栗生堂(クリエノカヤ)

母谷(ムヤ)

次の地名は、土地台帳にはないが、土地の人の使っているものである。

ホツダ 川上田の一部、細長い田がある。
ナカタツボ 川上田の一部、中田の意味。

タワガイト 前原の一部。

テンジン 早沢、峠の一部、もと天神さまが祭られていた。

カコイカゲ 浦和の一部、風除けの囲いの木が生えていた。

トノダ 浦和の一部、もと良い米がこの田からとれたので殿様にあげた。

ドーロタジンバ 山根の一部、ドンドン焼きをそこでする。

阿能川の地名

六部沢 (ロクゾーザワ)

かっぱり沢 (カッピザー)

十二 (ジュニ)

馬沢 (ウマザワ)

細越 (ホソゲ)

山地入山 (ヤマジイリヤマ)

山地黒川辺 (ヤマジクロカワバタ)

霧ヶ久保 (キリガクボ)

笹木比良 (ササキビラ)

神ノ宮 (ジンノミヤ)

久保田 (クボタ)

向比良 (ムカイビラ)

目ノ久保 (メノクボ)

沢ノ比良 (サワノヒラ)

一ノ向平 (イチノムカイダイラ)

二ノ向平 (ニノムカイダイラ)

三ノ向平 (サンノムカイダイラ)

奈朗 (ナロー)

土字沢 (ツチユーザワ)

登道 (ノボリミチ)

日影比良 (ヒカゲビラ)

坂下 (サカシタ)

一ノ原地 (イチノハラジ)

二ノ原地 (ニノハラジ)

よしの沢 (ヨシノサワ)

葛木比良 (ツタノキビラ)

この中で、次の地名は

山地入山 (イイリヤマ)

山地黒川辺 (クロカワバタ)

一ノ向平

二ノ向平

三ノ向平

一ノ原地

二ノ原地

一ハラ

と簡単に呼ばれている。

次の地名は土地台帳には記載されていないものである。

ビリガカイ 意味不明

シミツツアカ 坂の途中に清水のわき出す所がある。清水坂。

メーダ 前の田。前田。

スナゴ 川原のそばの田のある所、砂地で作物がよく出来ない所。

ハンギョー 火のみやぐらがあり、みこしのお飯屋が作られる付近。

イヤカジ 畑になつている、意味不明。

ドービラ 草平、平に草がある。

サカアタマ 坂を登りつめた所。

ナガサカ 長い坂の所。

ヨツヤ 昔四軒の家があつた所。

小仁田の地名

箇中(ツツジユウ)幸佐原(コウサバラ)日影(ヒカゲ)乾田(イネダ)栗生沢(タリユウザワ)入山(イリヤマ)栗生沢入(タリユウザワイリ)炭窯(スミガマ)沼台(ヌマント)松生(マツウ)西平(ニシヒラ)牛首(ウシタビ)

以上は土地台帳に記載されている地名であるが、このほか、土地の人が日常使っているものには、次の地名がある。

フナクボ 西平のうち、山林。

サンナシ 入山のうち、畑と採草地。

ウバगतコ 入山のうちでサンナシの奥、日だまりになっている。山林。

キツネオ 西平のうち、採草地、山林。

マギリゼン 西平のうち、入山と松生の境辺で、小滝がある。センは滝のこと。

タネクボ 入山のうち、山林。

マガツワ 栗生沢の支流で国有地。

センノサワ 栗生沢入のうちで、栗生沢の上流、山林、国有地。

コバノヒラ 炭窯とセンノサワの合流地辺、国有地。

モテブナ マガツワの下流地域、山林。

キタザワ タネクボの奥。

イカダバ 乾田のうち、川上境、利根川岸。

オオツカ 乾田のうち、利根川寄り。

モノミヅカ 乾田のうち、畑。

シモガワラ 乾田のうち、利根川寄り、畑。

カミガワラ 栗生川の不動橋上流、もとは畑だったが、現在は山林。

ナベゼン 栗生川のうち、入山と西平の境。

ワダリ 日影のうち、利根川岸、チョウシの下流、田、原野、竹林、山林等。

チョウシ 日影のうち、乾田にもかかる。利根川岸。

テラマゼン 箇中と石倉の境、キタミの滝の所。

サ、ガリ 日影のうち、畑。

シモテラ 日影のうち、畑。

カミテラ 日影のうち、畑。

タケノハナ 日影のうち、竹林、ゴミ捨て場。

ホリムコウ 日影のうち、幸佐原寄り、田、山林。

メエタツボ 日影のうち、田。

イチケード 栗生沢と川上境。

ミヤノマエ 大峰神社の前の田ぼの所。

ニシゲート 日影のうち、畑、屋敷二軒。

小日向の地名

吹出、大平、天神越、天神前、中之島、久保内、清水、堂木、水口、

天狗下、天狗わき、東原、一の沢、二の沢、三の沢、五輪山、西田、北

田、原、山口



諏訪峠の弁天岩 (中村和三部撮影)

大穴の小学

大見堂・大作・下原・阿谷川・北原・森前・高平・下河原（大穴）

大穴という地名の由来

大穴という地名の由来は、昔、年寄に聞いたのだが、盆地で大きな穴のようであったからだという。吹きおろす風をよけるために、上松原と下松原があった。（大穴）

地名（小日向地内にある地名）

ウマブチ 馬を洗ったところ
カマブチ 釜の形をしたところ
オツカナブチ

イドクボ

コゴメダイラ

ササダイラ

ショウジバ・ショウジンバ 山口やその他にも所々にこの地名が残っている。水没した所もある。（西）

ショウゾクバ カヤの沢の水の流れる所にあつて、ここで口をゆすぎ、身体を清めて武尊神社にお参りした。（西）

かまぶち 釜のかっこうをした洞

うまぶち 馬洗いの場

おっかなぶち 山の陰の深い洞。魚とりに行くときつねやたぬきにたまがされた。（小日向）

栗生沢 新田義貞の部下の栗生左衛門が敗戦の後、隠れ住んだので栗生沢という。

小仁田も小新田であり、そこに物見塚をたてた。その時銭もどこかに隠したらしい。（小日向）

ビゴガイト 備後の国から来た人が住みついたので、ビゴガイトと言うのだらう。（湯原）

セニンツツメ エボシ岩の下で絶えず水の出ている所で、仙人住まい



鳥帽子岩（高日向宇鳥帽子、利根川岸）

（木村柏好写真）

のことであらう。（阿能川）
リュウケン堀 ホドノ沢と本谷と二つ話がある。

大きな竜が天に登るとき尾で掘ったあとがある。そこにたまった水で目を洗ったり、傷を洗ったりすると直った。大正九年の大水でひっくりかえって流れってしまった。（谷川）

タツチユウ場 馬の死体を捨てたところで野天にそのまま置いたので水あびに行くと非常に臭かった。母谷から狼が出て来て馬を食べたともいわれている。

又山犬も来た。（湯原）

水上七湯 谷川、湯原、湯檢貫、宝川、湯ノ子屋、湯の花（八木沢ダム湖底）小日向（谷川）

土質の呼称

赤ノツボウ 土が軽く作物がよく出来ない。

黒ノツボウ

マツチ

土地の呼称 作物のよく出来る土質（小日向）

ガンダラ

ハゲツトウ 岩山のこと

ホラアナ 草木の生えていないところ

ジャヌケ

ゴオヤ 山崩れのあったところ

ヤツクラ 小石の多い畑

畑の中の石を集めたところ

テツピン 山の頂上又は峰(小日向)

湿地帯をヤチという。(大穴)

山の斜面をヒラという。西のヒラ、上のヒラという所がある。(谷川)

山の尾根をソリという。(大穴)

五、方 言

悪口

デブデブデブ百貫

電車にひかれてべっしゅんこ

お風呂に入れたらペコペコ

はかりにかけたなら一貫目(川上)

ばかばかチンドン屋

お前の母さんデベツ

一銭五厘のくつはいて

便所の掃除つらんべ(川上)

ばかばかチンドン屋

お前の母さんデベツ

家中そろって大デベツ

お前もやっぱしデベツ(高日向)

うそと坊主の頭は結ったことはない

裸でハシヨオリ(尻端折)したことはないという、相手の子どもは、

あたりまえだ、しろったってできないやとやりかえす。(川上)

大穴せかせか(大穴のめしともいう)

湯松曾ぬすつと

幸知つづれ

綱子はくち

栗沢理屈(川上)

山言葉

オヤジ、猿のこと、ケモノが早いのでサルとはいわない。猿は昔は五、六十のマキがあったが今では十か十五になっている。ヤゴイ、打つと血がやけて塊まることをいう。(栗沢)

鳴声

ヨガ(蚊) 秋までいるがブーン。イツマデモゴムシーンとなくともいう。アシナガはブーンとなく。

アブ、お盆までいる。そしてボンマデ、ボンマデとなく。馬、ニーン或はヒーンとなくが、馬によって異なる。よい馬ほど鳴声が良い。馬の鳴声で家の盛衰が判るといふ程に縁起をかついだ。声の悪いのを飼うと暮しが傾く。従って鳴声をよく聞いて買う。

なお、毛巻(毛の中の巻目)のあるのは概してよくない。他がどんなによくとも買わなかった。ソウモンの毛巻きのある馬を買うと、長男が

育たないという。(綱子)

風

コチ風、春の風をコチ風というが、やさしく吹く風で、タツミの風である。

夏風、南風やタツミの風が中心、

ナラザワオロシ、冬の風でナラザワ山の方から吹いて来る寒い風、雪をもってくる。十月ころから吹き出す。(大沢)

挨拶の詞

晴れた日の日中の挨拶ーイヤンバイデス

朝の挨拶ーオハヨーガンス

夜の挨拶ーオバンデガンス、オバンナリマシタ

子供が用事で他家を訪れた時の挨拶ーコンチャ

老人が他家を訪れた時の挨拶ーハイコンチャ(川上)

朝 オハヨウガンス

晩 オバンデガンス

昼 今日、天気で良かった……

雨降りて…… (大穴)

オハヨウ。

イイアンベデガンス。

オバンデガンス。(谷川)

農薬でみられなくなった虫

トンボ オハグロトンボ(シヨウツケトンボ) ソバマキトンボ(アカ

トンボ) イナゴ ホタル ジゼミ(アブラゼミ)

方言

アリゴ 蟻。アリゴの観音めえり。(川西地方)

アテコトモネー 沢山。たくさん。(川西地方)

アルガンニ あるから(湯檢曾)

アサゲ、アサツバラ 朝。朝のうち(川西地方)

アヤナゴ、アヤンゴ なんこ(小仁田) 谷川、阿能川ではアヤ。

イイッペ いいだらう(川西地方)

イブセー 危険(川西地方)

インネ いいえ、いいやなど否定のことは(川西地方)

イノ 犬(湯檢曾)

イヤンバイデス 晴れた日の日中の挨拶のことは(川上)

イルリ いろり(川西地方)

イッサン いちこ、いっぺん。イッサンにくる(谷川)

ウシノオツタベ 正座を横にくずした坐り方で、牛の坐り方に似てい

る(小仁田)

ウシネンボー、ボー 牛(寺間)

エンバナ 上りがまち、縁先(小仁田)

エエカンペー いい加減、おおよそ(川西地方)

オイベスサマ 恵比須様。オイベス講。エベスづら(川西地方)

オヤゲネー かわいそう(川西地方)

オッカネー 恐ろしい(川西地方)

オセーベーカー 教えようか(川西地方)

オコサマ かいこ、輩(川西地方)

オジ、エジ 弟(湯檢曾)

オンベカツギ 縁起をかつぐ人。ごへいかつぎ(川西地方)

オツケー 大きい。オツケー木だ(川西地方)

オツタベ 正座、行儀正しくする(小仁田)

オスワリ 正座、行儀正しくする(川西地方)

オキノデー 奥の座敷(寺間)

カギダケ 鉤竹、自在鉤。ほとんど竹が使われていないが、やはりカ

ギダケといっている(川西地方)

カンブクロ 紙の袋。猫にカンブクロあとんじやり(谷川)

カフチキ 雪の時に用いる覆物の一つ(川西地方)

カナツクギ 金釘、かなくぎ。年寄とカナツクギは引つ込んだほうが

いい(川西地方)

カラド 身体、からだ。カラドが身上(川西地方)

カンタサマ 巡査、おまわりさん(川西地方)

カンダチ、オカンダチ 夕立、雷雨。馬鹿とカンダチは西からくる(谷

川)

ガンス ……でございます(川西地方)

キョーツバシ 俵の蓋、さんだわら(川西地方)

キューツク 注意する、気をくばる(川西地方)

クネ、キューリヤトマトなどのささえの棒。境のための垣根。キュー

リダネ(川西地方)

クゾス、くすす、くだきこわす、破りつぶす、みだす(川西地方)

クボッコ くぼんだところ、へこみ(寺間)

ダナシ 馬鹿馬鹿しい(湯檢曾)

タルミ 躑、くるぶし。内側にあるのがウチグルミ、外側にあるのがソトグルミ(川西地方)

グルワ まわり。畑のグルワ、家のグルワ(阿能川)

ゲイモネー 無駄なこと(湯谷會)

ゲード 家の庭への入口、往還から家の入口までの所。ケードい出て遊べ(川西地方)

ゲイロ 蛇。ゲイロのつらに小便(谷川・阿能川)

ゲダイ ですね。試験に受かってよかったゲダイ(川西地方)

ゴトハチコク ぐつすり。ゴトハチコク寝る(阿能川)

コシモト 炉辺の主婦の座席、ヨコザに向けて右側の席(寺間、川上、小仁田、阿能川)

ゴンボー ごぼう。ゴンボー細り(川西地方)

コイダシモッコ 馬小屋から堆肥をはこび出す道具、糞製と竹製の二種類ある(川西地方)

コージンバシラ 大黒柱、この柱の裏側に荒神さま、すなわち火の神を祭っている(川西地方)

ジクダミ じめじめしていて、足の甲まで入るほどの所(阿能川)

シコッタマ いっぱい。シコッタマ飯を食う(川西地方)

ジョイヤ きつと、たしかに(川西地方)

ジャンカ あばた、痕癩、ジャンカづらして。好いてまわれればジャンカもえくぼ。ジャンカあたま。髪のとらがり(谷川、阿能川)

ジャンボン 葬式。野辺の送り。親が死んでもジャンボン出すのもいやだ。貰う物はいたち(元日)の朝げのジャンボンでもいい(谷川)

スリコギ、スリコギボー 搥粉木鉢、鉢で物をすりつぶす鉢。さんしょ

うの木がよい。口とスリコギはどっちにでもまわる(寺間)

ズリのこざり(川西地方)

スワリアガル きちんと坐り直す(小仁田)

スエメシ 腐った飯(川西地方)

スエル 食物かくさる、食物がいたむ(川西地方)

スイノー あげ糞、めん類などをすくいあげる糞(寺間)

ズー 繭を作るようになった蚕、熟蚕(川西地方)

スイヒロ 風呂。スイヒロ桶(寺間)

セキ 小川。セキの水(川西地方)

セツチン 便所。親の建ったセツチンで糞をしるような馬鹿じゃねえ。口は親まかせ尻はセツチンまかせ(阿能川)

セッコ 背中。夕立は馬のセッコをわける(川西地方)

セド 裏手。セドの山。セドの道(川西地方)

ソリ 山の麓から峰に続く稜線、山の絶頂にいたるまでの山すその頂。山のソリ(阿能川)

ソラッキカズ 馬の耳に念仏と同じで聞こえても聞こえない振りをする(川西地方)

ソーダイネ そうですね(川西地方)

ソラミミハンヤガシテ 聞こえてもすまして聞こえない振りをして(阿能川)

タンポ 長袖(川西地方)

タートラ であらめ。タートラもほどほどにしろ(川西地方)

タケ 谷川岳。タケの雪(谷川)

タテゴ 槽、(くつわ)(寺間)

テッコハッコ 蟻地獄、ありじこく。テッコハッコ豆一升くれるから

出ろ出ろ(阿能川)テッコハッコ虫くれる虫くれる(谷川)

デンシンダイ 電柱(川西地方)

デンダルマ 肩車(小仁田、寺間)

デンキノタマ 電球(川西地方)

デンデンムシ 蝸牛、かたつむり(川西地方)

トマンボ、とまの座敷、トマンデーともいう。オキノデーに対して

入口に近い方の座敷(寺間)

トトクタイゲ うなじの所に生えている毛。昔の子供は伸ばしていたが、今の子供は伸ばしていない。(寺間、小仁田)

ドンドンヤキ 左義長(川西地方)

ドーロクジン 道陸神(川西地方)

トーギミ 玉蜀黍、とうもろこし(川西地方)

トヅカリ 砥石の袋、砥石を持ちあるくとき入れて行く袋、麻なわ製

とわら製のもの、二種類ある(寺間、小仁田)

ドドメ 桑の実、雨にぬれたり水あびした時など、ロびるが紫色になる

ことがあがる、これをドドメ色という。シンドロと呼ぶ桑の木に

大きくうまいのがなる。子供たちが食ったり口にぬったりして遊ぶ

(川西地方)

ドジ 土間(川西地方)

ロジ 土間。ロジホーキ(寺間)

トヨ とい。竹ドヨ(川西地方)

ナーマ 苗代(寺間)

ナーマ 苗代(小仁田、川上)

ナミヤブシカタリ 浪曲家、ななわぶし語り(川西地方)

ニワツトリ にわとり。ニワツトリは寒中にははだして歩く(谷川)

スケット 山のはだの露出している所、山の崩れた所(阿能川)

ヌスット どころぼう。ヌスットつかめて縄なう(川西地方)

ヌルメ 水が苗代に入るまでに温まるように造った所(寺間)

ハナミズ 花水、出穂水(阿能川)

ハネイド 撥釣瓶井戸、柱の上に横木をつけ一端におもりの石をつけ、

他の一方に桶をつけたもので、上下して水をくむ井戸(寺間)

ヘート、モレーニン、ホイト 乞食、こじき(小仁田)

ポット ひよっと。ポットしたらどうなるか(谷川)

ホッペタ はは、顔(谷川)

ボンボラゴエ にごった声、かすれた声(谷川)

マキメ 髪毛、つむじ(川西地方)

マセツボー、マセンボー 馬小屋牛小屋の入口の横木(川西地方)

マッコブチ 炬燵。マッコブチを略してマッコの語を使うことが多い

(川西地方)

メメズ みみず。日影のメメズがねえたつ(湯原)

メンバ 木製の弁当箱(寺間)

メンバイタ うどんやそばを打つ時のす板(寺間)

モイックジ、モイササリ、モエックジ 燃え残り、もえさし。(願に、

阿能川、谷川、小仁田)

ヨルガヨナカ 真夜中。この仕事はヨルガヨナカでも片づけなくては

いけない(谷川)

ワカサレ 分家筋(阿能川)

ワケナシ 非常に。ワケナシにぎやかだ(小仁田)

カマキリ トカゲ

トカゲ(茶色、尾の銀色の共に) カマギツチ

カマキリの卵 カラスッペノコ

男根 ヘノコ

女陰 ベッチ

妻の尻に敷かれた男 カブツテル アカズキンカブリ

蛇が数匹玉のように塊った玉、蛇ゴシキ(玉とは必ずしも交尾してい

るのではなく、ヤキモチやいているのである)(綱子)

スタター 友だちに対していう。あんだということ。

コンター 目上の人に対していう。

ムシ ことばの最後につけることばで、目上の人との会話の場合につ

かう。

ムサ ムシと同じにつかうが、これは、友だちとの会話の中でつかう。

藤原ことばについて、「ムシ、ムサ、ジョウヤにイナコト」という。ジョウヤとはきつとということ。イナコトはへんなことという意味（平出）音をたてる。大声をあげる。

〇〇アニイ 名に続けて用い、弟妹から兄を呼んだり、目上の人を呼ぶ敬称となる。ときには、べつ称の意味を持たせる場合もある。

コンター 目上の人を呼ぶ時用いる。妻が夫を呼ぶ時に使う。

スタター 目下の者や友だちを呼ぶ時用いる。夫が妻をよぶ時に使う。

……ムシ 語尾に付け、目上の人に対して用いる。

……ムサ 語尾に付け、目下や友だちに対して用いる。

〇〇ドン 目上の人に対して呼ぶ時の敬称。妻が夫に対して呼ぶ時にも用いる。（一畝田）

ニシ 目下の者に対していう。（西）

オトツアン 父

オツカサン オツカマ 母

オジイ・オバア 祖父母

オッチャン・オジコ

オバサン

名前は呼びすてであったが、とつても親しみがある。（大穴）

ソウダムシ そうです。

ソウダベアン? そうでしょう?

ソウデガンサイムシ さようでございます。

サムイムシ 寒いですね。（谷川）

草を高く積んだのを草ニウという。ニウとは積んだものをいう。（鹿野

沢）

堆肥の山をニウという。藁を積んだところは藁ニウという。（大穴）

夕方のことをオオマガトキという。天狗がきてさらわれるぞと子供に

よく話したものだ。（谷川）

最初のころのペトペトした雪、雨まじりの雪のことをミソテという。

（湯ノ小屋）

メジロというあぶの小さいのは、川原にいるもので、たかるとすぐ食いつき、食われるとすぐ痛い。昼間は温泉に入っていられないぐらいとんでくる。（湯ノ小屋）

六、諺

赤城はかみなりの果

小豆の火は馬鹿に燃させる団子の火はガキに燃させる

越後の食いだおれ上州の着だおれ

大雪のあしたは裸っ子の洗濯

かなづちの川流れ

キツネはまやかしても婦すがムジナは婦さない

くださるものなら夏でもコソデ

今度と化けものは見たことはない

子供川端火の用心裏の桑畑草がらせんな

死なば十月な十日

姑の後を嫁がつく

禪宗ぜに持たず門徒もの知らず

だまり虫の壁破り

つめで拾って笑でこぼす

年寄りっ子は三文やす

なな月子は投けても育つがや月子は育たない

猫にまたたびお女郎に小判

猫なで声の鬼心

のみ（蛋）の夫婦

のめしというめしはすえ飯より悪い

箱入りびなに虫がつく

東かみなり雨もたず

孫ひこは穴端（暮穴のまわり）の飾り

六つ八つ風に四つ目照り五七が雨で九は病い

桃栗三年柿八年ゆずの馬鹿めが一三年（寺間、小仁田、川上）

目ぼうたるがとぶ（暑さがひどいときにいう）

ムシロ織りはコモに寝る。

淡島様（ボロをさげている人をいう）

北なりのカミナリ。

北なりの不動さん。（高日向）

コタツヤグラの寸法（四尺四寸）と棺箱の寸法は同じ（寺間）

むしろ織りのヒどりとサッコさし、代がきのはなどりとしんどりほど

仲の悪いのはない（寺間）

味噌汁と晩秋蚕は当りっこない（川上）

養子の盆腹。ぼた餅はすぐ悪くなるので、養子にも腹一杯食わせる

こと。（大穴）

ヒヨトリを頼んでおいて、ナスが好きだといったら毎日ナスを食わせ

た。ヒヨトリがいうのに、「ナスナスと借りるよりもよいけれど、毎日ナ

ス（済す）のもつらいものかな。」

民俗芸能

はじめに

水上町の民俗芸能の位置づけは一つには山村地帯における神事芸能としてのもので、どうかちでどの程度遺されているかということ、二つには旗本面と都会あるいは平坦部のように生産性も高く、経済的にも恵まれている地帯と比較してどういう役割を果たしてき、また現代の社会にどう生きていくかということ、三つには新潟県福島県に接している地帯として関東平野文化圏との交渉は認められるかということの三点にしようと思ふ。そうした立場から見ると、獅子舞などに関東型の一人立ちではあるが、奥羽系統の鹿踊りの要素や越後系統の鳥追笠が入っていることなどが興味を持つことがわかった。義太夫、地方歌舞伎といったかつては平坦部にも盛んに行われていたものが、最近まで生活の中に生きつづけていた事実も確認することができた。予想したよりもはるかに関東平野文化というものが濃厚であることは、山脈というものによって隔絶されていると、意外にそれが文化の隔絶現象を見せているということを知った。同時に保守的な社会意識と旗本の空白から神楽や獅子舞の神事芸能を今も守っているということもわかる。そういう意味ではかつての平坦部の社会における痕跡を探る手がかりにもなる。ことに藤原地区という広大な面積を持ちながら、点在する集落によって構成されている孤立を防ぐために、中央の諏訪神社に年一回集まって藤原祭りという芸能の合同上演を行なっている事実などは、山村社会における運命共同体といった社会意識とともに考えさせられるものを持つて

いる。地方歌舞伎が予想よりはるかに盛んであったことを知ったのも一つの収穫であった。この芸能への限らない執着は、生産性とか経済性といったものだけでなく、生きていく人間の志向をも示唆して呉れている。そうかと思うと一方にはわずかに消えのこったいろりの火の one かからにも当るまいが、湯原地区に連なる白式尉と黒式尉の面と神楽鈴である。明治頃までは区長の事務引継ぎのときに能の式三番を舞って書類の引継ぎをしたという伝承を持ち、能の仕舞が消えた後も貴重なものとして伝えられているが、これなどは県下各地にのこる中世的芸能と推定される翁式三番を、かつてこんな奥地でも行なっていたのではないかということも推定させる極めて興味あるものである。

民謡やわらべ唄では、生産と結びついた林業関係の木びき唄と、奥地の巨木を伐採して修羅落し、土入れ、小流といった利根川を利用しての運搬という特殊な仕事が大正時代まで行なわれた関係の作業唄のように、この水上地区特有のものが採集できた。こうした用材伐出し関係の職人は、紀州、木曾といった方面からの渡り職人が多かったから、民謡の上でも広域的な影響が見られる。労働が過重で歌など歌っていられたかったというのが、民謡採集ではまず第一に伝承者のいう返事であるが、しかし時代の激しい流れを避けて、古い民謡が採集できた。白ひき唄の如きも今回の調査で県下ではじめて採集できたのも、収穫の一つであった。水上温泉群の上越線沿線区域のように、東京と直結して昭和六年の上越線開通以来四十年を経た地区は、敏感に新しい時代の波をかぶって急速に変ぼうしているが、そうした中において、盆踊りや盆踊り唄などの古い姿が探り得られた。わらべ唄などでも、他の町村といくらかずつの地方的特色を持つものが見られる。従来民謡やわらべ唄におい

て採譜できなかつたが、前回の桐生市梅田地区に次ぎ、採譜が報告できるところになった。

なお、芸能のうち、民俗芸能の部は萩原が執筆し、民謡や子供の遊びは酒井が執筆した。(萩原道)

一、獅子舞

(一) 藤原の獅子舞

藤原の獅子舞は、もとは上組・中組・下組とに分かれていた。上組(かみぐみ)というのは、湯の小屋、大芦、須田貝、明川の四部落であった。中組は横山、久保、一畝田などの各部落であり、下組は、平出、夜後部落を中心として結成されていた。この三組の獅子が交代で中区の関ヶ原の諏訪神社の舞台上演されていたが、途中で中区は疫病が流行してやれなくなったため、しばらく上と下の二区で交代してやっていた。最近になり中絶していた中区が上と下の指導を受けて復活し、現在はまだ三区交代で毎年諏訪神社の祭典に上演している。この諏訪神社の祭典は別に「藤原祭り」とよばれ、広大な地区に僅かの戸数をもって点在している小集落が、年に一回合同で祭りを行なうという極めて興味ある村落共同体の一面をのぞかせている。この舞台についてはその項に譲るが、山村には珍しい立派なもので、本来は地方歌舞伎舞台として建築されたものであるが、現在はもっぱら獅子舞とか、村の演芸用などに使われている。こうした共同社会的な



藤原上組獅子舞道具箱のふた

(萩原 道撮影)

行事は、何時の頃から行われたか明らかでないが、もと血族的な社会構造が、連帯をつよめるために考え出されたとなれば注目してよいであろう。いま一つの要因としては、こうした芸能は、職業の少ない山村において重要な意味をもっていたので、実行する要望は非常に強くあっても、戸数が小さな単位集落では維持できないので、幾つかが共同して上・中・下の三つの組を結成した経験を、更に拡大して藤原地区全体の結成にしたものかも知れない。獅子芸能を僅かの人数で維持することは非常にむずかしいからである。上組の上演記録に拠ると、もとは旧暦の七月二十七日が定日となっていたが、昭和十三年になると新暦の九月一日に変更されている。これはちょうど盆の行事と祭の日が重なるので九月一日にしたのだそうである。昭和二十九年からは九月七日に再度変更された。現在は九月七日が上演の期日となっている。大正三年頃はすでに上組と下組だけでやっていたから、上組の上演は一年おきになっている。終戦後からは三月目ごとになっているのは、三組共同の上演の変遷をよく物語っている。

この三組の獅子はもとは同一系統であって、長い間にわずかずの相違を生んできているが、まず同一のものであり、下組では最初の下組から始まったといひ、上組では上組から下組に伝えられたといひ明らかではない。今回の調査では中組は再興してまだ日が新しいので調査から外したので、上組と下組のみについて記しておくことにする。なお、実演を今回調査したのは上組のみで、下組は去る昭和三十八年九月二十九日に単独で実演を調査した記録をもとにした。もちろん今回さらに前回の調査資料と、上組との比較上必要と思われるものについても再調査をしたことを付記しておく。

(二) 藤原上組の獅子舞

獅子組 藤原地区の最奥地である湯の小屋、大芦、須田貝、明川の四集落の集合によって結成されている。昭和九年の記録を見ると、「入

四ヶ組」と称したらしい。それぞれの単位集落に「世話人」がおかれる。稽古場は大芦の付長(じつちよう) 伍長にあたる村役の名宅に置くところ。現在は大芦の集会所に道具一式を保存して稽古もこの集会所で行なっている。獅子舞の踊り子、囃子方などに特別の規制はなく、誰でも自由に参加できたし現在でもそうである。練習、上演にかかる費用は昔から集落ごとの平等割りとされている。

上演 藤原祭りにあたる九月七日に藤原地区の総鎮守である諏訪神社の祭典にあたり、三年に一回奉納上演するだけでなく、大芦、須田貝、明川の三地区の氏神には別々に奉納される。すなわち神明さま(旧八月一日)、天王さま(旧六月二十五日)、八幡さま(旧八月十五日)の祭日には別々に上演されることになっている。したがって、もとは単位集落の神社に付属していた神事芸能の一つであると見てよいのである。

獅子舞の構成 一人立の獅子舞で三つ並んだ場合の呼称は、中央が中獅子、左が先獅子、右が後獅子である。他の県下の獅子舞という陸獅子(藤原の場合中獅子と雄獅子という呼び方とちがう。舞いをやる役を振り子(ふりこ)「踊子」といい、「振り子」は獅子舞を演ずることを「舞う」よりも「振る」と称したことを示している。付人は「古久保」に「おかめ」が付く。囃子方は笛吹(二人)、太鼓(二人)、獅子唄(二人)となっている。今回の調査では次ぎの役割で上演された。

- 笛吹 中島春次(57) 桑原勘雄(41)
 太鼓 中島鼎(63)
 先獅子 中島貞一(45)
 中獅子 中島梅雄(42)
 後獅子 桑原勘雄(41)
 獅子唄 中島節雄(55) 中島鼎(55)
 世話役 区長中島茂吉(46)

曲目は大きく分ける四つから成っており、「角助」「小久保」「綱懸」(つながり)「望(のぞみ)の庭」という。この曲目名は県下の数多い



藤原上組獅子舞の人たち(萩原 進撮影)



藤原上組獅子舞のカシラ(萩原 進撮影)

獅子舞の中でも寡聞にして知らない。共通しているのは「綱懸」で、あちこちの獅子舞で見られるが、他の獅子組とちがいでこの「綱懸」は「雌獅子隠し」である。綱懸りは他では実際に綱を張ってやるところが多いが、ここでは綱を張らないで、歌詞の「雌獅子隠し」で演技が進められてゆく。

獅子カシラ ヤリ材を用いて彫刻されているが高さは一二センチ、全長約四〇センチである。型式はカシラの部分と頭にかぶる帽子の部分とに分かれているもので、カシラの部分は仮面のように装着する者の顔面より前方に突き出ているマスク型である。頭にはめる部分はタケで編んだ笠の輪のようになっている籠である。獅子の仮面の部分の奥行が二二センチ、籠の部分が一九センチほどあるから横から見ると細長く見え、恰かも龍頭のそれに似ているので、籠型のカシラと見てもよい。大きさは県下各地のカシラと比較して小さいのは、顔の前面に突き出す仮面型のためであろう。カシラの地肌は黒く塗られているが、その黒だけでは

なく、使うたびに、両眼や顔の一部の額などに金紙を貼りつける。鼻の穴の内部や口の内部などは朱が塗られている。眉毛や耳たぶの先には白いペンキで点描式に文様が描かれている。白木のままのものにその都度金銀紙を貼りつけたり、緑青や朱をもって彩色するカシラは甘楽町秋畑那須の獅子カシラにあるが、多くは黒と朱のウルシ塗りのままのものである。その点上組のカシラの飾りは特色がある。前額部の頭頂にある捲毛を模様化したものが梵鐘の乳のようになっていたのも一例がない。多くのカシラは宝珠状でしかも渦巻きになっているが、ここの獅子カシラは単調な七個の突起が前記のような形で付いている。鼻筋から眉毛の間を通り、眉間に下状の太い線が白いペンキでつけられているのが先獅子である。中獅子と後獅子のこの文様はいくらか違う。下顎には色紙を短冊に切ったものをシデのように三方に垂れ下げている。獅子舞の実演者がカシラを顔面に装着した場合に前から顔が見えないためもある工夫であろう。カシラの後方に付けてある頭にかぶるときのタケ籠に紐があり、これでカシラをしっかりとして下顎から装着する。カシラの後方にある鳥総はカシワというニワトリの羽を三してある。なお、先獅子のカシラの内部に墨書銘があるがそれに「昭和三戊年、文月」と読める。これが製作年時を示すものか、修理を示すものであるが、おそらく新調した年紀であろうから比較的あたらしいものであることがわかる。それ以前の古いカシラは現在二個遺されている。一つは須田貝の八幡神社にある。いま一つは大戸の中島浅吉さんの家に保存されていたので調べることができた。現在のカシラが仮面型であるのに対して、古いものはカシラそのものがスッポリと頭にかぶるキャップ型である。高さ二四センチ、前後三六センチある。用材もキリの木ではなく、かなり重量がある。もとはウルシが塗られていたと見えるが現在は白木のままだになっている。特長は口を大きく開き、歯も牙が上顎に二個、下顎に二個ある。この開いた口が実は獅子の眼の高さになっており、外が見えるようになってくる。耳が非常に大きく、紙圍などに飾られる大きな飾り獅子のよう



藤原上組獅子の古いカシラ
(萩原 道撮影)



藤原上組獅子 (萩原 道撮影)

に見える。鳥総はカシワという鶏の尾ではなく、馬の尾の毛を植毛したらしく、植毛のための小穴が沢山のこっている。キャップ型ではあるが、カシラの内部に直接頭を入れるのでなく、やはり内面が籠づくりの楕円型の帽子が取付けられている。製作年時は明らかでないが多分江戸時代のものであらうと思われる。この型式のカシラが古いカシラであるとすると、現在使用のものとは大部変わっているのであるが、すると現在のものは以前のものと関係なしに作られたものであるか。現在の人たちの記憶によると、いまのカシラの前のものはよく覚えていないということであったが、カシラの上では注目されてよい。

須田貝にある古いカシラは、昭和三十八年に単独で調査したときの記録によると、用材はキリで下組の古い二個のカシラと同じものである。高さは一七センチ、幅は一六センチ、カシラだけの前後は一九センチ、頭にかぶるタケ籠の部分が二五センチある。銘はないが、下組の古いカシラの天明五年のものと同じであろう。地の肌は黒ウルシで、口の中

眼の縁が朱ウルシである。上・下顎は重箱型で角は直角に近くなっている。

衣裳 この獅子の踊り子は上着と袴を付ける。この服装も黒下の多くの獅子舞の服装と似ている。大てい上着にタツケ袴をつけ、足には足袋でわらじを履くが、ここの踊子はわらじや草履をはかないで白足袋だけを履く。このことは、上組の獅子は地面の上で演じないということを示している。上着は筒袖で、手には手甲をつける。衣裳の上にカシラから長く布を垂れ上半身を覆うものを、ここでは「水引き」と称している。他の獅子では「小掛け」とよぶところが多い。水引の隅に小布れでつくった「小猿」というのを付ける。顔から下げた水引の顔にあたるところは寒冷沙が窓のようになっていて外が見える。背中に菱型のラシヤあるいはピロッドの布がついている。一人が小さな腰太鼓を結びつけ、両手の振で叩きながら舞うが、この獅子の腰太鼓は紙製であって皮を張った太鼓ではないから、叩く真似だけをする。これも藤原獅子舞の一つの特色



藤原上組獅子舞の小道具（萩原 進撮影）



藤原上組獅子舞の腰太鼓（萩原 進撮影）

である。獅子方の服装は通常の着物の上に袴をつけ、白足袋をはき、頭に佐渡の民踊などに使われる鳥追い笠をかぶる。鳥追い笠の上に、布と紙製の造花で飾る。この鳥追い笠から、越後方面からの文化的な影響が見られるのは注目される。舞いの特長が多分に民謡踊りのなものはその項で述べてあるが、県内の獅子舞で羽織袴、鳥追い笠というのは非常に珍しいと思う。

道具 獅子方の使う太鼓は二個あり、直徑三二センチ、高さ二〇センチあり、大木を輪切りにしたものをくり抜いてつくった胴である。用材はトチの木であるという。道具の種類からいうと締め太鼓、あるいは太鼓（おおかわ）というものである。これを斜めに置いて振で打つ。獅子舞をリードするのは笛であるが、笛は六穴である。さらにも使うのであるが、このさらを使用することが獅子舞の特色であったから、場所によっては獅子舞のことを「さら」とよぶところもある。また獅子舞を演ずることを「振る」というが、「さらをする」というところもあるのはこのさらからきているのである。さらのする台はタケによってつくられており、長さ三二センチ、するさらの方は四〇センチある。踊子が腰につける腰太鼓は厚紙でつくられている。大きさは必ずしも一定ではなく、大体一八・五センチ、高さ八・五センチのものが多い。両面に色紙や金銀紙を貼りつけた文様が美しく、一つの玩具のように見える。この太鼓に二本ずつ四本の麻縄がつけられていてこれで腰に結びつける。小さいものは直徑一六・五センチ、高さ六・五センチである。文様には「三日月」「二つ巴」「菊の花」などもあるが、一つの文様はこんどの調査で湯の小屋でみた土蔵の倉印とおなじものもあった。すると地元の家紋の一つになるがすべてが家紋ではないようである。撥も細いスギの木などを削ったもので、色紙で美しく貼られている。

踊り方 踊り方は全体が流れるような踊り方である。一番激しい踊り方の「挑み」の曲目でも足を踏みつける返閃（へんべん）のときもほかの獅子舞のようにドシン、ドシンと強く踏みつけない。獅子は序、破、急



藤原上組獅子舞の実演（萩原 進撮影）

の三段に分かれており、踊子の体勢は上体を斜め前方に傾けるのが特長である。腰太鼓は叩いても音は出ないので叩く真似をするだけである。全体的に他の獅子舞のようにダイナミックな動きも少ない踊り方でなく、一般の民謡踊りがやや激しい動作で踊るといふ感じがする。しかし、踊子は汗びっしょりになっていたりかなりの運動量であることは窺える。

獅子唄 獅子唄

はこの獅子舞の曲目の構成と一致しており、パントマイム形式の多い獅子舞の中でも特に歌詞が多い。いわ

ば人形芝居における演技者は無言劇であるのに対し、台詞からナレーションまで浄瑠璃（義太夫）でやるのと軌を一にしている。またこの獅子唄は二つに大別されて、はっきりと特長を見せている。各曲目にある「長唄」は他の獅子唄にはあまり例を見ない。長唄以外の獅子唄の曲節は大体系下の獅子唄と曲節が類似しているが、長唄とよばれるものは文句を長く引き伸ばして歌うもので、悠暢（いうよう）迫らざるものが見られる。全体の旋律は前橋・近辺の田植唄に似ており、民謡としてもすぐれていることがあげられるであろう。一般の獅子唄が平板的で単調であるのに対して、この長唄は音階も高低差があり、節題しも繊細であるのが特色である。以下各曲目ごとに歌詞を記す。

1 角 助

庭見の唄

門の戸びらのくつわ虫、なりを静めて歌のふしをきけ（くり返し）

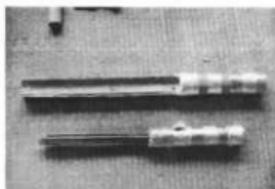
長唄

一 参り来て、これのお庭を眺むれば、黄金（こがね）笠衣に綾のみとちよう（くり返し）

二 佳（か）くすけは、みめも心もよけれども、十のれんげが二つたら



藤原上組獅子舞の笛吹き
（萩原 進撮影）



藤原上組獅子舞のササラ
（萩原 進撮影）

わん(くり返し)(注、二つたらわんは指八本のことであるというが意味不詳)

三十七が、(注、若い娘を十七という)今年はじめてふじしょうじ、愛の手枕引けよ十七(くり返し)

「参り来てこれのお庭を眺むれば」までの上の句は柏川村月田、小野上村小野子など各地に多いが、下の句が何れも違っている。「かくすけ」は武士の奴のことである。この曲目は奴の「かくすけ」(角助)からとったものであろう。「十七が」も獅子唄に多いが、甘菜町秋畑の那須では「十七の胸につばみし二つもの」柏川村月田では「十七の左たもとに糸つけて」など多い。意味がわからなくなったのは口伝で次ぎ次ぎと伝えてきたためであろうと思う。一の「みとちよう」は「御戸帳」である。

いどみの唄

一 思いもよらぬ朝霧が降りて、ここで女獅子を隠しとられた(くり返し)

二 なんと女獅子をかかす共、これのお庭で尋ねあうべし(くり返し)

三 霧も天へと巻き上げて、これのお庭であうぞうれしや(くり返し)

雀の切 天神林のむらむら雀、羽矢を揃えて羽根をかえせな(くり返し)

これが「いどみ」という曲目の唄である。いどみは挑みで、争闘の意味を持つものであろう。要するにこの曲目は他の獅子舞という雌獅子隠しにあたるものであって、一匹の雌獅子(この座では中獅子)をとり合うという意味からつけられたものと思える。なおいどみの曲目の最後に、「引き唄」として

十七のすえやたもとに糸つけて、しなやしなやと後へひかえな(くり返し)

というのがある。一曲舞い終って、舞を引くときに歌われる。

2 古久保

庭見唄

廻れ廻れよ水車、おそく廻りて席に止まれな(くり返し)

一 朝日さす、夕日輝くその間(あい)に、黄金づくりのお宮増し増す(くり返し)

二 十七が、宮の社殿に手をかけて、何を申すや、今の若さに(くり返し)

三 しだれ柳をひきとめて、これに宿れや十五夜の月(くり返し)

井戸見の唄

一 十三から今まで連れたる女獅子をば、これのお庭で隠しとられた(くり返し)

二 奥山の沢の出口に女獅子居た、何とかなしておびきだば(そか)うよ(くり返し)

三 懸る霞も吹き払い、これのお庭であうぞ嬉しや(くり返し)

切唄 山がらが、山に離れて里に出て、これのお庭で羽を休めた(くり返し)

引唄 友達につけたる太鼓に糸つけて、しなやしなやと後へ控えな(くり返し)

この「古久保」というのもまた雌獅子隠しの続演であることが獅子唄から察せられる。切唄の切は、芸能でいう一段一段の終末のことで、義太夫による芝居などでは「きり(序)」「おおぎり(大序)」などという言葉がある。引唄はこの曲目の演舞が終って引く(退く)ときを意味している。この曲目には長唄はない。「古久保」という意味はよくわからないが、藤原下組の獅子では「国久保」と書いて「こくほ」とよんでいる。

3 網懸り

庭見の唄

京で五かんの唐絵の屏風、一と重にさらりと建てや廻れよ(くり返し)

長唄

一 青柳の糸繰り返せよこの庭で、重ね重ねに参るめてたや(くり返し)
二 玉すだれ上げつ下ろしつ巻き上げて、奥の神様花と見えそろ(くり返し)

三 参り来てこれのお庭を眺むれば、四方黄金に升形の庭(くり返し)
井戸見(いどみ)の唄

一 七つから今まで連れたる女獅子をばこれのお庭でかくし取られた
(くり返し)

二 南無薬師尋ぬる妻に会わせられ、綾の御戸帳かけて参らす(くり返し)
三 あれ見さえ女獅子男獅子のふり見なさいよ、よれつはぐれつよねん
ないもの(くり返し)

切唄 天竺の天の川原の川島で、白石揃えこきり小拍子(くり返し)

引唄 白金の鎗戸の障子を後へ引く、それを目当に後へ控えよ(くり返し)

この綱懸りの曲目の唄は、他の獅子組にも似たものが多く見られる。
「京で五かんの唐絵の屏風」は、富岡市高瀬の獅子組では「唐からくたる
唐絵の屏風、一重にさらりと引きは巻いた」になっている。「参り来てこ
れのお庭を眺むれば、黄金小草が足にからまる」(柏川村月田)などもその一
例である。切唄の「こきり」は、獅子舞の囃子に使う楽器の「ささら」
(本稱道具の項参照)のことである。

4 望(のぞみ)の庭

切唄

一 天神の天の川原の川島で、白石揃えこきり小拍子(くり返し)

二 つばくらが金をくわえて里へ出て、これのお庭の御倉木(みくらぎ)
に棲む(くり返し)

三 お山から切れを切れをとこのまれて、今はならわぬお山三つ切り(く
り返し)

四 鎌倉に鍛冶屋の娘が機を織る、拍子揃えて三つ拍子(くり返し)
五 玉川の綱反(注碇)打つのは面白や、拍子を揃えて派手な女子(お
なご)な(くり返し)

六 峰の雪谷の水も押し分けて、何を急ぐや万咲(注、豊年万作のこと)
の花(くり返し)

七 押して見なよ水車、ここに聞ゆるはね滝の音(くり返し)

八 千早ふる神も思みて五つ草の、花にまれなる桶の豊かさ(くり返し)
九 絹川の中の小島の姫小松、風吹けばなそよと靡けよ(くり返し)

十 水上町に音も名高きこの太鼓、社内もにぎやか今日のお祭(くり返
し)

引唄 白金の鎗戸の障子あとへ引く、それを目当に後へ控えよ(くり返し)

この「望の庭」が囃子方では最もむずかしい曲目とされている。こと
に面白いのはその「水上町に」であるが、最近になって付け加えられ
たものであるが、古式に則って演じられる獅子舞にこうした新作を加え
るものなかなか興味深い。
以上で、藤原上組の獅子唄は終るのであるが、いくらかずつは県下各
地の獅子唄と歌詞が似ているが、その曲節のなかにある「長唄」の節だ
けは独特のものを持っており、藤原上組の大きな特色になっている。
実演記録 上組獅子舞にのこる藤原祭りにおける実演記録を見ると次
ぎのようである。

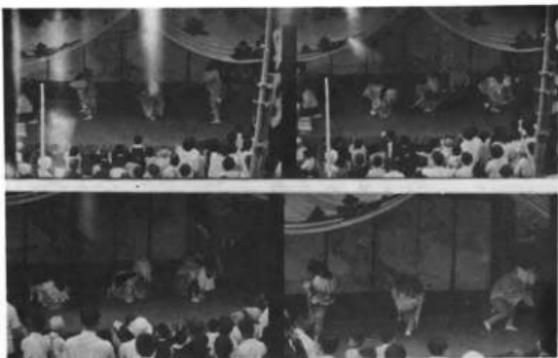
大正三、五、七、九、十一、十三、十五の旧七月二十七日

昭和三、五、七、九、十一の旧七月二十七日

昭和十三年に九月一日に変更

昭和二十六、二十九、三十二、三十五、三十八、四十一、四十四年の
九月七日

(二) 藤原下組の獅子舞



藤原下組獅子舞の藤原諏訪神社舞台における演出（荒木 茂撮影）

獅子組 藤原の下地区である夜後地区の平出、橋詰、見沢の集落で行われていた獅子組であるため「夜後三ヶ組獅子」と称した。現在は藤原ダム工事で見沢、橋詰が水中に没して廃村となったので平出が主として維持している。上組が「入四ヶ組獅子」と称したのに対しての呼び名である。カシラは



藤原下組獅子舞のはやし方一太鼓 2人
(中村和三部撮影)

赤城神社で舞う。

獅子舞の構成 一人立の獅子で、踊り子また振り子とよばれる踊り手が一人で一頭の獅子となり、三人が組んで舞う。獅子の名称は「前獅子」「雌獅子」「後獅子」とよぶ。上組の中獅子がここでは雌獅子という。前・後が雄獅子に当る。このほかに付人で「おかめ」がある。お多福面をつけ、ささらをすって舞の中に加わる。ほかに雌獅子隠しのときに、花笠をつけて三人の獅子が追いつ追われの中央に立って雌獅子を隠す役をやる。この花笠役の扮装は上着、袴をつけ、腰太鼓を結びつけて、頭には顔をすっぽり覆うように花笠をつける。この笠は模様の染めぬかれた布を円く垂らしてある。この笠の上には竹筒にさした造花が立てられ、その造花には一面の円い鏡がとりつけてある。県下の他の獅子舞ではこのような曲目を「花吸い」といい、美しい牡丹のような造花になっていて直接人が立つことはない。「花吸い」という曲目名はこの獅子組の構成にはない。昭和三十八年に調査したときの獅子組の役は左の通りであった。



藤原下組獅子のはやし方一笛 2人
(中村和三部撮影)

か一式は平出の集会所におかれている。もとは父子相伝で、上演前十日聞くらい一軒に集まって練習した。

上演 上組と同じくもとは七月二十七日に諏訪神社で、古くは三年目に一回上演してきたが、途中上組とともに二年交代となり現在に至っている。以前は天気祭りや雨乞い、疫病除けにやった。このほかに八朔に

- 役員 林義明 林荒衛 林初衛 林袈裟吉 林忠雄
 太鼓方 林棟元(師匠) 林友代 林章
 笛 林将光(師匠) 林広吉
 師匠 林十三二

今回の調査では、世話役林義明(59)、笛林将光(55)、太鼓林棟元(43)、林巖(39)の人びとであった。囃子方は正式には笛方(二人)、太鼓方(二

人)から構成される。

曲目は大別すると三つになる。「国久保」(こくほ)、「二徳運懸」(日本かがり)「耶魔懸」(やまがかり)がそれである。「やまがかり」は「やまと(倭)懸り」ともいっている。三つはさらに歌詞と囃子の曲によってこまかく分かれているが、それは獅子唄の項に記す。「国久保」では一人立獅子の三人と、太鼓(二人)、花笠(一人)で構成される。「二徳運懸」でも同じである。しかし、舞の途中で花笠は引き込んでしまう。以下曲目ごとの出演を表しておくことにする。

国久保

入羽の座 笛、太鼓、花笠、前獅子、牝獅子、後獅子

遠見の座 太鼓、影(ささら)摺、前獅子、牝獅子、後獅子

歌吉利 太鼓、前獅子、牝獅子、後獅子

小歌吉利 太鼓、前獅子、牝獅子、後獅子

岡崎の座 笛、太鼓、花笠、前獅子、牝獅子、後獅子

中吉利 太鼓、前獅子、牝獅子、後獅子

雲の吉利 太鼓、前獅子、牝獅子、後獅子

後吉利 太鼓、前獅子、牝獅子、後獅子

二徳運懸

入羽の座 笛、太鼓、花笠、前獅子、牝獅子、後獅子

初吉利 笛、太鼓、前獅子、牝獅子、後獅子

庭見の座 同右

前吉利 同右

居眠りの座 同右

嬉戯の座 俗に「猫ぢやらし」とよんでいる。同右

飛躍の座 同右

花見世の座 笛、太鼓、花笠、前獅子、牝獅子、後獅子

中吉利 笛、太鼓、前獅子、牝獅子、後獅子

雀の吉利 同右



藤原下組獅子のやまがかりの舞

(中村和三部撮影)

後吉利 同右
社吉利 同右

耶魔懸

入羽の座 笛、太鼓、花笠、

前獅子、牝獅子、後獅子

初吉利 笛、太鼓、前獅子、

牝獅子、後獅子

庭見の座 同右

前吉利 同右

歌吉利 同右

小歌吉利 同右

遠来の座 笛、太鼓、花笠、

前獅子、牝獅子、後獅子

中吉利 太鼓、前獅子、牝獅子、後獅子

子、後獅子

駒の吉利 同右

大吉利 同右

伊勢吉利 同右

松吉利 同右

綾織の吉利 同右

鶯の吉利 同右

万作の吉利 同右

清滝の吉利 同右

後吉利 同右

社吉利 同右

北獅子隠しは、国久保、二徳運、耶魔のどれにもあるのが特長である。花笠が最初に出るのがそれを示している。上組では綱懸りが雌獅子隠しであるのに対して、かなりちがった構成になっていることがわかる。

獅子唄 藤原下組の獅子唄は上組と共通する面もあるが歌詞、曲節とも違っている。曲目の構成が、上組は大きく四つに分かれているが、こちらは三つに分かれている。しかし、下組獅子唄に「長唄」という呼び名がなく、「歌吉利」がそれに当るが、旋律が上組の方がすぐれている。曲節の名も、県下の平坦部に多い「歌吉利」(注、吉利は切リ段りのこと)とか、「入羽」(いはり)、「庭見」、「小歌吉利」(岡崎)、「中吉利」、「後吉利」というように整然としている。これは下組の方が早くに行われて、標準的な県内の獅子舞として発生したものであるのか、或いは上組の方が古くに行なわれ、下組はその影響を受けながらも、他の獅子舞の影響を受けたのか明らかでないが、上組の方が構成が独自のものをもっている点は興味をひくことは事実である。以下に下組の獅子唄を記す。

1 国久保(こくぼ)

入羽の座 (歌詞なし)

庭見の座 (歌詞なし)

前吉利

廻れ廻れ水車、おそく廻りてせきに止まるな。(くり返し)

歌吉利 (長唄に当る)

一 詣り来てこれのお庭を眺むれば、四方四角に柵型の庭(くり返し)

二 お庭から諏訪の社前を眺むれば、かけや揃いた麻の初引き(くり返し)

三 しだれ柳を引き留めて、是れに宿れや十五夜の月。

小歌吉利 (長唄に当る)

一 七つから今まで連れたる花獅子をば、これのお庭で隠し取られた(くり返し)

二 花獅子隠され味気なや、いざや友獅子花獅子尋ねる。

三 なんど花獅子を隠すとも、これのお庭で尋ね違ふべし(くり返し)

岡崎の座 (歌詞なし)

挑み

岡崎女郎衆岡崎女郎衆、岡崎女郎衆が飛来留得等。得等々。(飛来……は「ひんがりようやりようや」とよむ)

中吉利

風吹けばかかる霞も吹き払い、ここで花獅子に逢うぞ嬉しや。

雲吉利

雲のようで晴れたる雲のふりを見て、それを見真似に霧をこまかに(くり返し)

後吉利

十七の裾やたもとに承つけて、しなやしなやと後へ控えな(くり返し)

2 二穂運(にはん)懸り

入羽の座 (歌詞なし)

初吉利 (歌詞なし)

庭見の座 (歌詞なし)

前吉利

京で呉韓の唐絵の屏風、一重にさらりと立や廻した(くり返し)

居眠りの座 (歌詞なし)

嬉戯の座 (歌詞なし)

歌吉利 (長唄に当る)

一 朝日さす夕日輝くその下に、黄金造りのお宮ちそろ(くり返し)

二 この宮は天から下りてお立ちある、黄金造りのお宮輝く(くり返し)

三 仲立ちの打つや太鼓に花咲いて、花を散らさで遊べ仲立(くり返し)

飛躍の座

花見世の座
花を見世の花を見さいな(くり返し)

中吉利

白鷺があとを見かねて立ちかねて、水をならさで立つや白鷺(くり返し)

雀の吉利

天神様の群れ群れ雀、羽を揃いて羽をかわいせ（くり返し）

後吉利

斯国で雨が降るげで雲が立つ、お取申して花の都へ（くり返し）

社吉利（歌詞なし）

3 耶麿（やま）懸り

入羽の座（歌詞なし）

初吉利（歌詞なし）

庭見の座（歌詞なし）

前吉利

京ではやりし車牛、この座をさらりと曳きや廻した（くり返し）

歌吉利（長唄に当る）

一 雨降れば庭のはこりもはや湿る、出でて舞けよ宴の殿簪（ばら）（くり返し）

二 揚がる毬落ちて来るところを蹴飛ばすれば、三方板にとまる毬かな（くり返し）

三 十五夜の月の出るのを待ちかねて、ともしかけたたる芋段松明（くり返し）

小歌吉利

一 奥山の沢の出口に牝獅子居た、なんとかなして誘（おび）き出さばよ（くり返し）

二 南無薬師尋ねる妻に逢わせられ、綾のみ戸帳をかけて参らせ（くり返し）

遠乗りの座

夜来て夜来て夜戻る、遠乗り茶帳はよい茶帳（くり返し）

中吉利

風吹けばかかる霞も吹き払い、ここで牝獅子に会うぞ嬉しや（くり返し）

胸の吉利

京で六りよの胸を見し、伏せや起せやこまの折膝（くり返し）

大吉利

よしぎりの葦（よし）の密場に巣をかけて、巣をば捕られて葦を怨み

る（くり返し）

伊勢吉利

伊勢の宮立面白や、栄華木（注、玉垣をしゃれたものか）の内にて神

楽拍子を（くり返し）

松吉利

峰に立ちたる姫小松、谷風吹けばなそよと靡くな（くり返し）

綾織りの吉利

一つ跳ねろやぎりぎりす、続いて跳ねろや綾の機織（くり返し）

鶯の吉利

鶯が谷を渡りて里へ来て、梅を頼りに宿を求める。（くり返し）

万作の吉利

峯の雪谷の水を押分けて、何を急ぐや万作の花。（くり返し）

清滝の吉利

清滝の落ちてかかりし御代なれば、今年の稲穂は八穂で八石。（くり返し）

後吉利

白銀（しろがね）の遺塔（やりと）の障子を後へ引く、それを見真似

に後へ控えな。（くり返し）

社吉利（歌詞なし）

上組と下組の双方の歌詞を比較してみると共通したものがかかり多い

ことがわかる。上組の歌詞は全部で三十八あるうち、下組と共通するも

のは（一部の違いは共通として）十六ある。獅子舞では系統が同じであ

れば歌詞はほとんど違わないと考えられるかも知れないが、長い間には

加除のあることは他の獅子舞でも見られる。三十八のうち十六共通すれ

ばまず系統は同じものと見てもよいであろう。下組の歌詞で「雲吉利」



藤原下組獅子カシラ (萩原 進撮影)



藤原下組獅子カシラの頭にはめるタケ籠の帽子 (萩原 進撮影)

「花見世の座」「雀の吉利」「遠乗り座」「岡崎の座」「駒の吉利」「伊勢吉利」「松吉利」「機織り吉利」「鶯の吉利」「万作の吉利」「清滝の吉利」という曲名はすべて歌詞の語句から採ってつけたものであって、他の獅子舞にはほとんどない曲目名である。これは曲目名というよりも歌詞の一節の名である。またこの曲目名の中に「座」とあるのは、神楽の曲目名のとくに「何々の座」と称すことと共通していることもこの獅子舞の由緒を考える一つの資料になる。

カシラ 下組のカシラは現在使用しているものと、古いものとに分けて記す必要がある。というのは幸いに古いカシラが現在遺されているからである。先ず現行のものから記してゆくことにする。三個のカシラとも同じ大きさであり同じ様式である。様式は第一に全体に小さいこと、第二に獅子口の上顎と下顎の両方の角(かど)が普通は箱のように直角に近い角度をなしているがこの獅子カシラはゆるい円を描いていることである。高さは一センチしかなく、前後は二・五センチしかない。

前後は他の町村の獅子カシラと比べてそう短くはないが、高さも幅はかなり小さい。全部ウルクシで塗られており、しかも三個とも地の色が塗り分けられている。先獅子は黒色が主色で、飾りものだけ茶色(チョコレート色)であるが、牝獅子は地の主色は朱で飾りものが茶色、後獅子は地の色が緑で飾りが茶色である。一見して黒と朱と緑の三色に塗り分けてある。いずれも最近塗り替えをやったので真あたらしい感じがする。前

と後のカシラは鼻の下に髯を意味するものが描かれているのは男性を象徴したものであろう。牝獅子にはそれがないことかこのことは言えそうである。ほかの獅子組のカシラには角の有無などで性別を示しているのは全く同じというのが多いが、下組の彩色の模様などで区別をしているのは面白い。三個とも口の中は朱色で共通している。耳は小さくて誇張されている他の獅子カシラと比べて特色がある。頭に披るときは構造からは仮面型であって、カシラの後にタケ籠様のものを取付である。鳥籠はカシラというニワトリの尾羽を用いている。カシラの下顎には三方に白紙の短冊型のものをのれんのように下げてある。上組では色紙を使っているが、白紙もまたカシラを引き立てる役目を果たしている。口は全部閉じて歯だけが顕然と見えるようにつくられ、獅子の持つ怪奇な象徴を示している。用材は軽いようにとキリ材を用いているのは他と同じである。鼻は猪鼻であるが大きくはない。上組のカシラと大きく違うのは、上組ではカシラに金紙、銀紙をその都度貼るのに、下組のカシラは塗ったまま別にあとから貼紙をするというのをしなさい。これは塗り替えであつたらしく見えるからであらうし、その必要がないためであらう。上組のもののはウルクシの本格的な仕上げになっていないので、その都度貼紙することによって、演出効果を強めるためにやっているものである。それだけに上組のカシラは素材であるともいえる。

古いカシラは現在二個あるが、幸いなことに製作年代を知る墨書銘が記されていることはいろいろの意味で貴重な文化財であるといえよう。型式は仮面型でカシラの後部にタケ籠の帽子がついている。現在使用の

ものと比較して幅が一・二センチ、高さ一・三・五センチ、前後が一・六・五センチほどある。前後の長さはむしろ小さいが、高さは二・五センチほど高い。鼻が大きく、高いこと、眼が大きく釣り上がっている。上顎と下顎が現在のものより重箱型に近いのも違いである。地は黒ウルシで塗られ、眼や頭髪部の突起が梵鐘の孔に似ているところに金紙を貼りつけてあり上顎部には銀紙を貼っている。材はキリを用いて製作されている。内部に墨書銘があり、「弘化三年丙午七月、林小八郎」と読める。これが製作年代である。口の内部は朱ウルシで塗装されている。鳥籠はカシワの尾羽をつけてある。全体から見て上組で現在使用している獅子カシラに近いものといえよう。おそらく上・下両組とも同じようなものを同じような手法で飾っていたものということが考えられる。現在のカシラには金・銀紙は貼りつけないが、古いものに貼ったことは上組の現在とおなじだったことを思わせる。いま一つの古いカシラも前述のものとはほとんど同じであるが、高さが一五センチ、前後が二〇センチでひとまわり大きい。鼻の猪型で大きく、鼻孔の大きいのも前のと似ているし、眼も逆八の字に釣り上がって大きい点も共通する。要するにおなじ型式と見てよい。金・銀紙の貼りつける手法も同じで、現在のものを使う以前に前のと合せて使用していたものであろう。内部に墨書銘があり、「形主、橋詰村、林万右衛門、天明五年乙巳八月、三ヶ村中」とあり、土地の者の手でつくられたものであり、しかも江戸時代中期の天明五年（一七八五）の作である。作者は林万右衛門で、三ヶ村中で共同で獅子舞を保持していたことが窺える。このときを下組の獅子舞の創始と見るべきかどうかは不明であるが、少くもその当時はすでに行われていたことが認められる。こうした地元人の自作の獅子カシラは県下各地に多いが、似たものとしては利根郡利根村柿平のカシラがある。柿平のカシラは鼻が今少し大きいのが型式は同系統のものと思える。利根郡の獅子舞の系列をさぐる上に参考となろう。用材は土地の者の話ではカッラ（桂）かサクラであらうという話であった。このように、古いカシラが保存されて



藤原下組の獅子（中村和三郎撮影）



藤原下組獅子の花笠

（中村和三郎撮影）



藤原下組獅子舞のササラ（萩原 進撮影）

いたことは、獅子舞資料として貴重であるといえよう。衣裳と服装 衣裳と服装は上組とおなじようであって取立てて特色はない。上組の項でも述べたように、他の獅子舞では上着はシャツ式ではモモ引と立付袴の合の子のようなものをはき、足袋にわらじという扮装が多いがこの獅子舞でもその点は同じであるが、わらじをはかないと

いう特色をもっている。もとはあるいはわらじをはいて地面で振ったのではないかと思うが、現在は舞台の上とか集会所などでやるためにはかないという。お座敷芸のなところがあるのである。獅子方が鳥追笠をかぶることも共通している。獅子の踊り手が上着の上にカシラから続くフワリとした覆いものをつけるが、これを「つゆひき」という。上組では「みずひき」といふ。一回の実演がすむと村人に払い下げられる。村ではつゆひきを幾つにも切り裂いて各人に与える。各人はこれを持ちかえって子供の着物につけると丈夫に育つと信ぜられている。獅子舞が神事芸能であることをここにも遺している習俗といえよう。「つゆひき」の両側には一個ずつと裏に一個「轆(あや)」とよばれる飾りものがつけられる。三角型の袋状のもので、中には小豆、モミガラ、ソバガラなどが入れられる。上組ではこれを「コザル」とよんでいるが、「あや」の方が一般的な呼称のようにある。花笠にはサクラ、キタ、ポタン、短冊、月、毬などの飾りがつけられるが、花笠を一層美しく見せる飾りがこうした素朴な発想で行われているのも面白い。

道具 獅子方の太鼓はサワグルミの木をくりぬいて胴としているもので、直径二四・五センチ、高さ一九・五センチある。太鼓の撥はホウ(朴)の木でつくられ長さ二八センチである。手元の方に色紙が束ねてつけてある。獅子の腰太鼓は紙の張子であることは上組のものと同じである。先獅子のつけるものは直径一五センチ、高さ六・五センチある。牝獅子のは一五センチ、高さ五・五センチあり、後獅子のは直径一三・二センチ、高さ六・五センチある。獅子の撥は長さ二四・五センチ、金と銀の色紙を交互に巻きつけてあり、手元には色紙で綴がついている。すべて鄙びた美しいざい沢さが窺われる。彫(ささら)も上組のものと同じである。笛は「獅子田流五号」とよばれる笛でシノ(篠)でつくるといふ。六穴のものが使われる。おかめの持つ柃束も道具の一つである。ササは色紙や金銀紙でうつくしく貼りつけられ、綴がつけられる。振子の撥は細く小さく、やはり金銀や色紙で飾る。

由来・徴証 下組の獅子の由来については林義明さんのところに所載されている記録があるので、それをあげて一つの資料とする。

一、獅子舞ノ起源

抑獅子舞之(起源)奉尋、天竺獅子国光中国為主、孝徳天皇御代大化乙巳年仲秋、獅子首体日本写取、国王為三泰平獅子、北野何某古風称三三乘(注ささら)舞、至今為神事祭礼之規模者也。

二、藤原村獅子舞之由来

人皇四十五代聖武天皇天平安四年、名僧行基ト云フ人、唐土印度ノ国へ仏学修業ニ行キ獅子舞ヲ踏フ覚ヘテ日本へ帰リ、義洞真洞吉備ノ真備へ伝習セシメ、山部赤人日本歌ニ修正シテ天平十一年奈良正倉院建立落成ノ時始テ獅子舞ヲ行ヘリ。其ノ後北野天神及比名都ニ於テ行ヘリ。人皇四十九代光仁天皇山城国長岡宮殿(御遷(遷)都、宝龜八年)ヨリ獅子舞ヲ為スコト年中行事トス。其ノ後人皇八十三代後鳥羽天皇文治五年、源頼朝病ニ罹リ、鶴ヶ岡八幡宮へ病氣平癒ノ祈誓ヲ掛ケ、相模小太郎義国ヲ京都ニ遣シ、白河家(注白河神道家)ノ小姓井上正兼(神官)都ヨリ鎌倉へ下リ獅子舞ヲ行ヘリ。其ノ時相模小太郎ノ倅小平太ナルモノ獅子舞ヲ稽古修得シタリ。源頼朝病氣ノ全治シ日本國中ノ大社へ銅造リノ宮ヲ納メシム。相模小平太藤原武尊神社(穂高)銅宮ヲ奉納ス。時へ建久二年六月ナリ。相模小平太ハ永久藤原ニ在リテ獅子舞ノ舞踏ヲ教ヘ其ノ時ヨリ始マレリ。

宝永三丙戌年三太夫写之

笛方 式人

太鼓方 式人

花笠 老人

獅子 前中後参人

右ヲ以テ一組トナス。

中獅子ヲ牝獅子ト言フ、角ガナイ。

前後ノ獅子ニハ角アリ。

猛獸ノ獅子ニハ角ガナイ。管ナレ共此ノ獅子舞ノ頭ハ古書ニ鹿子舞トアリテ、昔ヨリ神社祭ニ毛ノ荒キモノヲ供ヘ、其レ故鹿ヲ模造シテ奉納ス。鹿ノ子頭故角アリ。昔ハ肉ハ鹿ノ肉以外ハ食サズ。仍テ肉トイフ文字ヲシテ古書ハ説メリ。

獅子舞経歴書林三太夫写之

注、林三太夫は青木沢村林龜五郎氏の祖先、利根郡藤原村武尊大明神の神職にして、京都吉田家より祠官を拜命、家督毎に該家の裁許状を得たる人なり。

享保七年三月二十七日御裁許、右裁許状は明治維新の際返上す。

(中略)夜後三ヶ組トハ平出、見沢、橋詰ノ三部落テアリシガ、昭和二十九年建設省が藤原ダム構築ノ際見沢、橋詰ハ水没シ、祖先伝来ノ墳墓ノ地モ湖底ト化シテ以前ノ影ハ全ク失フニ至レリ。其ノ部落住民ハ二十九年ノ大祭ヲ最後ニ第二ノ郷土ヲ求メテ大半ハ四散シ、残レル者ハ平出ニ移住シタリ。七百年ノ古キ郷土ノ獅子舞モ壊滅ノ状態ニ近ク今後はレヲ如何ニシテ維持スベキカニ付キ現在ノ平出在住者一同ト協力シテ保持スル様ニ方針ハ決定セルモ(下略)。

藤原の祭典は昭和四年より九月七日と改む。

三、現在獅子舞頭役

笛方 林荒衛 林忠雄 林義明 林正光 林広吉 林郁治

太鼓方 林初衛 林一雄 林三二 林棟元 林岩雄 林弁一 林章

四、獅子舞大頭について

獅子頭は相撲で云ふならば横綱格であります。幼少七、八才の頃より舞を習ひ、十五、六才の頃より自分の好により笛、太鼓を習ひ、全部舞踏曲が出来た様になって頭から太鼓と成るのである。笛の部、太鼓の部とそれぞれ太鼓がある程度の年輩となつて後にゆずりて引退し顧問格と成り、舞曲の相談と指導に当る。頭役最高十年最短二年。祭典後道場私ひの席上で部落中の者集まつている前で蓋を受けて頭役と

なる儀式である。(この記録は近年清書したものである)

以上の記録に拠ると、下組の獅子舞は宝永三年(一七〇六)當時は源頼朝が病氣平癒祈願のために京都から獅子舞を鎌倉へ招いたが、その獅子舞を鎌倉に持ち運んだ相模小太郎義国の子小平太が獅子舞を習得したことに始まると伝えている。小平太が頼朝の病氣全治の報賽として日本国中の有名な神社に銅製の宮祠を奉納したとき藤原の武尊神社を訪れて銅製宮祠を奉納した。その節に小平太が村人に獅子舞を伝授したため現在に伝わっているという。次ぎに興味のある記載は、下組の獅子のうち牝獅子には角がない理由である。しかも、獅子舞は鹿の子舞といつてもとは鹿踊りであったから頭に角があるということを述べていることである。これは下組の獅子が鹿踊りの系統と関係があるのではないかと、いう推定の一つの根拠になる。一人立ちの獅子舞の源流に鹿踊りがあることは今までもわかつていた。しかも東北地方の奥羽の獅子舞というのには明らかにシカの角をつけた獅子舞が現に多いのである。群馬県下では、奥羽地方のように正しくシカの角を戴くカシラを見ない。シカの角のようには枝の分かれているものには角が短小である。奥羽地方の獅子舞の角は実物を二本付けるので大きく立派である。呼び名も「鹿踊り」という。文字は鹿踊りと書いても「しし踊り」と発音するのであるが、その理由を鹿の子踊りであると述べているのは注目されてよい。昔神に毛のもの(獸)を供えるのに多く鹿の肉を供えたことは、肉を「しし」と呼ぶ理由だとも述べている。藤原の獅子舞はその鹿の子舞、鹿踊りの系統であることをほのめかしていることは、群馬県下の各地の獅子舞の系統であるが刺しにくい背景を説明する、ことにもなるかと思う。もちろん角があるからすべて鹿踊りとは言えないであらうが、藤原の獅子舞では少くも東北地方奥羽系統の鹿踊りとの関係を見のがすわけにはいかないようである。鹿の角をつけて舞うとすると、荒い刺しい動作はできないからどうしてもゆるやかなものとならざるを得ない。鎌倉から伝来したというよりも奥羽地方の影響が見られ、それに関東型の刺しにくい所作の

舞い方が混じり合って現在のものになったという推定をする根拠にならうかと思う。烏追笠を被り、立付袴でなく袴でやるといふことも、本来この獅子がダイナミックなものでなかったことを伝えているので、一層奥羽系統の含まれていることを推定せざるを得ないのである。上組の獅子の長男、下組の歌吉利という曲名の如きも、比較的ゆるやかに舞う獅子舞だからこそあるのであって、その意味で藤原の獅子舞は今後群馬県の獅子舞の系列を研究する上に一つの鍵を握っているのではないかと思ふ。

実演記録 藤原関ヶ原の諏訪神社に奉納する以外に実演した記録。獅子組の記録から抄載しておく。

- 昭和三・十一・一 水上駅
 同 九・十二 水上宮林署横山簡易製材所の落成式
 同 二二・八 水上町小日向阪東館
 同 三六・一〇・一六 県護国神社
 同 三八・一〇・三〇 明治神宮靖国神社
 同 二九・九・三 NHKラジオ
 同 四一・八 藤原ダム建設十周年記念
 同 四一・三・一〇—一三〇 東京都三越文化財展示会
 同 四一・九 宝川温泉山の家落成式
 同 四二・二・二五 関東甲信越一都九県プロック民俗芸能大会(於水戸市)県代表で出演
 同 四二・九・二八 町制二十周年記念湯原見番
 同 四三・一〇・一九 県企業局十周年記念事業祝典
 同 四四・九・一三 利根郡下教育委員会視察に際し平出にて
 同 四四・十一・三 水上体育館文化クラブ発表会

二、神 楽

(一) 粟沢の神楽

粟沢の武尊神社に所属する神楽で、系列からいうと里神楽である。武尊神社の神楽は大正年間まで利根郡月夜野町名胡桃の神楽連がきて奉納上演されていたが、昭和三年に群馬郡大願村柴崎(現在高崎市)出身の松本耕三郎という人が沼田町須賀神社の社掌から指導を受けて地元の人びとが習い自演できるようになった。粟沢の真庭一郎さんの家を練習場として冬仕事に習ったという。松本耕三郎氏は柴崎の由緒ある天王の進雄神社に伝わる神楽をそのまま伝えたものであるから、進雄神社の系統



粟沢武尊神社祭礼

(萩原 進撮影)

である。現在の組織は次の通りである。

座長 真庭一郎 (62)
座員 桑原三郎 (45) 阿部徳太郎 (55) 桑原徳蔵 (45) 真庭巳
千男 (42) 真庭公夫 (35) 桑原翠 (47) 真庭宏 (29) 真
庭一夫 (30) 木村栄一郎 (29) 阿部良洋 (27) 桑原儀十
郎 (36) 阿部寛 (30) 桑原満夫 (27) 真庭義夫 (34)
阿部直通 (32) 阿部黙行 (28)

曲目は現在十七座あり、全部を上演すると四時間ぐらいを要する。この曲目は次ぎのようである。

- 一、奉幣
- 一、大幣
- 一、猿田彦・天狗の面をつけた猿田彦単独の舞
- 一、浮橋 イザナギ、イザナミの二神の舞
- 一、カッコウ 天太玉命と天兒屋根命二神の舞



粟沢の神楽実演 (1)



粟沢の神楽実演 (2) (萩原 進撮影)



粟沢の神楽面の一部 (萩原 進撮影)



粟沢武尊神社神楽殿 (池田秀夫撮影)

- 一、おかめ 天うずめ命の舞
- 一、手力雄 手力雄命の舞
- 一、天照大神 手力雄命の手で天の岩戸隠れの天照大神が岩屋を出る舞
- 一、鍛冶屋 金山神の舞
- 一、両刀 刀を鍛える経津主命の舞
- 一、天狐 白狐の舞
- 一、種播き 農業神としての舞でにぎの命の舞、中に「おどけ」(興舞)がある
- 一、弓の舞 たけみかつちの神の舞
- 一、薙刀の舞
- 一、稲田姫 素戔嗚命の大蛇退治であしなづち、手なづち、奇稲田姫が共に現れるにぎやかな舞
- 一、えびす様 「おどけ」の舞が含まれる
- 一、国因め

以上の様に標式的な里神楽であることがわかる曲目からなっている。粟沢の元の神楽座である高崎市柴崎の雄雄神社の曲目ももちろんこの座と同じであるが、もっと大きく分けて猿田彦、天の浮橋、かつこの舞、鍛冶屋の舞、両刀の舞、てんこの舞、弓の舞、薙刀の舞、大蛇退治、鯛釣り、国固めの十一座になつているが、その中をさらに分けると粟沢と同じになる。むしろ、元の親の神楽の方が大まかになり、末座の方が伝統を守っているともいえる。

仮面は作者が明らかであつて、沼田市仲町の斎藤一郎（屋号岡本屋）という面師が刻んだものである。おかめ、鶯、夷（えびす）、おどけ、ひよっとこ、たけみかづち、かつこ（二個）、すきのお、天狗、鍛冶屋の弟子（鬼面）、天照大神（女面）、浮橋（女面）、天狐（二個）、大蛇などがあつた。面はほとんどが紐によつて顔に結びつけるが、一個だけくわえる面がある。いずれも新しい作であるが、作者名のわかっている郷土の神楽面として保存されてゆくべきである。

獅子は笛、太鼓、大太鼓だけでやる。鼓はつかわない。全体の実演はパントマイムであつて、唱え詞は大蛇退治のときに歌う「八雲立つ出雲八重垣妻ごめに、八重垣つくるその八重垣を」というのがあるだけで、他は全部獅子の笛と太鼓に乗つて進められてゆくのである。

神楽殿は粟沢の武尊神社境内にある。二階造りで間口二間半奥行三間になつている。神社の位置が高いので神楽殿が高くしてある。もとは神楽殿はなく、割拝殿を利用し、割拝殿の片側を舞殿としたという。神社の割拝殿については神事執行の場、お籠りの場などいろいろに使われているが、この村では神楽を舞う場として利用されたことがわかり、割拝殿研究の上の一つの資料を提供している。

上演は毎年四月二十六日の祭典のときに行われる。

（二）小仁田の神楽

水上町小仁田の大峰神社に付属している神楽である。系統は越後の弥彦



小仁田の神楽実演

（萩原 進撮影）

神社から教えられたという伝承があつたので、神楽座の者が弥彦神社に行って調べたが同系統でないことを確認したというから、弥彦神社の系統ではなさそうである。やはり里神楽の系統であるが、はっきりした本の座は決め難い。

曲目も一般の里神楽と似た内容であり、演じ方も似ている。現在行なわれている曲目は次ぎのようである。

- 一、帝撰
- 一、庭清め
- 一、青木舞
- 一、猿田彦
- 一、日天月天
- 一、三本刺
- 一、咲耶姫
- 一、八十八夜
- 一、八十八夜（道化舞）

一、盆舞（お盆舞）

一、山山神

一、細女の舞

一、恵比寿の舞

一、大蛇退治

一、三韓玉取

一、餅搗舞（切餅を投げる）

昔やれて現在やらなくなった舞は、次ぎのように数が多い。

一、稚子舞

一、ようけ舞

一、二百十日の舞

一、鉦の舞

一、日本武尊の舞

一、獅子宝剣の舞

一、いざなぎいざなみの舞

一、大山祇の舞

以上をまとめると、もとは二十四座あったことがわかる。そのうち現在十七座あり、廃絶したものが七座あった。神楽を神事舞（神賑、神勇）と興舞（余興舞）とに大別した場合、興舞は「八十八夜」「盆舞」「餅搗舞」などである。廃絶した座では「ようけ舞」「二百十日の舞」などが興舞に入る。県下他の神楽座と比べて特に出るものはない。

小仁田の神楽座は太々講といひ、規則十二ヶ条が定められている。その全文は次のようである。

第一条 太々講ニ付キ太々御神楽ヲ舞フ御方ハ精心ヲ改メ慈ヲアキラメ忠孝ヲ忘レズ、各其時ノ社掌ノ指揮ニ従フベシ。

第二条 一ツ舞ヲ上ゲル時ニハ一ツノ神社ヲ持チ、一タイノ神ト奉リ重キヲ置キ舞ウベシ。

第三条 祭典ノ日御神楽ヲ上ゲル人ハ必ず水行ヲナスベシ。



小仁田の神楽面のなかの翁面（萩原 達撮影）



小仁田の神楽殿（萩原 達撮影）

第四条 御シタタレヲ附ケル時ニハ拝礼ヲ致シ戴クベシ。

第五条 御面ヲ戴ク時ニハ拍手ヲ打チ拝礼ヲ致シ戴クベシ。又シヤクマ（毛ノついた披りもの）ヲ戴ク時ニハ重キヲ置キ戴クベシ。

第六条 尚鳥帽子ヲ戴ク時ニハ口ニ白布ヲ掛テ戴クベシ。尚中敬ヲ持ツ時ニハミダリニ粗末ニ致ス事ハ相叶ハズ。

第七条 尚舞ヲ舞フ時ニハ役人ニ屹度礼ヲ致スベシ。

第八条 舞ヲ舞フ時ニハ四方八方ヲ切ル事ハ必ず忘ルベカラズ。

第九条 四方ヲ舞フ時ニハ祓禊ヲ致シ護シ舞フベシ。

第十条 八方ヲ舞フ時ニハ悪魔ヲ切り神ヲ折り地ヲクタクケルト舞フベシ。（注）八方は日本歌舞の中にあるドシンドシンと踏み固める仕草をいふ）

第十一条 太々講社ノ内ハ如何ナル事有共互ニ不障致スベシ。尚舞殿ニ上ル前ニミダリニ騒グ事、又他人ノ舞フ時ニハ護テ座ヲハナルル事、ミダリニ舌ル事、笑事皆叶ハズ。

第十二条 尚舞殿ヨリ下リシ時ニハ神ヲ拝シ、役人連ニ対シ礼ヲ致スベシ。尚音楽人（注囃子方）ニモ礼ヲ致スベシ。又次ギ舞ヲ人ニハシタテラ着ケテヤルベシ。

右之通り拾ニヤ条堅相守可致事

以上がこの太々講の規約であるが、舞人のために定めたものでかなり厳しいものである。現在この太々講に入り、芸能を伝えている人びとの名と別振は次のようである。



小仁田神楽を演じた人びと（萩原 進撮影）

今回の調査における際のものである。

- 帝撰 小野良一 (21)
- 庭清め 鈴木正一 (22)
- 青木舞 鈴木進 (19)
- 猿田彦 石井敬 (18)
- 日天天 石井正雄 (24)
- 長谷川昇 (31)
- 三本剣 鈴木進 小野良一
- 田村尚介 (30)
- 咲耶姫 鈴木正一
- 八十八夜 鈴木清三 (27)
- 鈴木達男 (22)
- 盆舞 鈴木昭雄 (31)



小仁田神楽の般若面（萩原 進撮影）



小仁田神楽のおかめ面（萩原 進撮影）

石井増次 (35)

山山神 石井清 (22)

銅女舞 石井正雄

恵比寿舞 石井増次

大蛇退治 須藤藤一郎 (20) 鈴木達男

三韓玉取 田村尚介 鈴木清三 長谷川昇

餅搗舞 鈴木照雄 石井清

囃子方は大太鼓（一人）太鼓（二人）笛（一人）鉦（一人）である。舞はほとんど無言劇であって歌詞はないが、大蛇退治のときのみ詞が入る。その点では粟沢の神楽とよく似ている。世話人は鈴木近義（59）

石井増次（35）石井康成（40）さんの三人である。

神楽殿は大峰神社境内にあり、二階造りで下が茶屋になっている。間口二間、奥行三間でもちろん正面は神社に向いている。神座は奥に設けられて御幣束が立てられる。能舞台における式台と似た位置が神楽殿にもある。そのどちらが先にこの様式をつくったか明らかでないが、こうした神聖な場所を設ける舞台というのは吹米風の舞台には見られない。四隅にタケをつけ、軒先には、水引き幕を垂らして飾りつける。神楽殿を利根郡地方では舞殿とよぶところが多いが、藤原の諏訪神社の歌舞伎舞台を舞殿とよんでいるようにここでは混同されている。

飯面は製作年代、作者名ともに墨書銘がなく明らかでないが、保存もよく、大蛇面などを加えて二十二面ほどある。中にくわえ面が二面ある。その中で翁面の黒式尉、白式尉は佳品である。切れ顎八文字切りである。年代はいずれも新しいものばかりである。大蛇退治の手なづち、足なづちに使うものである。大蛇の面は各地でそれぞれ特色があるが、ここのは縦型のもので、粟沢の横型のものと同型的である。

こんどの調査で特に実演してもらったのは全部で四座であったが、以下実演の経過を記すことにする。

一 庭清めの舞 採物はサカヤと幣束で、舞台を清め献う舞である。唯

子は「ごん拍子」というので進められる。

二 三本刺の舞 素面にて三人が鉢巻で出る。銘々が刃渡り八寸位の刀を持ち、これを持って時に三つ巴になって刃の下をくぐったりしてみせる。これを五回繰り返して終る。囃子の曲は「社切り」である。

三 八十八夜 二人のひょっとこが麻を持って出る。農事の仕事をして疲れたので寄り込み、煙草を吸い合ったり、居眠りをしたりする。そのあと立ち上って三宝を持ち種播きの仕草をする。囃子の曲は「余市舞の曲」である。

四 三韓玉取 神功皇后の三韓征伐からつくられた曲目である。最初は扇の舞で鈴と扇で舞う。このときの曲は「稚子囃子の曲」を使う。次にひょっとこが現れて踊る。このひょっとこが玉を呉れとねだる。そこへ武内宿祢が採物金剛杖をもって出る。ひょっとこが宿祢と争い追われるが金剛杖にひょっとこが打ちすえられる。宿祢は玉をひょっとこから取り出して神功皇后に献上する。曲節は稚子囃子の曲である。おしまいに三人揃って玉を奉じてひと廻りする。パントマイムであるが、大蛇退治のときだけ「この剣獅子宝剣を納め奉る」とだけいう。全体に若い青年が演ずるだけに活気がある。

三 地 芝 居

水上町は別項の歌舞伎舞台に見られるように、過去においてさかんに地芝居の行なわれたことを証している。群馬県下の農村歌舞伎舞台の分布状況を見ると、平坦部に密度が濃く、山間部には粗である。しかも平坦部にゆくほど現存の舞台は少く地名としての舞台が多い。山間部によく現物の舞台が多く、地名の舞台はほとんど見られない。一見平坦部には常設舞台が少なく山間部に常設舞台が多い、ということ进行分析するとこういう傾向があることがわかる。地名の舞台はそこに興行のたびごとに仮設の芝居小屋を建て、芝居が終ると撤去したことを思わせ、一

方山間部ではその都度の仮設の煩わしさをなくすために常設の舞台をたてておき、ときどき芝居を演じたことを示すものである。地方巡業の旅芝居を雇上げて芝居をやるほど豊かになかった山村地方では、自から演ずる地芝居を発達させた。また都会とちがひ、娯楽に恵まれなかったから、義太夫を習い、三味線を習い、芝居の役を演ずるといふことは、娯楽の空白を埋めることが十分にできた。平坦部では金さえ出せば十分に娯楽に恵まれたから早く自主演劇が消えてしまったのに対して、山間部では今もなお歌舞伎をやり、義太夫を語れる者が少なくない。江戸時代日本全国を風靡した歌舞伎が山間部にはなお息づいてゐる。ことばは演劇社会学という立場からも興味がある。ことに群馬県では利根郡、沼田市が最も地芝居が盛んであるという背景の中に水上町の地芝居は調査されたわけである。

(一) 綱子の地芝居

綱子は地芝居が盛んで、現在も元氣な真庭要吉さん(77)は、義太夫も振付もできる芸達者の人で、大正・昭和はこの人によって進められたものである。昭和二十年以降も、水上町湯原で敬老会に「水上座」の名で演じている。綱子は昔から地芝居が盛んで、綺麗をたくさん所持していたが今はない。舞台は常設を持っていなかったのが普通の民家を舞台に、庭にハネ木で屋根をつくり観覧席にして楽しんだ。ハネ木による舞台は昭和三十年頃利根郡昭和村貝之瀬で実物を見たことがあるが、スギの木を両側に並べ立て、先端を曲げて双方から中央に引張り結びつける。こうして屋根の骨組みをつくり、それに糞糞の竹カゴを並べ、上にムシロを覆った。芸題は太十、安達三、寺小屋、鎌倉三代記、阿波の鳴戸など時代物が多く演じられた。

(二) 平出の地芝居

平出には舞台という地名があり、地芝居や買芝居のときにはここで小

屋掛けをしたという。林茂吉さん(78)が中心で振付を教え、中心となつて一座をまとめていた。その頃は民家を舞台とし、その庭にハネ木の屋根をドーム状にかけて観覧席としたことは他の地区と似ている。昭和四十二年水道開通祝いのとき高麗を沼田市から借りてやったのが最後だった。平出の林虎太夫という太夫がいたが、上手な義太夫語りで、近所を語りあるき有名だった。弾き語りのできる太夫は近所でもこの人くらいだった。林義昭さんの家には、手製の三味線が遺されており、三味線を買えないのがこころしい努力までして義太夫を語ったことがわかる。橋詰部落の林長吉という人も芝居が好きで、振付もできた。

(三) 青木沢の地芝居

明治中頃から大正初め頃までは義太夫や地芝居が盛んで、ほとんど若い衆がやった。藤原の関・原の諏訪神社境内で行われる年一回の大祭のときに芝居をやったこともあった。警察にやられた者が引致されてひどい目にあつたこともあった。義太夫をやる人も多かったが最近ほとんどやられない。盛んの頃は組で十人から十五人も集まって連桶古をした。村に村寅次郎という人がいて竹本正義太夫の弟子でこの人は三味線も弾いて教えることができたほどの達人であつたといわれる。おさらい会にはよその部落まで呼んで、三、四部落が集まって大さわぎしたが、民家を借りて、家中片付けせり出しまで大工に作らせた。ランプに百目ろろそくまで立てて明るくした。観客からハナがあがり、家中に紙に書いて飾つた。一晩中、夜あけまでしていた。たいがい、娘が三、四人まじつていて人気をさらっていたというから大変な熱であつたことがわかる。平坦部では素人の芸能としては姿を消していたものが、生活の中に生き生きと息づいていたのは注目してよい。

支度はふつうの服装だが、舞台に登るにはカミシモ・ハカマを付けた。見台があつて、床(ゆか)本はあるが、床に登つたらソラで語つた。演題は奥州安達・原・大園記十段目・鎌倉三代記などが多かった。娘は「山

勝半七酒屋の段」など細い声のものをした。娘は桃割れ髪に花かんざしをさしてビラビラさせ人気を集まつた。初めは手ぬぐいを舞台に投げたが、のちに十銭くらい紙にひねつて投げて祝儀とした。娘は好きな子がやるくらいに少なく、娘と仲よくなることもあるが、別に問題にはならない。しかし、娘さんが義太夫の上手な人と仲よくなつて家を出てしまったこともある。

(四) 川上の地芝居

舞台の項に話したように、川上の舞台を利用して明治末年頃までは盛んにやられた。芸題は安達三、千代萩、神靈矢口の渡し、本朝二十四孝、鎌倉三代記など時代物が選ばれた。太夫はよそから頼んでくるものが多かった。芝居をやるときはいち警察の許可をとらなければならなかつた。その手続きは区長の仕事であつたので区長はずいぶん骨を折つて警察へ通つた。もし間に合わないときは予定通りやってしまうことがあつた。警官が中止命令を出すこともあつた。この調査の中止命令を逆に利用したのを「潰し幕」とよんだ手を打つた。それは十分練習できていない幕ではボロの出るころに調査に踏み込んで、それを理由にしてくれないとトジツたりして役者が立往生するときがなくもなかつた。芝居の日は壮健(今の青年団)が近村からも手伝いに来た。女衆は炊き出しを手伝つた。舞台をこわすときも多勢が無料で応援してくれた。芝居の終つた祝いの振舞いを「道場払い」といって、酒樽を何本もすえて振舞つた。費用は木戸銭よりハナとよばれるご祝儀が主であつた。

(五) 小日向の地芝居

小日向には阪東館という劇場があり、そこを中心としてよく芝居が興行された。それができるまでは阪東館のところが舞台場で掛舞台をつくつて地芝居が演じられた。この阪東館は大正六年にでき上がり、株主



小日向会館（阪東館跡）（阿部 孝撮影）



阪東館の株主入場券
（阿部 孝撮影）

を集め出資してつくられたものである。一株ごとに無料入場券（木札二枚）が出された。当時で下足代二銭だったから今考えると嘘のようである。天神様の一千年祭の時は、村中の臼を集め踊り場の土台とし芝居が行なわれた。その時使った、ハネ木で火の見やぐらが出来たほど大きな材料が使われた。大きな舞台であったことを物語っている。

（丙） 小仁田の芝居

小仁田にのこる明治三十四年の「素人演劇興行願」があるので次に掲げるが、当時芸人鑑札を持たないと興行できなかつたので東京の芸人の名を借りてやったことを物語っている。

素人演劇興行願

一 今般利根郡水上村大字小仁田村々社大峰神社祭典ニ付明治三拾四年四月三日四日午前八時ヨリ午後六時迄雨天順延ニテ全村大字全村三百五拾番地所ニ於テ別紙鑑札写芸人ヲ相雇ヒ從覽興行仕度候尤モ金錢之儀

ハ何等之名儀ヲ附ルニモ係ハラス一切収入不仕候、依之別紙芸願所作趣旨要領及芸人ノ鑑札写并ニ場所ノ明細図地主ノ承諾書演芸者惣人名地六村長ノ証明書相添此段願上候也

明治三拾四年三月

利根郡水上村大字小仁田村第拾八番地

惣代 鈴木復三郎 印

全部全村大字全村第六番地 5本

沼田警察署長

警部 井上善三殿

地主承諾書（略）

舞台平面略図（略）

村長・区長の同意書（略）

素人演劇芸題目録



小仁田の村芝居に使用した木の刀（近藤義雄撮影）

- 一、一谷嫩軍記
 - 一、全
 - 一、全
 - 一、全
 - 一、假名手本忠臣蔵
 - 一、全
 - 一、源平布引滝
 - 一、全
 - 一、絵本太功記
 - 一、奥州安達原
 - 一、全
 - 一、平假名盛衰記
 - 一、妹背山女庭調
 - 一、神靈矢口渡
- 大序
陣門の場
羽生の段
熊谷物語
三段目
七段目
二の切
三の切
十段目
二の切
三切
二の切
源七上使の段
八部物語

- 一、蘭肴待新田系図
 - 一、碁太平記白石唄
 - 一、忠臣蔵二度目清書
- 渡芸者人名

利根郡水上村大字小仁田村

鈴木 復三郎

明治四年拾老月生

木村 周作

明治十年九月生

(以下二十八人略)

三段目
五段目

山科の段

明治卅三年四月四日

印 東京市浅草区役所 印

「素人演劇」とあるように、地芸居を主としたが、鑑札人の座元は明らかでない。

四、歌舞伎舞台

(一) 藤原諏訪神社歌舞伎舞台

所在は水上町大字藤原字関。藤原諏訪神社境内である。構造は県下各地に遺っている常設歌舞伎舞台と同系のもので、木造平屋建カヤ葺き入母屋造り、壁間は四方吹き抜きになっている。間口九・二メートル(五間)奥行五・五メートル(三間)、うち舞台の二重を終戦後固定して造り着けた際に後方に三尺持出し、下屋を下ろしたものを加えてあるから、もとの奥行は二間半のようである。終



藤原諏訪神社の歌舞伎舞台 (萩原 連撮影)

戦前までは二重は固定してなかったというから平舞台であるが、歌舞伎をやらなくなった代りに青年団などで現代の芸能を上演するために必要となって固定してしまった。二重は間口三間、奥行一間半、高さ五六センチである。本舞台の床面の高さは六八センチある。建築年代は棟札の類がないので決定的なことはわからないが、他の町村所在のものからみて明治初期のものではないかと考えられる。二重をどう動かしたかを示す装置の

第二〇七号 鑑札写

八等 俳優縁人営業鑑札

東京神田区猿楽町貳丁目

俳優

第貳番地村社市之丞方寄留

芸名

林 彦次郎

岩井紫龜司

文政十年生

明治二十五年三月十日

印 東京市神田区役所 印

鑑札写

第一四八五号

三等 遊芸縁人 営業鑑札

東京市浅草区新吉原揚屋町

義大夫

第六番地五十子市太夫方寄留

芸名

金子 七郎

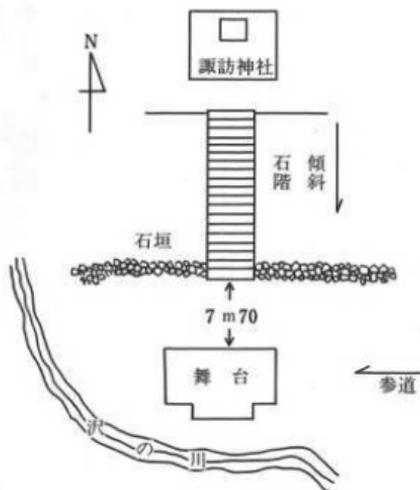
竹本政和太夫

嘉永六年十一月一日生



藤原舞臺断面図

関係は何もないのであるが、おそらく左右引き分けのみがあつて回り舞台式の仕掛けは無かつたものと見るべきである。もしそうであれば左右引き分けのときのレベルになつたものがあつてもよいはずであるが現存していない。舞臺の正面にはもちろん両端の



藤原舞臺配置図

柱以外は柱を用いない。正面を横に巨木でつくった虹梁をあげているが、虹梁は両端に唐草模様からヒントを得た装飾的な彫刻が施されているが、通常の民家でないことがわかる。

以前はもちろんこの奥地にまで盛んに行なわれた歌舞伎芝居を演じたのでその都度利用されてきた。しかし、時代の推移で歌舞伎芝居は全く行なわれず、現在は藤原地区の獅子舞が使っているに過ぎない。この獅子舞の上演については獅子舞の項に記したが、毎年九月七日の諏訪神社の祭典に際し、藤原上組（現在は上区と称している）、中組（同中区）、下組（同下区）の獅子組が毎年交代で上演している。大道具はすぐ前方の山頂にある諏訪神社の社殿の中に澳が十二枚保存されている。この澳は素朴なもので、書や俳句などの貼り交ぜの澳である。これを当日は舞臺につけて使用することになっている。引き幕もあつたというが現在は所在不明である。水引き幕は保存されているというが今回の調査では実現することはできなかった。

この舞臺で注目される点は建築物そのものが山村に在るということはもちろんであるが、その存在価値の最も大きな一つは周囲の地形利用に拠る観覧席の設計の面白さである。最近四国の小豆島の歌舞伎舞臺における観覧席の設計が舞臺研究家の間で注目されているが、従来多くの地方歌舞伎舞臺における観覧席は舞臺本屋と同一平面、すなわち舞臺前面の平地を利用した平土間式ものがほとんどであつて、下から舞臺を仰視する視角で設計されている。わずかに国指定の重要民俗資料で勢多郡赤城村の上三原田の歌舞伎舞臺のように、平土間に傾斜をつつ、後方へゆくほど高くしているものもある。また側面の小高い地形を利用して、傾斜をつくれるようである。これは非常に進んだ設計であるといえる。しかし、ギリシヤやイタリーのローマに遡る古代劇場のように、円形に観覧席を周らし、舞臺（演ずる場所）を最も低い位置とし、周囲を階段状にして俯視できるようにしたのは日本にはない。しかし、小



藤原諏訪神社境内舞台の観覧席の石垣

(萩原 進撮影)

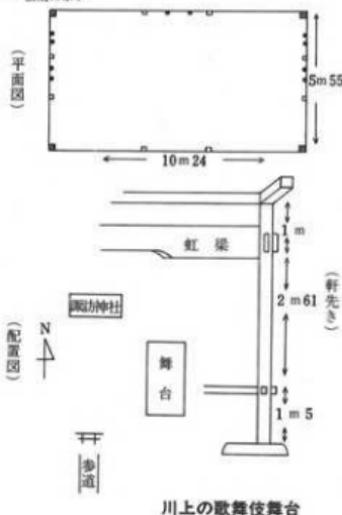
豆島の舞台は、舞台前面の丘壁を利用して階段式の観覧席を設けてある。古代ローマやギリシャのように、円型に舞台を周回してはいないが、上から俯視できる視角の中にステージをおくという原則は一致している。小豆島の舞台が目玉されたのはその点であった。ところが、藤原の諏訪神社境内の舞台もこれに近い設計になっているということである。すなわち諏訪神社が高い山の頂上に建てられているが、その麓を平らにしてそこに舞台の前(南)の平地を広くして、舞台前から七・七メートルのところへ高さ約一メートルの石垣を積み、その石垣の上は昔から特別な者の来賓席、招待者席としたいわば敷敷である。この石垣を袖にして、中央から山の頂上へ石階がつくられている。石階の両側は緩傾斜の草地になっているが、そこが一般の観覧席に使われたのである。この位置から舞台を見ると、上から見おろす恰好になる。もちろん初めから意図して設計したものが、地形の制約でそうしたのかは明らかでない。このことは小豆島の場合にもいえることであろう。古代ギリシャの円型劇場のように、意図して設計されたものと同一視はできないにしても、結果的に同じ発想として受けとれることは面白いといわなければならない。

(二) 川上の歌舞伎舞台

水上町大字川上の諏訪神社境内にある。あたらしく先年開通した有料

道路のすぐ道上に位置している。この諏訪神社は部落の東端にあり、社殿は南面して建てられているが、この村がかって豊かであったらしく、参道には二基の石鳥居がある。その境内右側に西面して歌舞伎舞台がある。現状は柱のみで壁間のない姿で建っている。間口一〇・二四メートル(五間半)、奥行五・五五メートル(三間)である。床は地面から一〇二メートルありかなり高い。これは観覧席が水平であるために執られた設計であろう。四隅の柱はもとのままである、四方とも四隅柱の間に、大正時代に取付けた後の補充による間柱が付けられている。四隅の柱は二五センチのケヤキを用いた角柱である。四隅柱の礎石は造り出しまである立派なものを用いている。屋根は現在トタン葺きで、朱色のベンキで塗られているが、もとはワラ葺き屋根であったが葺き替えが大変なのでトタンに葺き変えた。そのとき天井の小屋根を直し、棟をすつと下げ、勾配を緩くしてある。ワラ葺きでは雨の水はけがよいように勾配をきつくするため棟を高くするが、棟を下げたために、軒高と棟高のバランスがとれ、外観はきわめて美しいたすまいを見せている。天井は吹き抜

■ 元からの柱
□ 棟の腐柱
● 根太の本柱



川上の歌舞伎舞台

けであったものをベニヤ板の格天井に直して張りつめてある。

回り舞台のナベブタはなかったというから通常の平床であったと思われる。縁の下に石をもって築いたものが遺されているのは、舞台として使わなくなったあと、礎を設けて集会用に利用していたことを物語っている。正面の梁は舞台という虹梁であるが、幅八〇センチほどの巨大な一木が一〇メートル以上わたってつけられている。しかも単調な角のままではなく、右と左に立派な唐草風の彫刻を施しており、大部分をえぐってある立派なものである。舞台の正面を除く三方の横木おのおの二個ずつ計四個の切込みがある。これは舞台の二重を左右に引き分けるときに、既設の舞台面では狭すぎるので、三方に根太を渡して臨時の舞台面の増設をしたときの根太をさし込むためのもので、県下の舞台にいくつかの例が見られる。屋根はハネ木でその都度作られた。

大道具の襖などはなくなっているし、引幕もないが水引幕はあるだろうという話であった。本格的に使用された最後は明治三十九年豊作祈願のときだったという。

五、その他の民俗芸能

(一) 湯原の翁面

水上市町の中心である湯原の区長事務所に昔から伝えられている白と黒の翁面(白式尉と黒式尉)、神楽鈴は製作年代からはそう古いものではない。切れ顎は一字切れで、やや左右が下がっている。神楽鈴もそう古いものではないが、しかし少くも江戸時代のものであることは間違いない。白式尉の方がやや大きい。なぜこの翁面が伝えられているかという点、昔は(明治前後まで)名主の書類引継ぎのときに、能の式三番を一舞舞ってから引継ぎを終った慣例でそのときに用いたものと言われている。この翁式三番は、神事芸能としては中世において地方農村に定着し



湯原に伝わる能面(阿部 孝撮影)

には邑楽郡板倉町のように最近まで行なわれて一式を保存するものや、衣裳箱と衣裳のみのもの、翁面のみのところとところがあるが、前橋市二の宮町のように現在も毎年実演しているところもある。これが人形操りと結んだものが勢多郡柏川村込皆戸、前橋市下長磯町にある。この式三番の中でも特に翁面が神聖視された。込皆戸でも下長磯でも、この面箱の下を村人がくぐると無病息災を得られると信じてきている。そうした式三番は、すべての謡曲の「翁」によって演じられるものがあるが、湯原でもかつてそれが演じられていたとすれば、従来平坦部にしかなく、わずかに山村では多野郡上野村で発見された以外極めて例が少ないなかの一例になる。しかし、中啓、衣裳などは早くに失われてしまっているので、確かに演じられたかどうかということはなかなか決め難いが、伝承を信ずる以外になく、伝承を信ずるとすればかつて式三番が湯原で行なわれていたと見てよいであろう。

(二) 旅芸人と村外の芸能者

村の民俗芸能に直接間接に影響を与えたものには旅芸人であり、村外の芸能保持者である。

昔はいろいろの旅芸人がやって来た。祭文語りは棒の先にサク杖を付けて来て、祭文を語った。チヨボクレはワニロを二個指に挟んでカチカチ鳴らして歌った。ゴゼは首で子どもの手引きを連れて二人で来た。子どもがゴゼの荷を持って手を引いた。ヨカヨカアメヤは白沢村高平から来た。アメのはいった飯台を頭へのせ、歌を歌った。

(四)

かくら 昭和初年まで、高崎、佐野から来た。五・六人の組で車を引いて、太鼓・小道具を持ち歩き、一軒、一軒まわり、芝居、曲芸を見せた。(湯原)

角兵衛子 大正まで来た。親方が子ども二人連れて歩いた。(湯原)
ギリギリ餅屋 頭に桶をのせ旗をたて、太鼓をたたいて祭文などをよんだ。

春駒 川場からきて、女ばかり二人で組んできた。

三河万才 戦前まで二人できた、一人を太夫さまという。各部落の区長事務所へ泊ってあるいた。

ゴゼ 越後からきた。それを宿泊させてきいた。

アガタ 越後からきた。箸を二本組んで、それをおどらせてノリウツリ、死者になりかわって対話した。信州に多いアガタ巫女の系統である。(小仁田)